

統合5周年記念  
報告書

希望のもてる社会づくり  
いま、地域を考える

シンポジウム  
『地域と活性化』

全労済協会

## ごあいさつ



財団法人全労済協会  
理事長 高木 剛

全労済協会は、勤労者福祉事業団体や労働組合などの財産を万が一の災害にたいし保障することを目的に設立した（財）全国勤労者福祉振興協会（1982年11月設立）と、勤労者の福祉や生活の向上のためのシンクタンク事業をおこなうこととして設立した（財）全国労働者福祉・共済協会（1989年11月設立）が、2004年6月に組織統合、新たに（財）全国勤労者福祉・共済振興協会としてスタートして、2009年6月で5周年を迎えることができました。

全労済協会が統合して、5周年を迎えることができたのも、前身の両組織の20年にもならんとする活動の成果だといえます。そして統合5周年を記念して、またこの間の事業の成果を踏まえ、東京・福岡で記念講演会とシンポジウムを開催いたしました。

このたび開催しましたイベントは、「希望のもてる社会づくり—いま、地域を考える」をテーマに地域問題を取り上げました。地域の抱える課題は、福祉、環境、子育て、介護、そして防災、コミュニティや地域振興など多岐にわたっています。そのなかで、今回は、防災、協同、活性化という課題を取り上げ開催いたしました。

東京・福岡の4会場ともご多忙にもかかわらず多くの方にご参加いただきました。5月15日に開催しました東京・九段会館での記念講演会「地域と防災」には414名の方のご参加、5月22日の福岡・都久志会館ホールでの記念講演会「地域と協同」には491名の方のご参加、また、東京・全労済ホール/スペース・ゼロでのシンポジウム「地域と活性化」には376名の方のご参加、福岡・アクロス福岡でのシンポジウム「地域と活性化」には307名のご参加を賜りました。また、ご多忙のなかご登壇いただきました講演、鼎談、パネルディスカッションの講師・パネリストの方々には、地域課題にたいする示唆に富む貴重なお話をいただきました。さらに、共催・後援団体を始め、開催にあたり諸団体のみなさま方には多大なご尽力を賜りました。

このように多くのみなさま方のおかげをもちまして、当協会統合5周年記念イベントは成功裡に終了することができました。紙面をおかりして深く感謝申し上げます。

全労済協会としては、本5周年記念イベントの成果を踏まえ、さらに事業の発展を目指してまいる所存ですので、今後ともご指導、ご鞭撻のほど、よろしく願い申し上げます。

本報告書は、東京・全労済ホール/スペース・ゼロと福岡・アクロス福岡の2会場で開催したシンポジウム「地域と活性化」をまとめたものです。

地域社会の疲弊がいわれるなか、地域活性化のため各地で地域おこしやまちづくりなどの取り組みが展開されています。それらの取り組みは、地域の特徴や資源を生かした地域に根ざした多様な取り組みとして注目されています。本シンポジウムは、地域活性化の多様な実践の経験のなかから、木村農水省企画官による「講演」、つづいて岡崎法政大学教授をコーディネイターに各地で活躍するスペシャリストによるパネルディスカッションを通じて、地域活性化の課題と展望を探っていきます。本報告書が労働団体や行政関係者、研究者、地域で諸活動に取り組むみなさま方の一助となれば幸いです。

## 目次

■ 開会挨拶 .....	p6
■ 東京フォーラム及び福岡フォーラム／講演 .....	p10
「地域現場から描くソーシャルデザイン」	
農林水産省 大臣官房 企画官 木村 俊昭 氏	
■ 東京フォーラム／パネルディスカッション .....	p24
「地域力の創造に向けて」	
〈コーディネーター〉 法政大学 現代福祉学部 教授	岡崎 昌之 氏
〈パネリスト〉 能登乃國ゆするぎ塾 塾長	大湯 章吉 氏
株式会社土澤まちづくり会社 専務取締役	猿舘 祐子 氏
NPO 法人フュージョン長池 理事長	富永 一夫 氏
株式会社いろいろ 代表取締役社長	横石 知二 氏
■ 福岡フォーラム／パネルディスカッション .....	p54
「地域力の創造に向けて」	
〈コーディネーター〉 法政大学 現代福祉学部 教授	岡崎 昌之 氏
〈パネリスト〉 鹿屋市串良町柳谷 公民館 館長	豊重 哲郎 氏
NPO 法人ハットウ・オンパク 運営室長	野上 泰生 氏
農家レストラン「ひまわり亭」代表	本田 節 氏
株式会社いろいろ 代表取締役社長	横石 知二 氏
■ 閉会挨拶 .....	p80
◎ 参考資料 .....	p82
・ 講演「地域現場から描くソーシャルデザイン」	
・ パネルディスカッション「地域力の創造にむけて」	

### 東京フォーラム

- 日時 2010年5月24日(月) 13時開会
- 会場 全労済ホール／スペース・ゼロ
- 主催 (財)全労済協会
- 共催 全労済、全労済東日本事業本部、  
全労済東京都本部、日本再共済連
- 後援 内閣府、国土交通省、連合、中央労福協、  
退職者連合、(社)教育文化協会、  
(社)日本共済協会、時事通信社、  
(社)内外情勢調査会

### 福岡フォーラム

- 日時 2010年6月7日(月) 13時開会
- 会場 アクロス福岡／国際会議場
- 主催 (財)全労済協会
- 共催 全労済、全労済西日本事業本部、  
全労済福岡県本部、日本再共済連
- 後援 内閣府、国土交通省、連合、中央労福協、  
退職者連合、(社)教育文化協会、  
(社)日本共済協会、時事通信社、  
(社)内外情勢調査会

## 木村 俊昭 (きむら・としあき) 氏

## ●農林水産省 大臣官房 企画官

昭和35年北海道生まれ。昭和59年に小樽市入庁。財政部、議会議務局、企画部、総務部を経て産業振興課長、企画政策室主幹。平成18年から内閣官房・内閣府企画官として地域再生策の策定、地域と大学の連携等を担当。内閣府経済社会総合研究所特別研究員。平成22年4月小樽市産業港湾部副参事（次長職）として中心市街地活性化等を担当。同6月から農林水産省大臣官房企画官として農林水産業による地域活性化、農商工連携等を担当。NHKプロフェッショナル「仕事の流儀（第118回・平成21年5月19日・25日放送）」地域活性化伝道師（国）。地域活性学会理事（広報交流員長）。北陸先端科学技術大学院大学・東京農業大学非常勤講師ほか。木村俊昭のブログ <http://kimutoshi.jugem.jp/>



## パネルディスカッション・コーディネーター／略歴

## 岡崎 昌之 (おかざき・まさゆき) 氏

## ●法政大学現代福祉学部・大学院人間社会研究科 教授

岡山市出身。早稲田大学政治経済学部経済学科卒業。（財）日本地域開発センター企画調査部長、月刊『地域開発』編集長を経て、平成6年から12年まで福井県立大学。平成13年より現職。「まちづくりの思想」、「地域経営論」、「地域ツーリズム論」等を担当。自治体学会代表運営委員、地域づくり団体全国協議会会長、まちづくり市民財団理事、総務省人材育成アドバイザー、国土交通省過疎集落研究会委員、国土交通省国土審議会政策部会専門委員、全国地域リーダー養成塾主任講師、観光政策審議会専門委員、九州ツーリズム大学観光まちづくり学科長、他を歴任。



## パネリスト／略歴

## 大湯 章吉 (おおゆ・あきよし) 氏

## ●能登乃國ゆるぎ塾 塾長

昭和28年生まれ。地域づくり団体全国協議会幹事、(財)日本青年協会理事（石川県支部事務局長）、自治体学会会員、石川地域づくり協会運営委員長、地域力創造アドバイザー、中能登町国際交流の会会長などを歴任。石川県内の地域づくり団体の支援や、着地型観光「能登うまみん」の運営、集落活性化事業、小学生の体験農園、中学生の海外派遣、大学コンソーシアム石川の審査委員、協働のまちづくりアドバイザーなどを務める。



## 猿舘 祐子 (さるだて・ゆうこ) 氏

●住民参加協働型第3セクター (株)土澤まちづくり会社 専務取締役／猿舘酒店店主  
 岩手県和賀郡（現花巻市）出身。国土交通省・道路の社会実験「遊びの歩道」、内閣府・市民活動団体等支援総合事業「新・長屋暮らしのすすめプロジェクト」等を企画実施。地域資源をアートに見出し、街かど美術館アート@つちざわ（土澤）は、経済産業省の新・がんばる商店街77選にも選出された。現在、土澤商店街上町地区で行なわれている「こっぼろ土澤」小規模開発建替え事業の事業主体である合同会社「土澤長屋暮らし」代表社員も務める。



## 富永 一夫 (とみなが・かずお) 氏

### ●特定非営利活動法人NPO フェージョン長池 理事長

昭和27年生まれ。専修大学経営学部卒。東京都「心の東京革命」推進会議委員、東京都水道事業経営問題研究会委員、国土交通大学講師、関東ICT推進NPO連絡協議会（総務省関東総合通信局）副代表幹事、総務省地域創造グループ地域の活性化に関する研究会委員、内閣府地域活性化伝道師、内閣官房首都圏地域活性化推進連絡会委員などを務める。



## 横石 知二 (よこいし・ともじ) 氏 ※福岡フォーラムにも出講

### ●株式会社いろどり 代表取締役社長

昭和33年生まれ。上勝町農業協同組合において彩を開発し、平成3年特産品開発室長に就任。山の資源を生かした商品開発で全国的な注目を浴びる。株式会社いろどりの責任者として彩をはじめ、特産品の企画販売をおこなう。高齢者が使える情報ネットワークシステムを開発。平成21年より現職。徳島県の山間の町上勝町で、全国の料亭、ホテル等で出される料理の名脇役といわれる「妻物」の生産に取り組んでいる。過疎と高齢化の町を再生したことで、「News Week (日本版)」世界を変える社会起業家100人に選出される等、テレビ、雑誌、新聞で取り上げられる。



## パネリスト／略歴

## 福岡フォーラム

## 豊重 哲郎 (とよしげ・てつろう) 氏

### ●鹿児島県鹿屋市串良町柳谷 (やねだん) 公民館長

昭和35年県立串良商業高等学校卒。東京都民銀行入社後、昭和46年Uターンして串良町上小原うなぎの養殖を始める。昭和54年串良町上小原校区公民館長、昭和56年うなぎ専門店「うなぎの川豊」創業、昭和60年民間主導型「串良やったる会」結成、平成8年うなぎのエキス「ヘルプアイ」を独自に開発。村づくり活性化アドバイザーを経て柳谷自治公民館長就任、現在に至る。



## 野上 泰生 (のがみ・やすお) 氏

### ●NPO法人ハットウ・オンパク 運営室長

昭和40年生まれ。大学から社会人を東京で過ごし、平成6年家業の旅館「野上本館」を継ぐ。平成10年頃から地域づくり活動に参加。別府八湯のまちづくり運動は、各現場における住民の問題意識をオンパク等の機会を通じて顕在化させつつ、地域内連携による解決の芽を育て、コミュニティ・ビジネスとしての結実を目指すという流れで進められている。現在、「オンパクモデル」を全国各地に移出する事業を展開している。



## 本田 節 (ほんだ・せつ) 氏

### ●農家レストラン「ひまわり亭」代表

昭和29年熊本県球磨郡相良村の専業農家に生まれる。高校卒業後、地元の農協に就職。そして結婚。37歳のときに1年間のガンとの闘病生活を経験。それをきっかけとして、より深く、食・農・命について考えるようになる。少しずつ健康を回復し「ひまわりグループ」を結成し、ボランティアやまちづくり活動を始める。そこで出会った仲間たちと地産地消“食”を地域資源とした拠点、郷土の家庭料理「ひまわり亭」を立ち上げ現在に至る。



## 開会挨拶

**司会：**ただいまより全労済協会統合5周年記念シンポジウム『地域と活性化』を開会させていただきます。はじめに主催者を代表いたしまして、全労済協会理事長・高木剛よりごあいさつを申し上げます。

**高木：**ご紹介いただきました、理事長を仰せつかっております高木剛でございます。ご多忙の中、本日は全労済協会の統合5周年記念のこのシンポジウムに、かくも多数のご来会を賜りましたことを、主催者を代表して心から御礼申し上げたいと存じます。

まず、全労済協会につきまして、組織的な歴史等を少しご紹介させていただきたいと思っております。1989年秋の連合のスタートにあたって、連合をサポートするいくつかの団体も作られました。

一つは皆さんもよくご存知の連合総研です。これは連合の政策制度要求等の活動をもう少し専門的な視野も入れてサポートしようではないかということで、どちらかと言うと政策作りのためのシンクタンクというような役割で連合総研が設立されました。

二つ目は、連合の国際活動をサポート、とりわけ途上国の労働組合、あるいは社会運動をなさっている人たちを連合として応援する必要があるという目的で、国際労働財団が設立されました。

そして、私どもの全労済協会の前身、全国労働者福祉・共済協会で、労働者福祉あるいはいろいろな社会的な問題、社会保障等についてのシンクタンク機能もやはり必要なのではないかということで、1989年11月に設立されました。

さらに、この全労済協会に先立つこと7年前に、労働組合や関係諸団体、いわゆる組織団体型の共済を取り扱う目的で、全国勤労者福祉振興協会が設立されました。

この三及び四番目の両組織が2004年に統合し、現在の全労済協会、全国勤労者福祉・共済振興協会に発展してきたわけです。その両組織の20年を超えるいろいろな運動を一体化して、より運動を推進する力を高め、またいろいろな活動のレベルアップを図っていくことを目標に、現在、努力しているところです。

したがって全労済協会の仕事を大きく分ければ二つになります。一つは組織団体型の共済の取り扱いです。加えまして共済の分野では、地方の中小企業の皆さんが参加しています、各地域の中小企業労働者の方々の福利厚生を取り扱う組織がありますが、その組織に協力させていただいています慶弔共済制度もあわせて行っています。

もう1つの柱が、シンクタンクとしての活動です。このシンクタンクとしての活動については、例えばここ数年、地域社会、コミュニティという視点で、いま地方分権あるいは新しい公共などという概念も言われるようになりましたが、そういった活動領域につきましての調査研究を進めております。

この度、全労済協会の統合5周年の記念イベントを、この地域社会の問題に焦点を当て、東京と福岡で開催することとし、第1弾では東京の九段会館と福岡の都久志会館で記念講演会を開催させていただきました。そして、第2弾として同じく東京と福岡で、まさに地域社会を活性化するという視点で、全国各地でいろいろな活動に取り組んでおられます皆さん

にご来会いただき、講演とパネルディスカッションによるシンポジウムを開催させていただいております。

この地域社会あるいはコミュニティといった言葉が、それぞれの社会が成熟していくことで大変意味が高まっております。

例えば、司法の世界では裁判員制度というものが昨年5月からスタートしています。これは裁判所で刑事事件について、その事実関係がどうなのか、あるいは犯した犯罪についてどういう刑で償ってもらえばいいのかということについて一般市民の目線で事実認定をし、量刑も決めてもらいます。もちろん9人のうち、3人はプロの裁判官が参加しますが、プロの裁判官の人たちは法律の解釈論、あるいはいろいろな手続き等の専門家として参加するわけで、判断の主体は一般市民の、まさに成熟した市民社会の常識で判断をしていくべきではないかという制度です。

そういう意味では、この地域活性化というテーマにつきましても民主主義のレベルを高めるという意味もあり、成熟した市民社会を作っていくという目標もあるわけです。私どももそういった日本の社会づくりのために、皆さん方といろいろと知恵を出し合い、力を合わせて、活性化された地域社会、あるいは市民の参加レベルの高い社会を築くということを目指してこの運動を続けているわけでございます。

このシンポジウム「地域と活性化」でご講演いただく木村俊昭さんは、地域活性化をテーマに大変大きなご活躍をなさっておられる地域社会づくりの先達です。その木村さんにまずお話をいただき、その後は法政大学の岡崎先生にコーディネイターをお願いしながら、地域社会で特徴のあるまちおこし、あるいは市民参加の形態を作るべくご努力を長年にわたってしていただいております、それぞれ4名の方に討論を行っていただきます。

木村先生、あるいは岡崎先生、あるいはパネリストの皆さんに心からお礼を申し上げつつ、またご参加いただいた皆さんに重ねて御礼を申し上げまして、主催者を代表してのご挨拶とさせていただきます。

---

◇ 東京フォーラム及び福岡フォーラム ◇

## 講演

---

「地域現場から描くソーシャルデザイン」

木村 俊昭 氏

農林水産省 大臣官房 企画官

## 講演

**司会：** それでは、これより記念シンポジウム「地域と活性化」の第一部の講演に入らせていただきます。『地域現場から描くソーシャルデザイン』と題しまして、農林水産省大臣官房政策課企画官の木村俊昭様にご講演いただきます。

私から簡単にプロフィールをご紹介させていただきます。

木村様は、1984年に小樽市に入庁され、産業振興課長、企画政策室主幹などをへて、2006年からは内閣官房・地域活性化統合事務局企画官、農林水産省大臣官房企画官などを歴任されてきました。町おこしの仕掛け人としてご活躍中です。また昨年5月にNHKテレビで放送されました『プロフェッショナル 仕事の流儀』でも木村様のご活躍ぶりが詳しく紹介されています。今年4月からは小樽市産業港湾部副参事として中心市街地活性化などをご担当されましたが、本年6月1日からは再び農林水産省大臣官房政策課企画官としてご活躍中です。

それでは、木村様にご登壇いただきます。どうぞ皆さん、大きな拍手でお迎えください。

**木村：** ご紹介いただきました、木村俊昭と申します。どうぞよろしく願いいたします。

全労済協会の統合5周年ということで、たいへん喜ばしいときにお呼びいただきまして、まず感謝申し上げたいと思います。また、シンポジウムの準備をいただいた方々には常日頃から私に連絡を取っていただき、感謝申し上げたいと思います。

前半については、地域活性化についての話をさせていただく中で、ホワイトボードを使います。ホワイトボードはここから後ろのほうに映し出させていただきますので、皆様方にもしっかり見えると思います。後半部分の残り15～20分ぐらいは、皆様のお手元に配布させていただいておりますパワーポイント資料（参考資料：82頁参照）に基づきまして、お話をさせていただければと思っています。

なお、講演内容等に関して質問のある方は後で考えて、こういうことはどうなのだろうということがありましたら「木村俊昭」でインターネットでアクセスしていただきますと、ちょうど私のアドレスを地域活性化伝道師として公開しています。そこでは、いわゆるネットワーク情報シートというものがありますので、どうぞ遠慮なくメールを入れていただければと思っています。

あわせて、私は個人的にメールをしています。今月か来月でおそらく2,000人になるのではないかと思います。全国の地域活性化に汗を流して一生懸命な皆様方とのネットワークを張っています。そこに関心のある方は、メールを送っていただければと思います。

また、ブログについては「木村俊昭 ブログ」と検索していただきますといちばん最初に出てきますので、そこをご覧になっていただければ、今回のシンポジウムについても紹介をさせていただきます。

### 地域づくりについて考えるきっかけは祖母との生活

それでは、まず最初に、いま、高木理事長様のお話を聞いていまして、今日この場でどのような話をしようかということを考えていました。1つ目は、私は小学校に入るまで祖母に

育てられていて、ほとんど毎日のようにお寺に連れて行かれていました。

お寺ではお経や説法を聞くのですが、その後に味噌汁と漬物を出していただけるので、私は付いていったのです。その道すがらいつも言われていたことが何だったのかということをつい最近もずっと思い起こしていました。ちょうど55歳で祖母が亡くなったのですけれども、道すがらよく言っていた言葉は、「気持ちよく仕事をしよう。誰かに何かを頼まれたら気持ちよくやろう」ということでした。道すがら言う言葉はそのことばかりなのです。

私がTBSの『キズナ食堂』に8回ほど出ていたときも、黒柳徹子さんに言われたのは「あなた、小さいときからずっとロープでしばられて外を歩いていたんですってね」ということでした。実はその通りだったのです。いつも祖母が私をロープでしばって、道すがら言うことは、相手から言われたことは気持ちよくやろうということだったのです。

私には5歳下の弟がいるのですけれども、2人がいつも母親から言われていたということは「お父さんが、もっともあなた2人を愛しています」ということでした。母親はつらいこともたくさんあったとも思うのですが、そのことしか言わないのです。父は平成3年に56歳で亡くなってしまったので、記憶に残っていること、いままさに思うことは、母親の言ったその言葉です。「常にあなた方のことを思っている」ということです。

そう育てられてきて、ふと思うことは、くどくどといろいろなことを言っても記憶には残らないということを実は感じていました。まさに気持ちよく仕事をしようと。人に言われたら気持ちよくやろうと。嫌々やっても、やるのだったら気持ちよくという。それがすごく大事だといま感じています。

まさにいま地域づくりの中でよく引き合いに出すのは、今年の『築城せよ！』という映画です。それは上映前に見させていただきました。どのような映画かといいますと、城を持ち得なかった戦国武将が、現代の役場の職員1人と町民2人に乗り移るといいます。片岡愛之助さんが主役で役場の職員に乗り移り、「築城せよ」と言ってダンボールで城を作るという映画です。

実はこの映画はまさに今流にたとえれば、町長を始めとして町民の皆さんは、地域の活性化とは工場を誘致することであると言っているのです。工場さえ誘致すればこの町は元気になるんだと言っているのです。そこへ、役場の職員の1人に城を持ち得なかった戦国武将が乗り移って、「築城せよ」と叫んで、3人でダンボールを集めて城を作り始めるのです。そのときに、だんだん町民の皆さんたちが、一生懸命に築城しようとしているこの3人にどんどん仲間入りしていくのです。

いわゆる町づくりというのは、工場さえ誘致すれば、観光客さえ来ればとかいうことでのいいのだろうかということに疑問を持ち始めるのです。活性化とは、そういう外からのものもちろん大事なときもありますが、そこを持ってきたことによって本来、本当に活性化するのか。いわゆる地域が一体となってやっていくものではないのか。工場さえ、観光客さえというものではないのではないのか。

この映画が封切られるときに新聞広告が掲載されました。新聞広告を打つときに、私が地域活性化伝道師ということから「ぜひコメントを」と言われました。私は多くの方がこの映画についてコメントを出して、その中の1人だと思っていたので、「恕の心を体感する感動の連続の映画でした」というコメントを出しました。何々さえあれば活性化するという、本

## ■ 講演「地域現場から描くソーシャルデザイン」

当にそういう地域づくりというのがあるのか。やはり地域が一体となって、思いやりの心、恕の心を持って行っていくべきではないのかということを書きました。

このコメント広告の案が私のところにメールで届きました。そうしたら、その案は「恕」ではなく「怒」となっていました。「怒の心を体感する感動の連続」というのは、怒りの連続です。それは直していただいて、地域づくりというのやはり思いやりの心が大事で、地域は一体となってやっていくものだということにして直していただきました。もっと驚いたのは、私1人のコメントしか出ていないということだったのです。非常に驚きました。

広告は何紙かの新聞に出たのですが、これが出たときに、そのときに高校生や大学生、一般の方からの問い合わせが殺到したのです。と言いますのは、町づくりにおける恕の心、もしくは地域づくりにおける恕とは何なのでしょう。そもそも恕というのは、どういう意味なのでしょうかということだったのです。そこを私は担当者に伝えてありましたので、恕というのは思いやりの心であると。地域は一体感を持って、工場さえあれば観光客さえ来ればというのではなく、もちろんそれも一つとして大事だけれども、やはり思いやりの心を持ってやっていくことが大事なのではないかということを書いていただいたら、映画の前売り券が完売したそうです。

完売した後に、「舞台挨拶に来て」という連絡が私にきました。普通は映画に出ない人が舞台挨拶に出ることはないですね。それでも私は昨年8月に新宿で舞台挨拶をしているのです。そのときに、「何か最後に一言ありませんか」ということだったので、「ぜひこの次は『落城せよ』という映画か何かでちょい役でけこうですので出していただけませんか」と監督に言いましたら、監督はいきなり何と言ったかという「分かりました」とおっしゃったのです。私は別に出たいから言ったのではなく、舞台挨拶というのはコメント者ではなく実際に出演の方がお話しするのがいいのではないかと考えて言ったわけです。

ここで言いたかったことは、地域づくりというの何々さえあればいいのではないかとということで本当にいいのだろうかということ、常日頃から考えなければいけないということです。

### キーワード、キャッチフレーズの大事さに気づく

話は変わりますが、小樽に行ったことがある方はいらっしゃいますか。行かれた方は、ぜひまた近々行っていただければと思います。行ってない方は今からお話をしますので、ぜひ小樽に行ってください。

まずは、キャッチフレーズについてです。聖路加病院の日野原先生にお会いしたときに、「やはり人に物事を伝える、説明するには分かりやすくなければ」ということをよくおっしゃいます。私もそう感じています。どんなにいいことをやろうとしても伝わらないと協力者は得られません。そういう意味ではキャッチフレーズは重要です。これがすべていいということではないのですが、少しお話をさせていただきます。

先日、利尻島へ行って来ました。利尻町長に呼ばれ行って来ました。そのときに利尻町出身の方で、高校を卒業して小樽の会社に勤めていた方がいらっしゃいました。この方は50歳の男性ですが、50歳になって、このまま人に使われているよりも自分で商売をやる決めたのです。

利尻出身なので「利尻なら昆布だ」といって、昆布屋をやることに決めました。そこで3日間考えたのです。何かと言うと、キャッチフレーズです。私が相談を受けたときに「キャッチフレーズは確かに大事です。分かりやすく自分の会社はどのようなかということ伝えるキーワードは大事です。しかし普通は、商品である昆布がどのような商品か、どういう配列か。そういうところをもっと重点的にやってはいかがですか」と言いました。そうしたら「いや、もうそれはいい。大事なのはキャッチフレーズだ」と、その男性は言うのです。



それから3日間、その男性はほとんど寝ないで考えたのです。小樽に行った方はもう知っている方もいるかもしれませんが、そこで考えたキャッチフレーズというのが、「7日食べたら鏡をごらん」というようなコピーです。湯豆腐昆布だとか、いろいろな昆布製品のところに「7日食べたら鏡をごらん」と書いてあるのです。しかも、そこに「ほら吹き昆布店」と書いてあるのです。

この「7日食べたら鏡をごらん」というキャッチフレーズを聞いたときに、私は「大丈夫ですか?」と言いました。なぜなら、通常はこのあとのことを誰もが想定して、考えてしまいます。「7日食べたらどうなるのだろう」と。それで、店をオープンしました。案の定、主婦の方が7日分、8日分買っていったのです。「クレーム処理は社長が一手に負います。会社員には任せません。このことに関しては自分がクレーム処理を全部負います」と。

そうしたら、女性から、7日食べた後に社長に電話が入りました。「社長さん、7日食べて鏡を見たんだけど何も変化がない。どうなっているのか」と言ったそうです。そうしたら社長が答えるのです。「奥さん、個人差がありますから」と。

そうしたら怒るわけです。その女性は「7日ではだめなのか」と怒るわけです。社長は、「ですから、もう7日分食べていただいけませんか」と言うわけです。それで「7日分を大至急、こちら負担で、送料もこちら持ちで送ります。もう7日分、だいたい半月食べてみてください」と言った。半月後に社長が「奥さん、いかがですか」と電話を入れるのです。そうしたら、この女性は「定期的に買うにはどうすればいいのか」と言うのです。

この会社は、昆布だけで1年間に25トン扱っているのです。そこで社長はさらに、3日間、寝ないで別のキャッチフレーズを考えました。それが「お父さん、預かります」というコピーです。店には「7日食べたら鏡をごらん」と書いてあって、店の真ん中に「お父さん、預かります」と書いてあるのです。

よく夫婦づれで買物をする、「まだ終わらないのか。もうそんなに買わなくていいよ」とお父さんはうるさいです。ですから、お父さんを預かって昆布茶を飲んだり、ゆっくりしていただく。この2つのキャッチフレーズを考えただけです。

地域づくりの中で、もしくは分かりやすく人に伝える中では、キーワード、キャッチフレーズが実は大事なのではないかと。これがいいと言っているわけではないのですが。

このあいだ千葉で講演をさせていただいたときに、この昆布屋の話聞いて、私はこの会

## ■ 講演「地域現場から描くソーシャルデザイン」

社名は言っていないですが、小樽駅を降りた後に駅の案内所で「7日食べたら鏡をごらんは、どこですか」と聞いた方がいらしたそうです。そうしたら、案内所に的確に教えていただいたらしいです。そういう店は小樽には一軒しかないので。

このようにキャッチフレーズと言いますか、分かりやすくやっていることを伝えて、情報を共有していくことが実はすごく大事ななというように感じます。

また、話は変わりますが、ついこのあいだ、小樽から1時間ぐらい車で行くところに千利休の赤楽茶碗を持っている方がおり、会いに行きました。実は私は非常に関心を持っていて、佐賀県に行ったときには必ず人間国宝の方の工房などを回ります。

いわゆる地域、農村・漁村で本当にたいへんな中で、子どもたちが小学校、中学校、もっと高校までいたいだけけれども、小学校、中学校を卒業したら高校がないので地元でいられないということがあります。高校生になったら親元から出るけれども、やはり自分の生まれ育ったところが大好きだという子どもたちに、何らかの元気をつけることができないかということを考えています。ついこのあいだお亡くなりになった平山郁夫先生の鎌倉の自宅に、私も何度か通わせていただいています。やはり子どもたちには本物を見ていただきたいという思いを持っているので、ついこのあいだそこを訪ねてきました。

後から話をしますが、やはりモチベーションをいかに高めるかということが非常に重要だと思っています。私たちは意外に人のモチベーションを下げてしまうような言い方をします。「ずいぶん変わった髪形だけれども、どうしたの」とか、「ずいぶん顔色が悪いけれども、何か病気ですか」とか。人のモチベーションをぐっと下げることがあります。お会いするときに、できればどのようにモチベーションを高めていくのかということが、本来は重要なのではないかと。元気を失いつつあるときには、どうやってモチベーションを上げて元気に、いわゆるプラス思考で考えていくか。

### 地域活性化とは「地域全体の最適化」をめざすこと

私が昭和59年に小樽市に入ったときに驚くようないろいろなことがあったのですけれども、それは私がこのあいだ書いた本の中にも書いてありますので、詳しい事をお知りになりたい方はぜひご覧いただければと思っています。

その一つに「地域活性化とは何ですか」とよく聞かれました。また、同じように「先進地はどこですか」と質問されることもあります。先進地はどこですかという聞く方で驚くことは、先進地ならどこでもいいということです。「テーマは何ですか」と聞くと「テーマは何でもいいです。先進地なら」と言うのです。

先進地を探すのに、だいたい1～2年かかる。先進地を探し当て、みんなで視察に行こうというので1～2年かかる。それでいざ行ってみるとどうも違う、自分の町にはどうも当てはまらないとなる。どうも違うというので、また先進地を探し始めるのです。これをいわゆる先進地めぐりと言います。これをずっと探して、いつ実行するのか、いつ実現するのかという話になってくるわけです。

私は大学を卒業するときに2つのテーマを持っていました。それは、産業文化を世界に向けて発信する。それと地域の担い手。いわゆる小学校、中学校、高校の子どもたちにいかに地域に愛着心を持つ子どもに育てていただくかです。この2つを自分の本来の業務である本

業として、昭和56年に行政職員になったときに、この関係するセクションに行けばそのことをやる、自分がそれに関連したセクションでなければ、土曜、日曜、祝日に、いわゆる観光の施設をライトアップするとか、いろいろなことを手がけてきました。

福岡フォーラムのシンポジウムには柳谷（やねだん）の豊重哲郎さんが参加されます。実は豊重哲郎さんがやっている柳谷（やねだん）は、人口10万人ぐらいの鹿児島県鹿屋市の一つの町内会、小規模集落です。豊重さんのテーマ、キーワードは、子どもと文化です。私も以前よりこの2つをテーマに行政職員になろうと思っていましたので、ずいぶん似ているなと思いました。産業文化を世界に向けて発信する。いわゆる自分の地域で何がもっとも優位なのかということを考えて、それを情報として集めて、それを何も東京から発信するだけではなく地域から発信できるのではないか。「このことは私たちに聞いてください」ということです。

それと、地域を将来担っていく子どもたちが、まったく自分の町を知らないで育っていったのでは誠に悲しい。それだと地域間比較ができないのです。ですから担い手をしっかり育てるという意味で、小中高生のうちから地域の汗を流す、一生懸命にやっている方々に触れ合う機会を作っていくということを考えていました。まさに柳谷（やねだん）では子どもと文化をテーマとしています。私の考え方と非常に似ているなと思いました。

柳谷（やねだん）の豊重さんが、皆さん方と一緒にやっているのは、地域の小規模集落、この柳谷（やねだん）という地区の集落ですが、ここで畑を耕して、そこにさつまいもから焼酎をつくる、味噌をつくる。いわゆる加工品をつくるのです。そのときに1つは子どもたちを関わる。または、この焼酎を造った収益金で寺子屋を作っていく。さらに、ここは110世帯あるのですが、1世帯1万円のボーナスを出していく。いわゆるボランティアではないということです。

あわせて空いた家があったら、その家主と交渉して家賃を無料にし、他の地域から来る人に貸す。修復費は町内会で持つのでぜひそこを貸してほしいということで、そこに文化としてアーティストを誘致するのです。現在7名のアーティストが村に入って、5月3日～5日までは、ここでは芸術祭が行われていました。

この内容は海外で知られて、韓国のホテルのオーナーが3回、柳谷（やねだん）を見に来ました。ホテルの中にぜひこの柳谷（やねだん）の焼酎を入れた居酒屋を作りたいということで、昨年10月20日に20人で行って、実際にもう取引が始まっています。収益率が上がるのです。豊重さんにお会いしたときに言った言葉はまさに収益を上げた部分で、「町内会から市役所に交付金を出そうかな」と。普通は市役所から交付金をもらうのですが、交付金を出そうかなと言っていました。いわゆる一切、行政の支援は受けていません。補助金が入っていません。まったく入らない中で、自分たちで工夫をしながらやっていっています。

先日も内閣総理大臣表彰を受けていますが、その取り組みというのを先ほど先進地はという話もしましたので、柳谷（やねだん）の例をお話ししました。その中で、キーワードは子どもと文化ということが挙げられていましたので、お話しさせていただきました。

さて、地域活性化とは何ですかといったときに、結論からいきますと、いかに地域全体を見たもっともいい状況を作るかということと考えています。実は私は、中心市街地はどうしますかとか、商店街をどうしますかとか、またはこの温泉地区をどうしますかということ

## 講演「地域現場から描くソーシャルデザイン」

に関わってきました。反省も込めて思っていますのは、常に部分的にもっともいい状況を作ろうとしてきました。

空き店舗があったら、その空き店舗を何で埋めるのがもっともいいのだろうかと考えていたのです。その地区の個別、部分的にもっともいい状況を考えているのです。いわゆる部分的にもっともいい状況、部分的な最適化をかけようとしてきたのです。全体を見ているつもりでいるけれども、実はその地区、その場所を見てきたのです。

まさに人口10万人で5万世帯ぐらいあるとして、ここに商店街が形成されていますと、この商店街が観光客も、もちろん住民の皆さんも実はまばらになっている。そうすると、人口10万人の市長さんのところに、この商店街の理事長さんが話に来るわけです。「市長さん、大変なことになってきました。わが商店街は空き店舗、空きビルが増えてきて、どう見ても土曜日、日曜日でもほとんどお客さんが通らないという状況になっています。市長さん、どうしましょう。私たちも考えるけれども、何とかありませんか」と言いに来るのです。

市長は「まずは歩行者通行量調査をやってみましょう。商工会議所、商工会と連携してやってみましょう」と言うのです。それで平日と土曜、日曜、祝日の時間を決めて各個所を決めて、歩行者通行量調査をやるのです。ご存知ですね。カチカチと機械を使って計る調査です。時間内の通行量を数えるのです。「人間より犬猫のほうが多いではないか」というわけです。これでは良くない。

それで報告するのです。「これは大変なことになりました。犬猫のほうが多いという結果が出ています。ついては、このままですと商店から物を買っていただけません。何とかしましょう」と。ここで市長さんと商店街の皆さんは考えます。そういうときは、商店街を活性化する委員会を作るのだと言う。産学官連携で委員会を作る。

商工会議所、商工会の皆さんでそれぞれ役員になっている人達は、実は会費を払って非常勤なのです。それなのに、産学官連携で時間を拘束されて検討してくださいと言ったとしたら、常勤の皆様たちが事業構想力を持っていないと、それに時間を取られている非常勤の皆さん方が、ますます町のことを考えることになっていくのです。もちろん考えていただくのは結構なことなのですが。

委員会を立ち上げて、ここで議論になってくるのは、「こういうときは家賃補助だ。家賃を1年か2年補助するのだ」と言うのです。それだけではありません。朝、行ったら朝市をやっているのです。土曜、日曜に行ったら歌手が歌っているのです。イベントを徹底的にやるというのです。それだけではないのです。空き店舗、空きビルで起業するという方、いわゆる業を起す方は徹底的に支援をするという支援メニューを作っていくのです。それでイベントを何本かやっていくのです。もうだいたいお分かりだと思いますが、これは解決策になっているのだろうかということです。

人口10万人ですから、ここには小学校、中学校、高校、大学とありまして、既存の企業が張り付いています。この市長さんは、ここに土地が空いているではないか。こうなったらここに企業を誘致しましょうと言うのです。企業団地を作って誘致していくのです。最初に造成してしまうのです。来るかどうかは分からないけれども、最初に造ってしまう。そうすると、企業が何社か張り付くわけです。それでこの企業団地の代表の方が市長に言いに行くのです。「市長さん、最初はけっこう誘致して来てくれたんですけども、このごろはな

かなか来てくれなくて、かなり土地が余ってしまいます。どうしましょうか」と。そうすると市長は「そういうときは産学官連携で委員会を作るんです」と言うのです。そして委員会を作るのです。

そこで議論されるのは、「固定資産税はいらぬということにしましょうよ。この地域の大事な税金の一つの固定資産税は1年は減免する。1年ではなくて3～5年は減免する」という話をします。雇用助成、いわゆる雇用をしたら支援金、補助金を出します。それと融資制度を徹底します。いわゆる低利融資です。低い利率にしましょうと、いろいろと考えていきます。

さらにここには農業を営んでいる方々がいます。片やここに温泉宿があります。温泉地区があつて10軒あるんです。それでこの代表が市長さんに言いに行くのです。「市長さん、商店街も大変なようですけれども、企業もなかなかぱつと誘致されていないようですけれども、わが温泉地区も大変なことになっています。以前は50万人宿泊してくれていたのに、まさに25万人を切りそうです。ついこのあいだ1軒、旅館は跡取りもないのでということで閉じてしまいました。いまは9軒で何とかやっているのですけれども、市長さん、一緒に考えていただけませんか」と代表が言いに行くのです。

そうしたら市長は答えるのです。分かりました。「そういうときは委員会を立ち上げるのです」と言うのです。それで委員会を立ち上げる。そこで議論されるのは、「こういうときは、イベントを組むんです。イベントです。花火大会、ホテルの里、浴衣祭りに下駄祭り、よさこいソーラン。ああ、あそこに行ったらいつもイベントをやっているな。そう思わさなければだめです」と。「それと、PR不足なのではないですか。もっとPRをするべきです」と言うのです。「それだけではありません。もうここに泊まったら、どこで朝ごはんを食べようと夜ご飯を食べようと、どこのお風呂に入るのも自由な手形を発行しましょう」と言うのです。そういうことをやっていくのです。まだほかにも、例えば景観地区とかいろいろなところがあるのですが、今回は省略します。

まさに先ほど少しだけ話をさせていただきましたが、部分的にもっともいい状況を作っていくのです。ところでこれはもうお分かりかもしれませんが、9軒のところ、しかも経営者とその家族、従業員の方とその家族。人口10万人5万世帯です。徹底的にイベントのときには、行政職員から観光協会から物産協会からみんな動員をかけて、50万人から25万人に減ったところを何とか復活させて35万人、40万人まで押し上げようと必死になるのです。

9軒×家族+従業員とその家族。徹底的にこれをやったときに、人口10万人5万世帯は大丈夫ですか。なぜなら、部分的に限りなく個別に行っていた町づくりは、地域活性化とは何ですかというと、観光客が増えたことです、宿泊者が増えたことです。ここで、本当にそうなのだろうか。

「一昨年よりも昨年、昨年よりも今年、私たちの所得はいっこうに上がっていないのですけれども」。市長さんは「一生懸命にやっているじゃないですか。商店街が大変だったら委員会を作って商店街のために頑張っているし、企業誘致が大切だと言っているから企業誘致の数を何とか増やそうと努力しているのではないですか。温泉地が大変だと言うから委員会を作って、一生懸命にやっているじゃないですか。花火大会、ホテルと言ったらホテル。よさこいと言ったら、みんなで踊ったじゃないですか」と言うのです。しかし、「いっこうに

## ■ 講演「地域現場から描くソーシャルデザイン」

所得が上がらないのですけれども」。

町の中で、主は何なのですか。人口10万人5万世帯で、主となっているのはどこですかということです。やるなということではなくて、農業などどう関連付けているのですか。しっかり全体を考える。それと地域の中で評価をする仕組みをしっかり作り上げていく。地域内の女性が活躍する場をしっかり作っていく。本当にこの産業でこの町はやっていけるのかというところで、新しい産業を作る必要性はないのかということなどが重要です。

### 地域に「人財」が残りたがる評価の仕組みを考える

それと小学校、中学校、高校です。ついこのあいだも小学校5、6年生を受け持っている先生にお会いしました。お会いしたときに、まさに小学校の先生が言っていた事が印象的です。子どもたちに「お父さん、お母さんが、この町に住んでいて大変だと言った子は手を挙げてごらん」というと、何人かの子どもから手が挙がりました。「では、きみ、どのように言っていたか」と聞くと、「お父さん、お母さんもこの町は大変だと言っています。お父さんはひょっとしたら仕事を失うかも。給料、ボーナスも出ないかもしれないと言っています」と、「ほかの子はどうですか」と聞くと、「うちもお母さんが大変だと言っています」と言うのです。「そうです。いいですか、皆さん、この町は大変な町なんです」と小学校5年生、6年生の担任の先生が言うわけです。「いいですか皆さん、だからお母さんもお父さんも言っているんですよ。一生懸命に勉強して小学校から中学校に上がるときか、高校のときにこの町を出ないと大変なことになるんです。皆さん、いいですか。この町を速やかに出てください。それがあなたたちの幸せなんです」と言っていましたということです。

高校の先生の評価は、いかに有名な大学に入れるかです。「先生は、あの有名な大学に何人入れましたね、さすがですね」と。この地域は、外に出すことが評価を受けるのです。その子が求めているのならそれもいいのです。しかし、もう一つ、この小学校、中学校の生徒が、この地域内で一生懸命に汗を流している方々に会うという機会を作る。「そうか、この町ではこういう技術を持って頑張っている人たちがいるんだ」ということを知っていく機会を作る。

まさにもうお気づきだと思いますが、小学校、中学校、高校の先生で、その県内の出身者は大変少なくなっています。そうすると、分からないのです。ですから、一緒に知るという機会を地域の中で作っていかないと、知らないで育っていくのです。

このあいだ山口県の下松市に行ったとき、新幹線の頭のところを職人さんがコンコンたたいて作っているのを見ました。しかし、後でこのことを町の人に聞くと誰も知りませんでした。ですから、その仕事に就こうという子どもたちはそういう仕事があることをまったく知らないのです。わが町で新幹線を作っているのを知らないのです。これは大変だということで、いままさに要覧を作って観光案内なりマップに入れているのです。

いま高校の先生たちの評価は、有名な私立、国立大学、海外の大学に何人入れたかです。もちろんそこに入りたいという子が行くのは自由です。しかし、地域内企業に入ってもらう。それは高校を卒業して、大学を卒業して入ってもらう。高校・大学連携して、地域内の企業に入ってもらおう。

この中では実はもう一つ、人財をどのように確保していくかということが重要なのに、

そこがシステム化されていないと、本来ならその地域で活躍できる子どもたちが、実は目指すところは違うところになっていく。いわゆる選択の機会をもらっていないのです。

高校・大学連携をかけて、地域内企業に入る。高校を卒業して地域内企業に入るときには、8年間その企業に勤めると、大学ではなくて大学院の修士課程の受験資格を得る。子どもたちのモチベーションを上げていきます。高専卒、短大卒で地域内企業に入って4年以上たつと、大学院の修士課程の受験資格を得られる。全員が合格するわけではありませんが、受験資格を得るということでモチベーションを上げていく。現に山形大学ではすでにこうした取り組みをやっていっています。

いわゆる評価の仕組みをしっかりと変えていかなければならない。もちろんその有名な大学なりどこかに行くということは、いっこうに構いません。しかし、「先生はさすがですね。地域内の企業に何人送って、その子がリーダーになりましたね」と。小学校、中学校の先生が「先生は、きみたちが行きたいところに行くことを応援します。でもこの町はこういう産業があり、こういう歴史、文化があり、そこをぜひ知って、この中から一人でもこの町の地域のリーダーになってくれることを先生は望んでいます」と言っていたら、まったく状況は変わってきます。

地域内では、行政職員もそうです。商工会議所、商工会、農協、漁協、また地域内で本当にいろいろな活動を展開されている方々、30年、40年勤めている方々が、情報をしっかり共有しながら、ばらばらにやっていくのではなくて、そこを考えていかないといけないと思います。そして、人財の地域内での育成をどのようにしていくのかという仕組みをしっかりと作ることが非常に大事なことだと思っています。

私自身は、実は全体のもっともいい状況を作るときに、いかに所得を上げるか。それと評価。いわゆる地域内で一生懸命にやっている方々が評価を受ける。もちろん「長」の名の付く方々は歴史に刻まれます。しかし地域内で一生懸命にやっている方々も同じように、それらの記録をDVDに収めて地元の図書館に入れます。「おじいちゃん、おばあちゃんのやってきたことを知れたかったら、図書館に行ってください」とお孫さんに言います。おじいちゃん、おばあちゃんのやってきたことが歴史に刻まれている。

この町は汗を流して一生懸命にやる人が、しっかり評価される町です。お父さん、お母さんのやってきたことを知れたかったら、図書館に行ってください。子どもは、お孫さんは「えっ」と思います。いざ行くと、そこにはDVDで、全部ではないですけども活躍したその方々が載っているのです。

もちろん「長」が付いてリーダーと言われる方々が歴史に刻まれることはあるでしょう。しかし、地域で30年、40年一生懸命にやった方々が、評価を受けて歴史に刻まれない町というのは、誰がモチベーションを上げるのか。私はそこをしっかりとお手伝いしていきたいと思っています。

さて、女性の活躍についてお話します。是非、女性の皆様に商品づくりなど、いろいろなところで活躍していただきたいと思っています。私は自分自身で買い物をするというのはすごく少ないです。実は東京にいたときにも、靴から何から、小樽で買ったものを妻に送ってもらっていました。ネクタイもそうですが、全部、送ってもらっていました。まさにその中では女性の感性というのが、これからは非常に大事なのではないかとと思っています。

## 講演「地域現場から描くソーシャルデザイン」

先ほど新しい産業と言いました。本当にこの町は、連携をかけて部分的にもっともいい状況がある程度つないでいって、全体のいい状況を作ったときに、本当に大丈夫なのだろうか。所得を確保できるのだろうか。私は内閣官房、内閣府のときに九州、沖縄県を担当していました。沖縄県には通信販売事業で400億、500億円を稼いでいるところがある。東北や北海道はどうでしょうか。なぜ、北海道はこれだけいい食材があるのに、加工しないのだろうか。東北、北海道の人は、きっといい人なのだ。「こんなおいしいものは新鮮なうちにどうぞ」と提供するのです。加工で関わっていける方々が本来いるのに、非常に残念です。

### 地域のことを知らなければ、そこに触れ合う機会はできてこない

話しは変わりますが、地元で30年、40年勤める方々が、1つの話し合う場として大学があるのではないかということで、地域活性化システム論として平成18年度に最初のモデル校、北陸先端科学技術大学院大学でスタートさせていただきました。これは地域の皆さん方が大学の場に来る。もっとも集まりやすいところは地域の中ではどこだろうと考えると、ひょっとしたら図書館かもしれません。これは地域と大学の連携で講座を作ってやっていくということで、いま、一つの例を出しているわけですが、それぞれの町でも集まる場所があると思います。

最初はそこでデザイン設計したときに考えました。そして、地域活性化システム論をテーマに、地域活性化学会を平成20年10月20日に立ち上げました。平成19年度に10大学でこの地域活性化システム論を開講していただいていますので、そこを中心に地域活性化学会が発足しました。2010年7月10日から11日の2日間には、小樽商科大学で第2回目の研究大会が行われることになっています。

地域活性化学会は政策を提言する集団で、特に実践をするという集団ではありません。学会では、地域の皆さん方が実践をするといったときに、こういうやり方があるとか、こういう事例があってこういう形で研究がなされているという紹介がされます。また、地域活性化機構は昨年9月30日に設立したわけですが、連携しながら地域を応援していくというところではあります。

次に私が内閣府にいたときに、実は地域活性化事例としていくつかあるのですが、例えばオリーブ振興での小豆島では、以前は6万8,000人ぐらい人口がいたところですが、いまは3万2,000人に減っています。土庄町と小豆島町というところが、1万6,000人ずつの人口になっています。さあ大変だということで、片方の町は観光客を何とか誘致しようとしています。片方の町は産業を何とか誘致しようと考えています。連携したらいいではないですかということで、いまお手伝いをさせていただいています。

いわゆる観光客をたくさん入れて所得は上がったのですか。と言いますのは、そのことをやることによって関われる人たちがどれぐらいいるのですかということです。または関わるような仕組みを作るためには、どのように設計していくのですかということです。

豊後高田が9年前には人口2万5,000人、1万世帯のところ、2万7,000人ぐらいの観光客が来ていました。だいたいその商店街は400メートルぐらいのところ。そこに年間2万7,000人ぐらいだとどうなるかということ、本当に犬、猫のほうが多いのではないかと、大丈夫かと皆が不安がるのです。これは大変だということで昭和の町を作ろうとなりました。

先ほど先進地という話をしましたが、このことに関して、いわゆる昭和に関して先進な人、昭和のものを持っている人、ダッコちゃん人形だとか鉄人28号だとか、そういうものを持っている人はいないのか。そうした事を、ネットワークしてわが町で作っていかうというやり方をしているわけです。

それで9年後に38万人なり、観光客に来ていただいた。では、所得は上がったのか。ここは農業が重要な町の産業です。その方々がお土産品を作るとかで本当に関わっていているのか。そこをじっくり設計していかないと、一部の地域の一部の人たちだけが関わって継続、進化せずに終わりを告げていく。何らかの補助金が入っているときだけはすごく元気なように見える。部分的にもっともいい状況を作っているのではないかとということ、事例を見るとときにしっかり考えていかなければいけない。

どぶろく特区もそうです。どぶろくが何人の方の所得が変わるのか。それは1つはモチベーションを高めるという意識です。わが町でこのことを第1号でやるのだという。それも大切です。そのときにどのようにそれをつないでいくのか。今後どのように広げていくのかという設計がされないと「あれ、こんなはずではなかった」ということになるのではないかと。そういうことをここでの事例を通じて学んでいただければと思います。

ほかに、現在、農工商連携が盛んに行われています。7月に東京農大の食の博物館がありますが、そこでエミュー展というのをやることになっており、私も非常勤講師としてここに関わっています。その一例として、実は東京農大のオホーツク校に先日も行ってきました。網走市の人口は3万9,000人です。まさに将来、わが町は産業として何で食べていくのか、何を加工してやっていくのかというときに、まさにここは地域資源ではなかったのです。エミューから商品を生み出そうという発想です。このエミューというのはダチョウの一種なのですが、オーストラリアの国鳥です。1年半で成長します。いわゆる大人になります。ニワトリだと1年間に300～320個の卵を産みます。エミューは1年間に20～30個です。

そこで結論から言いますと、網走市が地域と大学ということで大学と連携して新しい産業として起こしていくのに考えたのがこのエミューです。このエミューは何羽飼育すればいいのですか。答えは5,000羽です。今年中に1,000羽になります。そこからペアリングでかね合わせて増やしていくのですが、まさにその中で注目すべきはこの脂肪なのです。オーストラリアでは、すでに化粧品として開発されています。殺菌力や保湿力があるのです。この脂肪を活用して、シャンプー、リンス、オイル、クリーム、石鹸を作っています。

本来、地域で取れたものを、こんなにおいしいものが取れました、おいしいうちに新鮮なうちに食べてくださいと出していました。本来、その地域では、この部分を加工して関わる人を作る。もしくは、その後続く人財を小学校、中学校のうちからそこに触れ合い、高校、大学、もしくは高校を卒業してそこに行く。知らなければそこに触れ合う機会はありません。

いわゆる人財というのは誰が育成するのか。本当になかなか集まらないのですよ。例えば、地域の中でIターン、Uターン、Jターンの場をつくっているではないですか。後は企業努力ですよ、ともし言われたとしたら、本当に調達できるのですかということですよ。

最後に、戦略的システムデザインによる活性化ということについてですが、実は近々、自治体の若手の皆様、企業の若手の皆様方にもぜひ読んでいただけるように分かりやすい学術

## ■ 講演「地域現場から描くソーシャルデザイン」

書を出そうと思っています。今年の1月16日に出了した『「できない」を「できる！」に変える』という本ですが、この本を考へるときに、6つのテーマを最初に考へました。

2カ月ちょっとで書いたものですが、この本を書くうえで実はいちばん感じたのは、全体のもっともいい状況を作るといふことなのです。最後にこの中の1つについて、話をさせていただきます。部分的な状況をかね合せていって全体のもっともいい状況を作るといふことは、先ほどもお話しました。

私は信頼感あるキーパーソンといかに連携するかといふことに、非常に悩んできました。なぜならば地域でもっともいい状況を作ろうとしていったときに、「このことについての委員会を立ち上げます」となるのですね。私はまさにこういう委員会に関わってきました。そのときに、「本来は、この方が参加してくれれば、もっと広がりが出るのにな」ところが全体を、しっかり説明できないものですから、関わってくれません。丁重に断られていました。「木村さん、言っていることは分かります。しかし、私は従業員とその家族の皆さんを抱えています。毎日、毎日いかに利益を上げて、その方々の給料を払うかといふことを考へています。参加したいのは本当に山々なんですけれども、ぜひ分かってください」と断られてきました。

いまよくよく考へますと、相手にはまったく見えていなかったのです。「あなたは何をやりたいのですか。」「しっかりその町のこういうことを目指しているのです」といふことが、どうも見えない、伝わっていないといふことだったと思います。まさにそこを大切にしていかなければいけない。しっかり説明ができないと、本当に信頼感あるキーパーソンは一緒にやってくれないのだといふことを実感しました。

それでこの内容のことを今日はお話をさせていただいているわけです。時間となりましたので、これで終了させていただきます。

今、インターネット上の私のメールには1日に150件近く問い合わせや報告が来ますが、その中には地域活性化に関してこういう事例があるけれどもどうなのだろうかといふような質問や問い掛けが多くあります。そういった事に関心のお持ちの方は、ぜひメールをしていただければと思っています。

今日は大変、貴重な時間をいただきました。地域活性化について、この後はシンポジウムが開かれますので、ぜひ私の話も参考にさせていただいてお聞きいただければと思っています。本日は大変ありがとうございました。

**司会：**木村様、どうもありがとうございました。町おこしのさまざまなかご経験の中から貴重なお話を頂戴いたしました。皆様、どうぞ木村様にいま一度、大きな拍手をお願いいたします。これを持ちまして、木村俊昭様の講演を終了させていただきます。

---

◇ 東京フォーラム ◇

## パネルディスカッション

---

### 「地域力の創造に向けて」

〈コーディネイター〉

岡崎 昌之 氏

法政大学 現代福祉学部 教授

〈パネリスト〉

大湯 章吉 氏

能登乃國ゆするぎ塾 塾長

猿舘 祐子 氏

株式会社土澤まちづくり会社 専務取締役

富永 一夫 氏

NPO法人フュージョン長池 理事長

横石 知二 氏

株式会社いろどり 代表取締役社長

## 東京フォーラム／パネルディスカッション

**司会：** それでは第二部のパネルディスカッション「地域力の創造に向けて」に入らせていただきます。初めにパネルディスカッションにご参加いただく皆様をご紹介させていただきます。まず、能登乃國ゆするぎ塾塾長・大湯章吉様、続いて株式会社土澤まちづくり会社専務取締役・猿舘祐子様、NPO法人フュージョン長池理事長・富永一夫様、そして、株式会社いろどり代表取締役社長・横石知二様の4名の方におこしいただきました。

そして、パネルディスカッションのコーディネイターを務めていただきますのは、法政大学現代福祉学部教授・岡崎昌之様です。

それではこれからの進行は、岡崎教授にバトンタッチさせていただきます。岡崎先生、よろしく申し上げます。

**岡崎：** 今日十分な時間がないのですが、タイトルは「地域力の創造に向けて」という、とてつもない大きなタイトルです。

私はちょうど1週間前、山形県庄内町へ、プロジェクトの下調べに行っておりました。今回の平成の合併で、余目町と立川町という二つが合併して、鶴岡市と酒田市に挟まれて地理的には非常に細長い新町になっているところです。

つくづく感じましたのが、こういう東北の一つの町が、いまの日本の置かれている状況が如実に表しているのかなということです。どういうことかと申しますと、今回は主に立川という奥まった旧集落に非常に関心があり、見てきたのですが、その集落を川沿いにさかのぼっていきますと、視線のいちばん奥に月山が見えるのです。山にはまだ沢山の雪を残したままです。ご存知のように、月山というのは、冬は雪が多すぎてスキーができない。連休明けにならないとスキーで入ることができないというぐらいの雪深い山です。それに向かっていく道の両側は、棚田でいまだに石垣がきちんと積み上げられて、ちょうど田植えが終わったというときでした。

かなり登って行きますと、やおら来た道を振り返りますと、鳥海山が見えているのです。鳥海山というのは、日本海の高尾山から2,200メートルの頂までの単独峰で非常にきれいな山です。こういう大景観の中に、いまこの立川の集落が疲弊しており、地元のご相談はこれからグリーンツーリズムをどう立ち上げようかということです。

歴史的にも古いものがあり、酒田の本間家との関係など数百年の歴史を持っている集落が点々とその沢の両側につながっているけれども、小学校はすべて廃校になってしまっています。歴史的、自然景観的にはすごく大きな価値を持っているところなのですが、集落は疲弊しています。こういう資源の価値と現状というものの格差、開き、これを如実に表している集落だと思いました。これから1年かけてその地域をどうしていこうか、地域の人たちとどう取り組んでいこうかということの宿題として持ち帰ってきたわけです。

日本列島の50%を占める地域で人口が減少し、流出し、過疎地帯になっている現状があります。今日、パネリストでおいでいただいた4名の方は、そういう厳しい格差のある地域社会を抱えながらも、その中で全国のモデルとなるような、地域力創造をやっていらっしゃる皆様です。

今回は、東京でのシンポジウム開催ですが、地方の農山村だけではなく、実は東京にも存続が厳しいコミュニティがあります。私の学部周辺は、多摩ニュータウンの一部ですが、どこも厳しい現実です。こうした地域と地方の農山村とも、どこかで切り結ぶ可能性があるのではないか。そういうことも、今日は探っていけたらいいなと思っています。

最初は4名の皆様に、現在どういう活動をしているのかについて、15分位お話ししていただきます。今日、お揃いの方はどなたもお話をお願いすれば1時間話しても足りないという実績をお持ちの方ですが、そこはぐっと凝縮していただいて、とりあえず最初はお話ししていただきたいと思います。

一番北の岩手県旧東和町の猿舘さんからお願いします。

**猿舘：**皆様、こんにちは。岩手県花巻市からまいりました株式会社土澤まちづくり会社の猿舘と申します。皆様にも資料をお配りしていますので、この資料に沿ってお話をしていきたいと思います。資料の表紙に写真が載っていますが、ここが土澤商店街の町です。見てのとおり人は誰も通ってなくて、閑散とした町というのが土澤商店街の印象だと思います。

東和町の概要になりますけれども、平成18年に平成の大合併によりまして、花巻市・東和町・石鳥谷町・大迫町の1市3町が合併して、和賀郡東和町から花巻市東和町に変わりました。

土澤商店街は、以前の東和町のときには中心市街地でしたが、花巻市になってからは、その他の商店街になってしまいました。花巻市は10万人、東和町は約1万人。私が住んでいる土澤商店街というのは4200人。そういう中で暮らしています。

では、東和町にある土澤商店街がどういう町なのかというと、毎年10人ぐらいの老人が亡くなっていく。その代わりに新しい人は入ってこない、人口の現象に歯止めが止まらない状況があります。

資料（参考資料：96頁参照）の下に地図があります。黒く点在しているところが、その家が高齢者の単身、夫婦で暮らしている世帯になります。これがどんどん全体が色でつぶれてくるとお分かりのように、いずれは高齢者だらけになってくる。また、道路に赤い線が引いてありますが、そこが1キロ弱の土澤商店街となっています。

土澤まちづくり会社は、今では旧TMOになりますが、1998年に施行された中心市街地活性化法に基づき設立した会社です。旧東和町が500万、旧東和町民株主が一口1万円で約



## ■ 東京フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

100個団体から500万円集めまして出資、株式会社として平成14年に立ち上げました。普通でしたら第3セクターになりますと行政の組長が代表になりますが、このまちづくり会社は発足当時から行政にはオブザーバーとして回ってもらい、まちのことは自分たちで責任を持つという方針から、商店街の店主が役員になり、会社の運営を、住民自らが行ってあります。

まちづくり会社の目的としては、町全体の復興と商店街の活性化にあります。まちづくり会社の大きなポイントとして、本来なら中心市街地ですから商店の活性化のを中心にするべきなのですが、観光と言っても何もない町ですし、私たち自身が会社を作り上げるときに考えたのは、まずは商店街というよりも土澤地区全体を人が住みやすい町にしようと。その町がおそらく商店街の活性化につながるのではないかとということで、商店街の活性化はもとより、地域全体で長く住み続けることができるまちづくりを重点的に行っています。

発足してからいろいろなことをやっています。小さいことから、たとえば館山という土澤城跡の刈払いから国の受託事業までいろいろとやっていますけれども、項目のいちばん下の街かど美術館と、これから着工予定ですが上町共同化事業の二つをこれからお話したいと思います。この二つをどうして今日、重点的に話すのかということ、やはり合併という問題が大きく作用しているからです。街かど美術館を行うことになったのも、合併を一年後に控え、この東和町の町というのはいったいどのような町だったなのか、これからどのようにしていけばよいのかという話し合いからでした。

地域資源というものをきちんとした形で、いま住民の方たちと共有しておかなければ、花巻市と合併したときにこれはてんでんばらばらになるだろう。そのためにも地域を認識、再確認するためにいったい何があるのかということから、街かど美術館が始まりました。

街かど美術館以外でも、まちづくり会社としていろいろな事業を行ってきました。国交省の道路の社会実験、商店街の中に仮設の道路を作って、歩道があったらどのようなことができるのかとか、商店街の道路を全部、歩行者天国にして、土澤の商店街にはどんな形の歩行者天国が似合うのか、まちづくり会社が設立2年目の道路の社会実験を皮切りにいろいろな事業に取り組んでまいりました。

先ほどお話ししました街かど美術館です。皆様が花巻市とって最初に思い出すのが宮沢賢治だと思えるのですが、どうも東和町の人間は「東和町は宮沢賢治ではない」という話から、花巻市と大きなものとしてひとくくりにはされるとということで自分たちの地域性がなくなってしまうのではないかと非常に恐怖感がありました。

では、地域の中に何があるのか。東和町土澤には萬鉄五郎記念美術館があります。その萬鉄五郎の生まれた町で、美術館と一緒に何か商店街としてやれることがあるのではないかと。また、美術館側としても花巻市と合併することにより、東和町の美術館がこれからいったいどうなっていくのかと、方向性を考えていたところだったので、では一緒にやりましょうということになりました。作家の作品を商店街に展示し、商店街と美術館の回遊性をもたせ、まちににぎわいを取り戻す企画店を計画しました。

実は初めは作家さんを30人程度集めてちょこっとやろうという話だったのですが、作家さんのネットワークが非常に強くて、いきなり作家さんが100人集まって町中を作品だらけにしてしまいました。もう4回開いています。去年は、中小企業庁の新・がんばる商店街77選にもこの活動が認められ選ばれました。だいたい秋に1カ月間、お客様は町内外、東

京からもいらっしゃいます。第1回目は来訪者が1万人、2回目からは1万5,000人というように、閑散とした町が変わったように非常ににぎやかになる1カ月です。

さて、それでは1カ月間にはぎわっているけれども、後の11カ月はどうなのかということです。実は何も変わっていないのです。どんどん空き店舗も増えています。20年前に私はこの土澤の町に戻ってきたのです。その頃は商店街の中に魚屋が5軒ありました。いまは1軒もありません。酒屋も5軒ありました。紹介にも書いてありますが、私は酒屋を営んでいますけれども、いまは1軒だけ、また、商店街に唯一あった生鮮食料品スーパーもつぶれてしまいました。

このように商店街としての機能が薄れてきているという状態の中で、上町地区で、共同建て替え構想が持ち上がりました。まちづくり会社としても上町地区の共同建て替え事業、土澤商店街活性化の起爆剤なる事業として位置づけ、まちづくり会社が設立当初から地権者と共に研究会を開きながら、やっと今年着工する運びとなりました。

商店街の空洞化、人口がどんどん減ってきている現実に立ち向かい、土澤が大好きで、ここで生まれ育った愛着のあるところで終えたいという、地元住人、地権者の人たちの思いと一体となって今後、進めていきたいと考えています。新しい建物の1階のテナントの中には、高齢者が多い地域性に合わせて、惣菜屋、コミュニティレストラン、車椅子でも入れる美容院、訪問看護ステーションと、これから地域に必要なもの、機能を1階部分のテナントに備えて、今後の土澤の核としてなる建替えを行っていききたいといま頑張っている最中です。

また、2階には高齢者向け優良賃貸住宅や分譲もあります。ただいま入居者を募集しています。興味のある方はご連絡いただければ、すぐにパンフレットを送りますので、ぜひ一度、土澤の町にお越しいただければと思います。

**岡崎：**ありがとうございます。街かど美術館は商店街をフルに使って、そこに作家を呼び込んで1カ月で色々なアート作品を展示する。しかも地元の住民も一緒に様々な形でその活動に参画する。皆様は、新潟の越後妻有アートトリエンナーレという、3年に1回開催される非常に大規模なこういった地域住民参加型の美術イベントをご存知だと思います。もちろんあれも大変すばらしい立派な試みですが、あのトレエンナーレよりも立派な分厚い最終報告書を土澤では毎回発行されていて、貴重な資料として残っています。

そういうものに加えて今度は新しい事業、これは大変な事業だと思いますが、地域の人たちが高齢者の居場所を確保していこうと、コーポラティブハウジング、コーポラティブタウンを事業化しようとしているわけです。大変なことをやり始めた后感心して見させていただいています。

さて、次は大湯さんをお願いします。

**大湯：**こんにちは。石川県能登から来ました大湯です。能登の地図をちょっと作りますね。日本海から突き出たところです。能登半島に見えますか。見えない？ では、説明します。このあたりが金沢、兼六園です。21世紀美術館があるところです。そしてこのあたりが、大リーガーの松井秀喜さんが生まれたところです。ここのくびれたところに能登島という島があり、ここは連続日本一を続けている和倉温泉の加賀屋があります。そして、この節になっているところが輪島で、朝市などがあるところです。地震の発生でもっとも被害が大きかったところです。その節は皆様に大変お世話になりました。ご協力いただきありがとうございます。

## ■ 東京フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

ございました。改めて御礼申し上げます。

私は実はこの富山県の県境に近いところ、ここ能登に住んでいます。私の町の文化財と言えるものは、いまから1300年前に開山されたという石動山という山です。山岳信仰の霊山ということで、石動山にこだわりを持ちながら地域をおもしろくしようという活動を行っているのが、私の能登乃國ゆするぎ塾という塾です。

石動山のことを「いするぎやま」とも言うわけで、「いするぎ」と人々の心を揺すり起こしたいという思いで、2つの言葉を合わせて、能登乃國ゆするぎ塾というように言っているわけです。私どもは、自分たちだけで独自の活動をするということを10年前からやめました。今は「人のふんどしで相撲を取る」という格好でやっていますので「ゆすり、たかり」の「ゆすり」ではないかと、そういうように皮肉られることもままあるわけです。

私どもの塾の活動は、要はつなぐと言いますか、それぞれの個人とか団体が企業や行政も含めて、地域の中にいる人たちをどうつなぐか、どうコラボ（コラボレーション）しておもしろくするかということを、集中的にやっているわけです。

私は地域づくりとは何なのかということについていつも考えているわけですが、地域づくり活動とはいったい何なのでしょう。私の思いですけれども、一定の地域には地縁というか、最初から元々住んでいる人たちがいるわけです。住みながらいろいろな問題や課題を解決しながら、それを乗り越えていった歴史、文化、あるいは生活風習というのがあるわけです。それを価値とするならば、その価値がずっと歴史とともに積み重なった場所であろうと。そこにいまの現代的、いま生きている私たちが課題にぶつかってそれをまた克服していくという、そういう価値を見出して克服しながら積み重ねていく活動を継続していくことなのだろうと。そしてそのことを持続していくことに誇りを持っている。そういう地域の活動を地域づくり活動というように私どもは思っているわけです。

そこに住んでいる人たちだけではなく、外から入ってきた人、外からの情報と交流することによって新しい価値をまた生んでいくのだろうというように思っています。そういうことで、豊かな地域とはどのような地域かということ資料（参考資料：91頁参照）の3番目に書いていますが、それを見ていただきたいと思います。

5項目ありますが、この中でもっとも重要なのは2番と5番だと思っています。2番目は、「個人や団体の連携・協働が展開されている」。どちらかというとそれぞれの団体活動というのは縦割りというか、一つの目標に向かって皆が達成しようとしているわけですが、そういう人たちというのは地域の中でたくさんいるわけです。それはそれでいいわけですがけれども、それを連携する、協働することがないとおもしろいことができない。いわゆる自己満足に終わってしまう。自己完結型に終わってしまう。それでは地域づくりの豊かさというのは半減してしまうのではないかと考えています。

5番目は、「連携・協働を担うコーディネイターがいる」。誰がそれをつなぐのかということですが。縦になっているそれぞれの関係を横軸でつないでいく、おもしろくさせるというのは、やはりコーディネイターという人が必要になってくるのだろうなど。これは協働コーディネイターという言い方もするわけですがけれども、そういうコーディネイターが、私は人口1万人に1人いたらおもしろいと思っています。そういうようなコーディネイターの役割を、私ども能登乃國ゆするぎ塾が担っているということですが。

では地域づくりをおもしろくするのはどうすればいいのかということですが、資料（参考資料：91頁参照）の5項目に、「コラボ成功の秘訣」、うまくいくための秘訣があります。長いあいだの積み重ねの中で、この5つの秘訣に到達したと思っています。まだあるのかもしれない。まだ道半ばかもしれませんが、この中で重要なのは1番と3番です。

1番は「手柄を相手に与える」ということです。皆はうまくいくと手柄を自分のものにしようとするわけです。そういうことを続けている限りは、コラボはうまくいかない。手柄は相手に与える。うまくいかなかったこととか、失敗したことは自分が受け取る。普通の場合は、失敗すると一緒に連携した団体が悪い、あるいは行政がいたら行政の力が足りないというように人のせいにしてしまう。そうではなく、悪いことは自分が受ける、連携した団体が受ける。よかった成果、手柄は相手に与える。それは、たぶん会社でもどこでも同じことが言えると思います。相手に与えれば悪い気はしないわけで、また連携が続くわけです。

それと3番目ですが、「連携する個人、団体のそれぞれの目標を達成させる」。よく一つの目標を立てて、一緒にこの指とまれと集まったりするわけですがけれども、同じ目標に向かっている団体であれば、それはその活動でいいわけですがけれども、私のやっているのは目標が違う団体です。それぞれの目標が全然違う。ただし、やっていることによってそれぞれの団体の目標が達成されて新たな価値が生まれるという活動を展開していますので、それぞれの団体が満足せずに、自分たちのやりたい活動を半分抑えながら新しい活動をやるというのでは、それは長続きしない、成果もうまくいかない。ですから、それぞれの団体の目標を達成しながら、新たな価値のある活動が展開できる。価値が生まれる。このような活動が、やはりコラボ成功の秘訣だろうと思っています。

次に地域資源とは何かということですがけれども、よく地域資源というのは光り輝いたダイヤモンド原石を発掘して磨けばいいというような話をするわけですがけれども、私どもは地域資源というのは全部ありだと思っています。特に後段のほうに、役に立たないとか、汚いとか、ワーストワンとかありますが、実はこれもすべて地域資源なのです。皆、地域資源というと、何か夢物語で、磨いたらダイヤモンドになったりとか、金が出てくるのではないかと想ったりするわけですが、そうではない。いわゆるハンディキャップも含めて、いまの時代の価値にふさわしくないかもしれないけれども、新しい時代、次の時代の価値になるかもしれないという可能性はたくさんある。

歴史文化にしてみると、1周遅れのトップランナーということもあるわけです。決して自分のところに何も無いと思わない。何でもある。マイナス、あるいはハンディキャップが資源だのように思えば、肩の力が入らないのだろうなと思っています。

要は、その地域資源をどう活用するかということ。ここにも5つばかり書かせていただきました。（参考資料：91～92頁参照）「①今ある価値に磨きをかける」「②埋もれた価値を発掘、発見し磨きをかける」というのは、普通のことですね。これは鉱山でいえば穴を掘って金を集めたり、原石を見つけるという話です。何かどこかに見つけると、皆が徒党を組んで一緒にほじるわけです。私のような変わった人間がいると、人の行かないところを掘るわけです。それで掘って中のダイヤモンドのようなものを見つけたら、皆がわーっと来る可能性があります。

ですから、そういう変てこな人間を入れていくということが地域をおもしろくすること

## ■ 東京フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

で、1つの穴だけを掘らないということです。誰かが1つの穴を掘っていたら、危険分散として別の穴を掘っていく。たぶん、ここにおいでの方は、こちらでなくてちょっとこちらの穴を掘っていく方なのだろうと思います。

「③今ある価値に別の価値を加えて新たな価値をつくる」ということですが、事例を見ていただければと思います。事例の1番目は、活動事例の紹介で、資料（参考資料：93頁参照）に載っています。アメリカの中学生の受け入れるという事業をやっています。People to People Student Ambassador Programsということで、実はアイゼンハワー元大統領が提唱して、いまは孫娘のメアリー・アイゼンハワーがやっている事業です。アメリカの中高校生を日本に大使として送り込むという事業です。

この事業を集落の中に入れて、それから地域づくり団体に入れる。集落、地域づくり団体は、いろいろな活動をしています。その活動だけに終わらせないために、そこにアメリカの中高校生を入れることによって、新たな価値を見出せるということです。そこから何が生まれるのか。修学旅行の受け入れ先、あるいは民泊ができるようになります。そういうようにどんどん展開していくわけです。いまある集落の機能や地域づくり団体の価値に新たな価値が増えて、もう一つの価値に持っていくという活動がこの③になるわけです。

「④価値が無いと思われたものに命を吹き込む」。誰しもこれは価値があまりないと思う、それに価値を生ませる。それは事例2を見ていただきたいと思います。農家ビジット・ツアーです。TAUCK ESSENCE OF JAPANとありまして、これはアメリカのコネチカット州にあるTAUCK社という旅行会社ですが、日本の真髄を知るためにラグジュアリーツアーと言いますか、いわゆる富裕層タイプを日本に送り込んでいます。その方々を農家に招いて、コミュニティビジネスをやっているわけです。

彼らがびっくり驚くのは、田んぼの中に水がどうしてたまっているのか、畦はなぜあるのかという、こんな話なのです。それでお金が取れるのです。私も稲作農家をやっていますので、我々にとっては当たり前です。水を引いて田んぼに入れて、いまは水を張った状態になっています。彼らはそれを見て驚くのです。「えっ、この水はどこから来たの?」と。「山から」と言うと「山から水はいつ出るの? どこかにためているの?」と。こんなストーリーを話して、水を入れるまでの話をするだけでお金が取れるのです。

農家の方々は、「こんなばかばかしいことを説明してお金になるのか」と初めはばかにしていましたが、もう4年続いています。これでしっかりビジネスができるということで、価値がないと思わない。何でも価値があるのだということです。

「⑤価値を交換、使用、積み重ね、組み合わせ、融合させて新たな価値をつくる」。事例5を見てください。事例5は、ふるさと農業体験です。これは先ほどいったように新しい価値を作っていくわけです。それぞれの団体は、それぞれの目的を持っているわけです。それぞれの目的を持っていて、気が付いたら子どもたちがいきいきと生きる力が身に付いていた。こういうことを気が付いたらなっていたということをしたたかに仕込むという仕掛けです。

また、「地域を蘇らせる10カ条」というのを作りましたので、どうぞ皆様方、この10カ条をやれば地域は蘇るので、お試しいただきたいと思います。

**岡崎**：地域の個人や組織を繋ぐということをさらりとおっしゃいましたが、そういう基盤、

基礎的なことをかっちりと押さえる中で、アメリカ東海岸から高校生、中学生を受け入れる。しかも、1、2回ではなくて継続的に受け入れている。しかも TAUCK、ESSENCE OF JAPAN というのもコネチカット州ですから、米国の東側ですよ。私は何度か写真もを見せていただいておりますが、かなりの富裕層です。こういう人たちが嬉々として田んぼに入ったり、あるいは田植えの機械を動かしてみたり、中能登のお母さんたちが作った食に接するというところに、大きな喜びを見出している。

私もこれまでアメリカ西海岸のオレゴン大学とか幾つかの地域と研究交流をやっていますが、そういう経験からしても、日本の農村の生活、ライフスタイルというものは、ある意味では憧れにもつながるような可能性を十分持っている。それをさり気なく実践されています。それを地域の中に、ずっと横に効果を拡大させているという点は、非常に評価できるのではないかと思います。

それでは、今度は富永さんですが、今度は東京都内のお話です。よろしくお願ひします。

**富永：**ご紹介に預かりました富永と申します。よろしくお願ひいたします。NPOフュージョン長池というNPO法人を47歳で10年前に設立しました。今日はおそらく多くの方は、サラリーマンであり組織人だというようにお見受けするのですが、そういった方々と同じような立場で多摩ニュータウンというところに住んだがために、そこで何かをしなければいけなくなったので、私の話にいちばん共感していただけるのではないかと申ひ、今日は楽しみにしてやってきました。

一方で、このお三方のところはひょっとすると限界集落というけしからん言葉を使われているところではないかという気がしますが、かくいう私の住んでいる多摩ニュータウンというところも東京都下にあるのですけれども、住んでいる人自体も東京都民という自覚がなく、新宿方面に出ていくことを「東京に行ってくる」と言うのです。

私は八王子市民なのですけれども、多摩ニュータウンに住んでいるとまったく八王子市に住んでいるという印象がなく、今日は私の友人も来ているのですけれども「八王子に行ってくる」とJR八王子駅あたりに行くわけですから、きわめて自分が住んでいるところにふるさと感がなく、アイデンティティを感じないところに住んでいるということです。私自身も単純に寝に帰るだけのサラリーマンであったわけですので、そのようなところに大きな反省をしたところから始まった活動だということです。

それを以前、大湯さんのところの能登に呼ばれていくときに、限界集落という言葉に相対して「限界都市からやってまいりました」「限界の町からやってきました」という話をしました。確かに僕はそのぐらい厳しい状況を、東京郊外の都市住宅街というものが抱えているというように思っています。

地方は限界集落という言葉に代表されるように、国からも霞ヶ関からも政策の対象になっています。一方で東京の23区内、特に山手線の中というのにぎわっていますのでさて問題はなにかと思うのですが、東京のようなところの郊外に一気に団塊の世代を中心として、大量に同じような世代が住んでいるわけですから、そういったような人たちがいかに幸せに暮らしていけるかということが、僕にとっての地域活性化であります。

今日のパネルディスカッションのテーマは「地域力の創造に向けて」ということですが、富永が自分で勝手に解釈するとしたらどういう言葉になるかというように、皆様の話を聞き

## ■ 東京フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

ながら思っていました。地域力とは人間力だというように、端的にいま現在は思っています。人間力活性化による郊外都市の価値創造。価値というものは何かと言えば、簡単に言うとしあわせ創造に向けてというように思っているということが、今日の私の結論部分ですので、そういったことを前置きにして話を始めさせていただきたいと思います。

私はサラリーマン時代に外資系でマーケティングやセールスというものをやっていたので、当初からこんなに明確に考えていたわけではないのですけれども、今日、皆様方もビジネスマンが多いかなという気がしますので、地域経営の4 + 2資源 + 事務局ということで考えてみました。

人、物、金、情報というのは、皆様方はよくご存知の経営の4資源と言われるものです。そこに時間、ボランティア時間のようなものが加わり、協働というプロジェクトチームのようなものが生まれて、それをプロデュースする事務局のようなものが地域に生まれたら、こんなことができるということをお話ししたいと思います。

地域活性化支援事業、地活隊（ちいきたい）についてです。マーケティングを得意としてきましたので、ネーミングはより楽しく、あまり疲れないようにと思いながらやりました。ある地域のある人は「この町にもお祭りの一つぐらいあってもいいのにね」と言うのですが、何もしません。何もしないのですけれども、ちょっと近所に「お祭りってあったほうがいいですか」と聞いてみると、わが町の人たちは非常に勝手に、「自分は何もしないで誰かが勝手にやってくれて楽しい場面だけをつまみ食いできるといえばん幸せだ。準備も後片付けもしないで楽しくあれば最高だ」というように思っているのです。

それを裏返すと商品開発でできるということです。お困りごとの裏返し商品開発で、これは売れるということですから、そこに物好きすればどういうことになるかということをやってみました。

最初は100人ぐらいのしょうもない「ぼんぼこ祭り」というお祭りを作ったのですが、最近では4,000～5,000人も集まってきてキャパシティの限界で困っています。これで何ができるかというと、人間の発見ができるのです。多摩ニュータウンにあって田舎に無いものは何かというと、圧倒的な人の数なのです。人間こそが資源だと。ですから、人間の中でお祭りをやりたいという人がいるのであれば、みんなで手弁当でやるようにしよう。

本日ご出席の横石さんのところは、山があって葉っぱあるところから、あるものを開くことで町づくりをやってこられたわけですが、多摩ニュータウンには人間がいるわけですから、人間を開けば価値が生まれる、幸せが生まれるというように思いました。

その次にニュータウンには立派な公園がありますので、公園をどうしたら活性化するのかということをやってきました。そうすると、広報活動をしたくなるのですが、広報活動ができる人たちがいるのですね。広告代理店から、いろいろなところに勤めている人たちもいるので、そういう人の中で富永と同じように物好きをしていただければ、手弁当でも広報活動をできるようになるのではないかと考えてやってくると、まさにできるようになりました。

インターネットも使えたらいいなということになり、皆が低速インターネットはきらいだと。これからADSLや光ファイバーの時代が来るのにと。行政に任せていると都道府県に回って三多摩格差と言われて多摩は最後になるのではないかとというように文句だけは言うの

です。文句をひっくり返すと商品開発になるわけですから、そうならやってみようと言ってADSL500回線をわずか4カ月で開設することを企業と一緒にやりました。企業と一緒にやることで1回線1万円の手数料を企業から取りましたので、これで500万円を稼ぎました。

わが町は皆、産業がない、誘致する会社もない、企業もない、そんな用地もないというように言って嘆きますが、わが町は多摩ニュータウン開発で住宅を開発した町ですから、産業は住宅産業の町だというように言いました。だんだん私の財布も軽くなる、皆の財布も軽くなる。そうであるならば、マンションの管理組合の経費はできるだけ出て行かないのがよろしいと。出るものを抑えないと入るものが減るわけですから、収支バランスが合わなくなりますので、それを減らすためにはマンション管理会社に任せるのではなくて、自分たちが管理したらどういうことになるかということ、地域にプロたちを発見してNPOの旗の下に糾合することでやってきました。

そうしていたら、今度は「いつも、いつも作った家を与えられて、吊るしではあるまいし選ばせるだけなんてナンセンスだ」などと言う人が出てきました。、自分の家はいまさら買い替えるわけにはいかなくなってきたけれども、何人かの人のためだけでも自由設計のコラボティブ住宅を造らせてあげたいというように物好きが言うので、一緒にやりました。2004年に14世帯。2007年に6世帯の住宅を開発することに成功しました。

多摩ニュータウンには商店街がほとんどありません。山を削って作ったところで昔の商店を全部つぶしてしまいましたので、商店が減ったのではなく、根こそぎなくなってゼロになってしまったのです。駅の周りにはイトーヨーカ堂とか全国チェーンのお店があってにぎわっているように見えるけれども、その富は全部イトーヨーカ堂の本社に吸い上げられていくというだけです。地域に金は回ってくれない。おいしいものも画一的でなかなか食べられない。

そうならばということで、私の友人の食品会社と一緒にあって、そこの常務がもうリタイアしたのですけれどもわが町に住んでいるので2人で企てまして「おれたちの老後の食べるための対策のために、惣菜のような一品料理からやってくれるようなレストランを作ろう」と言うことで作りました。

2008年1月15日、2年前に1号店をオープンして、2号店を開くのに大変苦労したのですが、昨日、その社長さんから電話がかかってきました。「つつじヶ丘に第2号店を7月末にオープンするので、オープニングの日に日程が合うようだったらぜひとも来てくれ」というように言われました。

私はNPOでNon profit、Non money、Non paymentのようなところにいますので、お金も物もないのですけれども、大企業の懐を当てにして、人間力があってプロデュースする力があれば、そういう不可能も可能になるということです。

日本は幸せでありまして、持てるものはたくさんあります。ところが遊休しています。人、物、金、情報の多くが遊休しているのではないだろうかという思いで地域を見てみると、地域は宝の山ではないかというように思います。そういったようなものをいろいろと活性化すると……。だいたいわが町にはまた20も30も大学があるものですから、石を投げると大学教授に当たるというぐらいいるのです。それでこの人たちがうるさいのです。すぐに人のところに来て「どうしてこうなったのか」「どうして、どうして。そうならどうするのか」「僕

## ■ 東京フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

はやらない人だけでも、あなたは実践する人だからもっとこうやれ」とかうるさいのです。

そういう人をNPOフュージョン研究所というところに来てもらって、調査、研究のときにはそこから人材を発掘してきては、いろいろなお仕事をさせていただくようにする。

では、いま現在はどうしているかという、力が多少付きまして、八王子市からも認めていただいて20ヘクタールの大きな自然保全型公園、長池公園と言いますがけれども、それをお預かりして何とか地域の皆でワークシェアリングしながら頑張っています。

ここでいったい何が起きているかという、年間推定来園者数の設計人数がマキシマム15万人のところ、17万以上の人が集まってきて、もう土日には雨でも降らないかなと考えてしまうほどです。昨日は雨が降って皆でほっとしたというぐらいに人が来ます。そうすると人間が全部見えてくる。それだけ多くの人をケアして、ある種お世話をするためには、人間力の時代です。不登校になって高校に行き損ねた10代から、80代のおじいさんまで皆働いています。

ですから、ここで地域活性化を持続可能にするためにもっとも肝要なことは、人間の陣列です。人間のロジスティクス。人間が絶対に絶滅しないように、私が絶滅しても次につながるように日常的に縦の3世代、10代から80代までがいきいきと活性化して「いいね、ここは」「ここで働けるのは幸せだね」「この公園があつていいね」「あそこに行けば住宅の話から高速インターネットの話から、いろいろと聞かせてもらえるし、いろいろと教えてもらえるから、この町に引っ越してきてよかったね」というように言っただけのような町ができれば、人間が活性化し、わが町は活性化し、多くの人に幸福感という価値創造を提供し続けていくことができるのではないかと考えて、日々、悪戦苦闘しています。

**岡崎**：どうもありがとうございます。いまのお話を聞きしても活き活きとした活動がよくお分かりいただけると思いますが、富永さんがいらっしゃるからこういうことが可能になっている部分も非常に大きいと思います。

確か現在、東京大学で日本の高齢化社会にどう対応していくかということで、千葉県柏キャンパス周辺の、多摩と同じようなニュータウンで、従来あった低層5階位の住宅を高層化することによって周辺に耕作地を作っていくという計画をしています。高齢化した人たちがお金がなくなれば、外に一步も出ることができなくなるような閉塞空間を、外に広げていくという実験的な取り組みにいま向かっているそうです。そういうところと比しても、富永さんのところは既存のものをうまく色々な形で連携して使いながら、頑張っているということだと思います。

次に横石さんをお願いします。もう皆様は徳島県上勝町のいりどりといえはよくご存知であろうかと思いますが、今日はそれを仕組まれた横石さんにおいでいただきましたので、通常では表に出てこないような情報も含めてお話しをお願いしたいと思います。

**横石**：皆様、こんにちは。ご紹介にあったように、私たちの活動は、テレビや新聞によく紹介されるようになってきました。『カンブリア宮殿』に出していただき、このあいだも『ルビコンの決断』という番組で放送されましたけれども、今日も会場に映画のディレクターが来ております。今度は映画化をしようということで、全国に映画となって広がっていくようになっていくのではないかと思います。

実は私は、地域づくりをしようとか、町づくりをしようとか思ったことは一度もありません。

ん。結果的にそうなるものだというように思っています。上勝町にお世話になってもう32年目になりました。徳島市で生まれて20歳で町長にスカウトされて行きましたけれども、住民反対の中で、よそ者を入れるなどという中で、町長は強行採用という形で踏み切ったのですけれども、本当にどん底から這い上がっていったというか。行ってみてびっくりしたことは暇ということが、こんなにも人間社会の中でだめだということを思いました。とにかく田舎は暇なお酒を飲みます。朝からお酒を飲んで愚痴を言う。女の人は嫁の悪口、近所の悪口を連発。

先ほどの木村さんの講演ではないですけれども、上勝町に行って驚いたのは、お母さんが私のいる目の前で「あなた、勉強せなんだら、この上勝町に残るようになったらどないするんで。お父さんのようになつたらあかんでよ」と。この一言を私は一生忘れません。自分の子どもに向かって町にいることがいちばんいけない。お父さんのようになってはいけない。お父さんは建設業で年中、酒を飲んでいましたけれども、こういう親にしたくないというお母さんの思いが非常にありました。

しかし、現場を見て、やはり無理もないと思いました。それはやはり生活するのがやっとだったからです。生活ができないということが、いかに地域の中でだめかということがあったので、地域づくりをしようと思ったのではなく、居場所と出番と仕事を作らなければいけないというこの三つが、やはりすごく大事だということを思いました。

いま上勝町は人口がたった2,000人です。86%が山で、四国の中で町とつけばもっとも人口が少なく、高齢化比率は49.5%、約半分の50%が高齢者です。しかし、いま日本ではいちばん元気だと言われるようになっていきます。

なぜ葉っぱの商売を考えたかという、上勝町に行っているままではだめだということが当時はありました。この生活習慣がいけないとすごく思いました。ですから、習慣を変えたいということを思って、いまのやり方ではだめだ、こういうやり方、地域にあるものを見直して、地域にあるものをビジネスとして起こしていくことがすごく大事だという話をしたら、すごく怒りました。「おまえ、誰に向かって言ってるんだ、よそもんが来て、わしらに言うことか」ということでものすごく説教をされ、そして最後には「出て行け。おまえは明日から来んでええぞ」というところまで言われてしまいました。

役職部隊と実働部隊というのは皆様はご存知ですか。田舎というのは、役職部隊と実働部隊というのがあるのです。役を持った人が仕切っているのが田舎なのですが、その役職部隊の人にすごく怒られて、すごく性格のきつい人ですけれども、そういう人は奥さんに弱い。嫁さんにもものすごく弱いんですね。「お父さん、そういうことを言うたらあかん。横石さんが、ああやって一生懸命しているんだから、こらえたり」とか「許したげ」とか言うのです。

そのことを見て、これは女の人を口説かなければいけないなど。女性ができるビジネスを考えていくことがすごく地域にとって大事だということが頭の中にあったのです。ですから、葉っぱのビジネスにたどり着いたのです。この葉っぱを売ってみよう、これをビジネスとしてやってみようということを考えました。

しかし、びっくりしました。これはおもしろいと思って皆に「葉っぱを売るぞ」と言ったら「横石さん、葉っぱを金に換えるのは阿波の狸か狐の御伽噺だ。もっとあんだ、仕事をまじめにせえよ」と言われました。男の人は「こんなものが売れたら飲み屋街を逆立ちして歩

## ■ 東京フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

いてやる」と言っていました。私に言ったことで非常に印象的だったのですが「横石さんの言うことはきかん」「どうしてですか」「私はごみを拾うて生活しとうないわ。そんな貧しいことはしとうない。葉っぱや草を売るのは貧しい人がすることや」と。

このとき自分は気が付きました。そうか、地域にある資源というのは、誇りや自信がなかったら、自分のものに、本物に見えないのだと。ですから、このビジネスを成功させなければいけないということに気が付きました。しかし、やってもやってもうまくいきませんでした。

昔の料亭世界というのは本当に一般の人には考えられないような世界で、給料を使わずとお客で行って、本物に近づけていったという経過があります。しかし、やはりそれが売れ始めてきて、宝に見え始めてきて、自信を取り戻せるようになってきたというのが流れだったと思います。

特に大きかったのは、やはりITを使ったことです。コンピューターを使う。セブンイレブンのあの仕組みを見たときに「これだ」と直感しました。コンピューターを使って情報化を進めていく。東京との違いは、この情報力の弱さだということが、自分の中で直感で分かりました。ですから、コンピューターを入れようということを十何年前に考えて、帰ってすぐに「コンピューターを入れたい」と言ったら、議員さんが「わしらができんもんが、親にできるわけがないぞ。おまえは心配はないか」と言って、おばあちゃん、おじいちゃんに言ったら「横石さん、こわい。爆発せえへんの」という人もいました。

そんなことは無理だと言われたのですけれども、小さいときから絶対にあきらめないというか、あきらめると出口がないので、自分としては何としてもやろうということで、いまは80歳代がコンピューターを使う町、高齢化比率が50%という町でコンピューター保有率が70%の町に成長してきました。

しかし、おもしろかったというか、コンピューターというのは本当におもしろいもので、使ったことがない人は、皆「どうやって使うんですか」と言われるのですが、用語もわからないし、でもすごいものだといまは感じています。マウスを持たせて「上だ、上だ」とこう持ち上げる。持ち上げてあれは動かないですし、「机が足らん、机が足らん」と叫ぶし。

いちばん驚いたのは「これから始めますよ。立ち上げてください」と言ったら、皆、起立しました。これには本当にびっくりしたというか、知らないということはすごいことだなと思いました。しかし、いまはICT（Information and Communication Technology）を使っています。これがすごく強いというか、皆様も見えていただいたらびっくりしますけれども、距離感をなくして毎日の情報がコンピューター化されて、常に情報が入っているというのが、非常にうまくいった点だと思います。

おばあちゃんやおじいちゃんがすごく元気になって、実はいまは大きく上勝町は変わってきました。最近では、おじいちゃん、おばあちゃんのパワーが落ちてきたというように言われるようになりました。それはどうしてかということ、若者が増えてきたからです。これはここ2、3年の大きな変化ですけれども、いま都会では自分が役に立ちたい、自分が社会企業家になりたい、自分が認められる仕事をしたい、環境の仕事をしたといういろいろな意味で若者が、地域や農業などに対してもものすごく関心を持つようになりました。

昨年、上勝町で田舎で働きたい者は集まれという募集をかけたら、50名の定員になんと

1500名を超える応募がありました。うちの社員はいまは全員Iターンです。町中、組織はほとんどIターンということで、20代の女の子がたくさん上勝町に増えてきて、いまはすごく元気な町になっています。

これはコミュニケーション能力が高いこと、学歴で人を左右してはいけませんけれども、ものすごく学歴も高く、地域の中で優秀なコミュニケーション力の高さ、そして地域の中で居場所と出番と役割を持って活躍するという高齢者と若者が一体となった町になりつつあります。これが私はいちばんうれしいというか、いくら高齢者が元気でも若者につながっていかなければ地域の将来性はないというように思っています。この出口が見えてきたことが、私にとっては非常にうれしいというか、どんどんこの形を増やしていきたいというようなことも考えています。

今年度は約160名のインターンを受け入れていくということで、もっと地域の中で若者の居場所と出番を作っていく環境へ整えていきたいと思っています。社会の変化の中で新たな上勝町を作り上げていくという挑戦がいまも続いているような現状です。

ぜひ皆様とも今日はつながりができていければいいなというように思っています。

**岡崎：**横石さん、有難うございました。いま全労済協会で「地域社会研究会」という研究会を開催してまして、そのメンバーでひと月前に横石さんのところに出かけて現場を見せていただきました。横石さんもお同行いただいて、88歳のおばあちゃんの作業場を見てきました。ちょうどコンピューターを操作していて、個人情報のところまで開いて見せてくれました。すると約200名登録している中で、毎月の売り上げが出ているのですが、確かあのとき、そのおばあちゃんは第4位でしたね。88歳で月平均50万円を稼いでいらっしゃるのに4位では残念そうでした。「そんなに稼いでどうするの」と聞きましたら「ひ孫が11人いて、今まではお小遣いは千円で足りていたけれども、もう1桁上げてくれという要望が強いので」ということでした。

葉っぱは日本中どこの農山村にもありますが、それを商品化し、日本のトップクラスのホテルや料亭につま物として納めていく仕組みを構築したのは上勝町だけです。箱に葉っぱを詰めているところを見ても、どうしたらきれいに見えるかなど、様々な工夫が細かいところでされている。お年寄りには時間が沢山あるので丹念にそういうことに挑んで、商品価値を高めている。

とりあえず4人にご自分がいま取り組んでいる活動やその背景について、ひと通りお聞きしたところです。いまの段階はこういう取り組みができたということでした。しかし、その地域社会はずっと持続していて、それぞれの地域社会はいろいろな課題も依然として抱えているわけであろうかと思えます。続いて、今までご紹介していただいた活動の中で、どういうことが地域社会でクリアできたのか。こういう点は非常に高まって、それこそ地域力創造ができてきたというような点を少し客観的に見てご指摘、ご発言いただきたい。それからもう一点、ここまでやってきたが、これはまだ未達成だ、こういう問題は解決できずに困っているという2点について、次にお話しいただければと思います。横石さん、よろしいですか。

**横石：**はい。地域活性化のために何が必要かということですがけれども、いま民主党主導の内閣で新しい公共というものをやっています。私も円卓会議の委員ですけれども、私はあまり

## ■ 東京フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

政治に関心はないのですが、非常にいい考え方だなと思っています。居場所と出番を作ることなのですけれども、まさに居場所と出番と、上勝町の場合は仕事作りだったのです。

やはりこの居場所と出番を作っていくことがいかに大事かという中で、どんどん社会企業化していくというか、コミュニティビジネスの、ソーシャルビジネスとも言いますが、これをどんどん私はやっていく必要があるというように思っています。

そうしていくとすごく地域はよくなっていくというか、日本人というのは「結」の精神というか地域が自治会や町内会といった中であつたのです。しかし、これがだんだん崩れてきて行政に負担を負わすという形になってしまった。それをやると膨大な費用がかかってしまいます。しかし、皆に居場所と出番があれば非常に地域がよくなってくる。

上勝町の場合を言うと、葉っぱのビジネスができたことによって、実は健康福祉にもものすごくつながるのです。上勝町は、徳島県内で医療費がもっとも少ないです。高齢者医療がいちばん少ない、介護保険がいちばん少ない、生活保護がいちばん少ないのです。ですから、健康福祉にもものすごくつながるのです。

また教育関係を見ても、家族の中がよくなってくると教育環境がものすごくよくなります。ですから、教育レベルがものすごく高くなってきて、教育の、学ぶことに対する姿勢が非常によくなってきた。

それから環境保全です。葉っぱの産業がどんどん進むことによって木を植えていく。桜やもみじを植えたりすると、環境がよくなってくる。また国土保全もよくなってくる。商工サービスも人がどんどん入ってくることによってよくなってくる。農林業も農業のブランドができて儲かるようになってくる。

こうやってみると、一つの「いろどり」ができたことによって地域の居場所と出番ができたら、皆このように一つにつながっていくのです。ですから、単なる葉っぱというのではなく、居場所と出番があることによって地域全体が、その地域の中での舞台ができてくるということになります。私は100の地域には100の「いろどり」があるということを言っています。皆様の仕事も同じで、一つのことが全体の中にすごく連鎖していくのです。これがこれからの地域社会の中のすごくいいあり方だと思っています。

ですから、特にコミュニティがすごく大事で、仕事というのは田舎の場合、事業は1割だと思っています。9割がコミュニティです。ですから、うちの社員は仕事をしているか、遊んでいるかとまでは言いませんが、敬老会で歌ったりとか、バイオリンを弾いたりとか、ブログをやったりとか、デザインを世話をあげたりとか、仕事以外のいろいろなコミュニティのことができることによって仕事ができるという形になります。

いまの時代から見るとコミュニティ、人間関係が非常にうまくいくということができると事業はすごくいい形で進んでいくと思います。ですから、地域活性のあり方というのは、そういう意味ではやはり居場所と出番を作っていく、社会企業化していく。企業化していくことへ進めていけば、これからおもしろい時代になるのではないかという感覚を持っています。

新しい公共では、内閣府のホームページで私の資料も出ています。なかなかおもしろい資料を作って出しています。ビジネスの提案をたくさん出していますので、もしよかったらまたホームページで見ていただいたらと思っています。

**岡崎：**有難うございました。2点ほど付け加えてもらいたいと思うのですが、上勝町はゼロ・エミッションという排出物を限りなくゼロに近づけていこうということで、現在はゴミの34分別という細かい分別をして、できるだけ野焼きをしない、埋め立てもしない、リユースするということに取り組んでいます。そのゼロ・エミッションのことと、もう1点はIターンで入ってきた能力の高い若者たちのことですね。この人たちがどのように、横石さんのおっしゃる居場所と出番と役割を担っているのか。

私も全国を歩いてみまして、例えば大学院でもマスターを出た高い能力を持った人たちが、ピンポイントで居場所を探して有機農業を始めて、その周辺にグループを作ったりしています。例えば北海道の果てで、帯広畜産大とか東京農大の大学院を出たような人が、非常に厳しいが羊飼いを始めて、これを高級ホテルのシェフと組んでラム肉として販売する等の例がある。なかなか定着はしていないが、全国的にはそういう能力の高い人たちが厳しい地域の中で頑張っている。生活も大変だと思うのですが、そのあたりは横石さんはIターンの若者たちをどのように背中を押しているのか。その2点をお話ししてください。

**横石：**ごみは町長が非常に力を入れていまして、ゼロ・ウェイスト宣言をして、議会でもゴミをゼロにしようということで、現在、上勝町のリサイクル率は日本でもっとも高く、ゴミを34に分別しています。地域にある資源を有効的に活用するため、ゴミ収集車はなし、燃やす施設はなしということで、これは東京の町田や神奈川の葉山とか、水俣などいろいろなところにいま広がりを見せています。

やはりこれは「いんどり事業」との関連も深く、地域にあるものを資源として見る目が出てきたのです。ですから、もったいないということもあるのですけれども、くるくるショップというおもしろい名前をつけて、地域の中で不要になったものをそこに集めて、誰が持ってきてもいいし、持って帰ってもいいという形にしたら、ものすごく回転していくのです。モノによっては、どんどん、どんどん回転していくということもあります。

ですから、ゴミ一つを取ってみても、あるいは2,000人だからできるというのではなくて、地域全体の中で環境という点をもっと皆がとらえていくと非常におもしろい循環ができるという事例ではないかと思っています。環境に関心を持たせることができたので、やはりこういうものはもったいないとか、こういうことはやめようとか、こういうことは大事にしていこうとか。人間というのはやはり関心が出てくると、いろいろな知恵や発想が出てくるといのが現実です。

またIターンですけれども、やはり地域の中でビジネスを起こしていかなければIターンの人が生活をしていけません。上勝町は、後継者問題がいちばん大きな課題ですけれども、いまは高齢者がやっていることとIターンで上勝町にやってきた人が一緒になって部隊を作りながら、町の中で産業に絡めて仕事を持っているという形になっています。

これは非常にいい形で、やはりIターン者も高齢者と一緒にやるのが大好きで、教わることがたくさんあります。それを教わりながら、いろいろなビジネスとか仕組みの中に人が張り付かれているという形ができています。

しかし、今後のことを考えた場合に、これをどこまで増やしていけるか、社会企業化させられるかということが大きな課題で、それをしっかりと私のほうで部隊づくりをサポートしていくという必要があると思っています。先ほど言った160人のインターンを入れていくこ

## ■ 東京フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

ともそうですけれども、この波をどこまでずっと具現化していけるというか、生活していけるということがいちばん大事なことなので、やはり経営できる人材の育成に最重点を置いて取り組んでいるということが現実です。

**岡崎**：有難うございました。学生は4年生になると卒業していく、出口をちゃんと確保していくということは重要なポイントです。いまの若い人たちを見ていますと、沢山の所得とか、物を沢山所有するというよりも、どちらかというと自分を組織の中、地域社会の中で認めてもらいたいというところを選んで、社会へ出て行くという気持ちが強いのではないかという感じを持っています。

つまり所有欲、たくさん所有したいというよりも存在欲、自分が居ることを認めてもらいたいという思考のほうが強い部分があるという気がします。そういう若い人たちをどう後押しするかというのは、実は難しい問題でもあります。

横石さんのような方がいないとビジネスも起きてきてこない。富永さんのところにも実は私どもの学部や大学院の学生たちが随分お邪魔しておりまして、いろいろなことを勉強させていただいています。そういう若い人たちとの連携も含めて、富永さんのところではどういうことがいままでクリアされてきたのか、何か課題として残っていることがあるのか。そのあたりをご発言いただけますか。

**富永**：そうですね。私は昭和27年に生まれて、親が終戦後を生きていく中で、とても貧しかったものですから、この貧しさから脱却するためにはやはりお金儲けをしなければいけないと思っていました。ビジネスマンはプロの仕事だから、いきなりプロ野球選手のように稼げなかったとしても自分はビジネスマンとして一つの成功を取めるとしたら、ある一定以上の年俸を取ることなんだというように思って果敢に勝負した時代があります。

ところが40歳を過ぎるぐらいから世の中が変わってくることに、一つの目標を達成してしまうと自分もちょっとしらけていくような部分もあった。実は今日は私の息子が来ておりまして、彼が25歳なのですけれども、人、物、金、情報という経営の4資源の融合のさせ方に対する感覚がまるで違うのです。

私の息子の隣に川端さんというおじいちゃんが来ております。御年79歳になりまして、70歳から私の仕事を手伝って、今年で何と80歳になります。お元気で、私よりも食欲があるので、口と腹が達者なら長生きすると言っているのです。

息子と彼は、価値観がよく似ているのです。お年を一つ召していくと、もうそんなにお金を特別儲けたいわけでもない。後は本当に幸せに生きていきたいという感覚の川端さんと、息子は25歳ですけれども、先生が言われたようにあまりガツガツと親父みたいに働きたいと思っているわけではない。よく考えてみると、このあいだ「はっ」としました。21世紀は息子たちの時代なのです。彼らには25～50年の生涯が残っているのです。

今朝も私のことを言っていたのですが、もうすぐ賞味期限切れ、それ以上もう少し行くと消費期限切れの親父よりも、これから商品を作ってしっかりと味わいのある味を社会に提供しなければいけない息子たちの時代というように思うのです。

そうすると、この少子高齢のゆったりとした豊かさのスローテンポであったとしても、ちょっと経済力はしぼんでしまうかもしれないけれども、精神的にとっても豊かな時代が日本社会にも来るのではないかという大きな期待を僕は持ち始めています。

それをいまの若者は草食系でいけないという説教じみた話をする暇があったら、そういう若者たちとお年寄りが「幸せだな、幸せだな」というように思っただけのような社会を構築するために、50前後の親父たち、おふくろたち世代が応援団をこの馬力でもってやったらどうい社会が来るだろうか。これからは企業経営であればお金のバランスシートで評価してきたことから社会貢献事業の評価制度、満足感というか精神的な豊かさの評価制度の時代ではないか。この新しい社会評価軸のようなものを作らないと「何かよさそうなんだけれどもね、富永さんたちはよく頑張っているよね」「どう頑張っているのですかね」。何となく横石さんたちは頑張っているみたい。何となく大湯さんのところも頑張っているみたいだと。柳谷（やねだん）の豊重さんも頑張っているみたい。何となくではわからないわけです。

企業経営にはバランスシートなどの評価制度がちゃんと存在していますが、多様なパラメーターが存在する社会貢献事業の評価制度はとても難しいと思います。それでも、大学の先生方と研究者の方々と連携し、僕らのような実務部隊と融合させて、何か新しい時代における価値のバランスシートというか、幸福のバランスシートのようなものを生み出すことがこれからの課題ではないのか。

そうすれば、お年寄りから若者たちまで、0歳から100歳が豊かになれる社会というように言っていますけれども、そういうものを明確に、国民一人ひとりの人の幸せ感に則って世の中に表現していくことができるのではないか。これを霞ヶ関にも訴えているということがいまの僕の課題に対しての考え方です。

**岡崎：**有難うございます。私もはそういうことにもっと深くコミットしていかなければいけないとも考えています。

一つは、まだまだ今日のパネリストの皆さんが担っておられるような現場に、より多くの人が、関心を持つだけではなく足を踏み込んでいただく、そういう多くの経験の中から持続的な方向が生まれてくるのではないのでしょうか。

ここのところよく聞く話が、先ほど横石さんがおっしゃった大学生の農山村への関心です。先ほどお伺いしたら、2,000人の町に160人の大学生を1カ月受け入れるという、これは町としても大変なことだと思います。私の学部でも毎年40名前後の学部3年生を全国13地域に分けて、2、3名ずつ夏休みに派遣して、地域の方々にご面倒をおかけしていますが、これを160名受入れ、それをちゃんとしたトレーニングとしてやっていこうということだそうです。

鹿児島県鹿屋市の柳谷（やねだん）地区の豊重さんのところも確かそういうまちづくり塾を開催していらっしゃる。そういうところが、いま、人材育成ということに乗り出して、横に連携を結び始めたという新しいステージが出て来たと感じています。

猿舘さんのところに話を移ささせていただきたいと思います。猿舘さんから、先般、こちらに参加するにあたって長文の悩みのメールをいただきました。猿舘さんのところは色々取り組んでいるのですが、今度のコーポラティブハウジングは、本当に一大事業です。特に土澤の商店街にとっては大変な事業ですが、女の細腕で取り組まれたということです。いまの状況とこういう仕組みや連携があったら何とかブレイクスルーできる、そのあたりは何かお考えのことはありますか。

## ■ 東京フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

また街中アートで土澤の商店街あるいはその商店街の人たちの精神的な変転といいますか、そのあたりもお気づきのことがあったらお話してください。

**猿舘：**最初に街かど美術館ですが、1回目のことですが、作家さんが各商店や空き家にどんどん入り込んで作品を展示するようになったときに、まず商店街の人が何を始めたかという店の掃除を始めました。ということは「暇だ、暇だ」と言っていて、店の中も掃除をしていなかったというのが商店街の現状だったのです。それがそこに他人が入ってきて、作品を置くということによって、見られる意識というものが商店街の中に発生してきたということです。大掃除でした。作品がない商店まで掃除を始めました。

また開催すると街かど美術館に訪れたお客様が非常にほめてくれるのです。「いい町だ。こんないいことをやって、本当にいい町だね」と。ほめられるといやな気はしないですよ。そうすると、最初のうちは「こんなわけのわからない作品を置いて気持悪くて、よそに持って行ってくれ」と言った店主も、いい企画展だのいい町だとほめられると、途中からあたかも自分が作家になったように作品の説明を始めるわけです。

動きのない町だったというところですけども、やはりよそから来た人たちによって、自分たちの町のよさというようなものを再発見した。やはり見られるということのすごさ。女性も見られることできれいになると言いますが、商店街も見られることで意識的に変わっていく。それが非常に大きな効果があったと思います。

それから共同建替え事業ですが、これは非常に過酷な事業です。用地の一部を土澤まちづくり会社で取得し、まちづくり会社が事業施工者として行うはずでしたが、第3セクターであることから花巻市としては最悪のリスクは回避したいという考えにより、まちづくり会社役員6名で新たな別会社、合同会社土澤長屋暮らしを設立し、立て替え事業をスタートしました。

国の補助金もたくさん利用させていただきましたが、やはりいちばん困ったのが自己資金の部分です。先ほど、富永さんが限界都市という話をしていましたけれども、こちらも負けずに限界商店街と自分たちのことを言っています。このような商店街での事業は、リスクな事業として捉えられ、役員の商店主5、6人が束になってお願いしても地方の銀行はお金を貸してくれないわけです。

いくら銀行側から見てリスクな事業であっても、自分たちで責任を持ってこの町の将来を担っていこうという気持が非常に強かったものですから、あきらめずに交渉を続けやっと4軒目で長期の融資が決まりました。銀行との交渉の中で実感したことは、私たちが思っている以上に地方が非常に疲弊していることでした。

私たちが責任を持って、リスクまで負ってやるという事業をスタートさせることによって、次の土澤の町の新しい展開ができるのではないかと。私たちがまちづくり会社を始めるときから言っているように、地域のことは自分たちで責任を負う。行政の責任でもなければ、世の中の責任でもありません。自分たちが生きていく場所は自分たちで責任を負うという気持ちでやっています。毎日が火曜サスペンスと昼の奥様劇場の何かドロドロと先が見えない展開で、非常に大変なのですけれども、おそらくそのドラマが打ち切りにならない限り、最後には結果が出るのではないかとこのように思っています。

町づくりというのはきれいごとでは済まないということを肌で実感しながら、いま頑張っ

ている最中です。

**岡崎**：できましたらもう少し具体的な建物のイメージをお願いします。

**猿舘**：1階の部分が先ほども言いましたけれども共同店舗で、地権者の方たちの店舗と新規のテナントが入ります。地権者のテナントとしては、キノコ屋さんや長屋のように仲良く生まれ育ったまちに住み続けたいとこの事業のきっかけを作った74歳の藤根華圃さんの喫茶店もあります。事業のきっかけを作った華圃さんに新しい住居に長く住んでいただきたいということもあり、事業の完成を急いでいるところです。

新規のテナントとして、これからの高齢化社会に合わせた惣菜屋、引きこもりのご高齢者を防ぐ意味でも、みんなで食事ができるコミュニティレストランなど。また、岩手県は県立病院の無床化がどんどん進んでいます。おそらく在宅医療が今後、進んでいくのではないかと。それを見越して、地域医療の拠点として訪問看護ステーションも開設する予定です。

2階の部分は高齢者向けの賃貸住宅で、60歳以上の入居者には、市より家賃補助がでるため、家賃も年金の中で賄えるような家賃設定をしています。分譲はできれば都会の皆様にも、新たな土澤の住民として、皆と一緒にこれからの人生を楽しんでいただければと考えています。

**岡崎**：ありがとうございます。横石さんのところの「いろどり」とも共通する部分があるわけですね。お年寄りがずっと過ごしてきた商店街の中で居場所をきちんと確保していこう。元気な方は1階のコミュニティレストランとかで役割、あるいは出番を全うしていただくというようなことですね。

**猿舘**：岡崎先生にもご協力いただいているのですが、コミュニティレストランと惣菜屋は地域の女性の方たちが起業してやっています。いまはチャレンジショップで、できる前に空き店舗を使って実践を積み重ねている最中です。その姿を見ているとやはり女性の力というのは、これからの地域づくりには大きな力を担ってくるのではないかと非常に感じています。

いままでご主人の言うことばかり聞いていて、外出するのも小さくなって出ているといった女性が「今日はお惣菜のお店の日だから、あなた、お願いね」というように、自分の意思で自分のしたいことを行動にうつしていくことは、女性の自立と言う意味でも非常に大切なことかなと思っています。

**岡崎**：そうですね。これがもし完成して軌道に乗れば、こういうローカルな商店街の一つの道筋は非常に参考になると思います。いままで商店街の再生というと、どうやって新しい店を導入して商店のシャッターを開けていくかということに議論が集中しすぎていましたが、元々日本の商店街とはオーバーストアで、商店が多すぎたわけです。ですから、商店街にいかにか人が住むかということを模索していかないと、商店街の活力を上げていく方向は見えてこない。そもそも人がいないと商売が成り立たないわけですから、そういう意味でコーポラティブハウジングを成功させていただきたいと期待しています。

大湯さんのところは、海外とも密接な連携を取りながら、能登という遠隔地で頑張っているのですが、そういう中で能登でクリアできたポイントとか、あるいはそこまで頑張っているのが、まだなかなか厳しい点など、お気づきの点がありましたらご発言ください。

**大湯**：能登半島地震が発生した時、自衛隊、赤十字、ボランティアが来るまでに実は、そこ

## ■ 東京フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

に住んでいる人たちが、水の確保、炊き出し、トイレを作るなど全部やっていたのです。そんなことはあまり報道されていないと思いますけれども、地震が発生したとき、安否確認からやっています。それはなぜかという、地域コミュニティがしっかりしているからです。しっかりしているというよりも、どこどこのお嫁さんはどこから嫁に来てということを全部分かっているのです。いいか悪いかは別にしていますが。

どこどこのご主人は、どこに勤めていて課長をしているとか何をしているかということが分かっているのです。ですから、寝ていても寝室がどこにあるかという人の家の間取りまで分かっている。こういうことが、私の住む能登です。だからこそ、安否確認もすごく早いし、いまこの時間にどこに誰がいるのか。今日、畑におばあちゃんがいるのかということも、だいたい2、3人集まると分かるのです。

そういうコミュニティがずっとあるということは、田舎と言えども日頃からコミュニティが非常に薄らいできているわけですが、皆で頑張らないと自分たちの地域を守っていけないという意識があるわけです。高齢化が進み、少子化して、息子も都会に行っていないとなると火事が発生したらどうするのか。消防署に電話しても来るまでに燃えてしまっているということになるのです。お年寄りも含めて、自分たちのことは自分たちで守らなければいけないという意識があるということです。

そういう日頃のコミュニティのつながりというのは、地震が発生したときには非常に役に立ちました。中には大工さんもいれば、いろいろな人がいるわけです。例えばトイレを作るとなったら、その道のやっている人が皆、出てきて、言わなくてもちゃんと自分の役割分担をする。コミュニティの中でやっておけば、どんなことがあってもそれほど困らないのだろうなと思います。誰がどのような役割をするのかということは、日頃から特別に訓練はしていないのです。防災訓練をしなくても、日頃からコミュニティの中で役割分担はできているのです。

ですから、いつ起きるか分からないときに備えると言いながら、コミュニティを楽しくやっていけばいい。そして何が起きても、皆でしたたかに仕掛けながら準備もしているということ。気が付くのは、震災のときなどです。あのときに皆で協力してよかったなと思えるということなのです。それを誰かがやっていけばいいのかなと思っているということです。

今日、ご参加いただいている方の多くは、都会の勤労者の方でしょうか。私は日頃いつも、人生の仕事とは何かと考えています。仕事と言うと、何か自営業をしたり、働いたり、お金をもらったりすることが仕事だと思っている方もいらっしゃるし、そうでない方もいらっしゃると思いますけれども、私は人生の仕事は五つあると思っています。

五つあって順番があるのです。一つ目は自分に対する仕事だと思っています。自分が生まれて死ぬまでのあいだ、自分に対して何ができたのか、できるのかということを常に問いながらやっていく仕事の一つ。二つ目の仕事というのは、家族、友人に対する仕事があるのだろうなと思っています。三つ目の仕事は、コミュニティを含めた地域や社会に対して自分は何ができるのか、何をしてきたのだろうかという仕事。四つ目が生活をするための資金を稼ぐためのお金をもうける仕事。最後の五つ目は、自然に対する仕事。このように自分では五つの仕事があると位置づけています。

その五つの仕事全部ができる職場であったら、たぶん幸せだろうなと思っています。足りない部分をどう補うかということなのだろうと思います。仕事場に通っていても、地域に戻れば1人の住民ですので、住民としてどのような役割が自分にはできるのかということをよく考えると、必ず役割は見えるのです。人から与えられるのではなくて、自分が例えば会社でパソコンが得意だったら、これをやりたいということ自分で居場所を見つけていく。人から与えられるのではなく、自分で見つけていくということが大切なのだろうなと。そういうことがどんどん埋まっていけば、地域というのはおもしろくなるのだろうと思います。

もう一つは居場所の中で、やはりお互いにそれを認め合うという姿勢が大事だろうと思います。認めるということが素直な気持ちでないと、どうしても学校の先生、特に中学校の校長先生が地域に戻られると子どもとやってきたくせが抜けないので、上目線でやったりして地域から嫌われたりします。ぜひ定年になってから始めるのではなく、いまからやらないとたぶん定年になってからでは遅いと思います。後悔します。

そういうことで、地域と関わっていくということをやったほうがいいと思っています。

**岡崎：**大湯さん、いつも不思議に思うことは、何故ゆするぎ塾が能登にしながらアメリカとつながったのか。しかもアメリカの東海岸とつながったのか。そこへの情報というか、志向というのはどういうことだったのでしょうか。

**大湯：**これは企業秘密なものですから。というのは、先ほどちょっと自分の10カ条の中にも入っていたように、火の粉は払うな。降りかかる火の粉は払うな。私はどんな火の粉でも来たら、ちゃんと一緒に燃えましょうという立場を取っているのです。ですから、外国であろうが、日本であろうと一緒に共有する、あるいは連携できる、協働できるものは何でもやろうということがネットワークになって、JTBさんだったり、アメリカの旅行会社だったりというつながりになるわけです。嫌っていると誰も来ないのです。間口を広げて一緒に協働していくと、どんどんネットワークが広がっていくという形になります。たまたまアメリカであって、来年からはヨーロッパあたりからの受入れも考えています。

**岡崎：**ありがとうございます。私の別の友人が、実は能登を舞台にして活動をしています。能登のいちばん先に珠洲市がありますが、そこからずっと西海岸を輪島、門前、金沢のほうに下りていく、約60キロですが、アメリカの旅行会社と組んで、サイクリングで移動していくことを計画、実行しているグループがあります。

考えてみると、この60キロの能登半島に、日本を代表するいろんなものが詰まっている。珠洲市から下りてくると、輪島の手前に千枚田といわれるすごい棚田があります。輪島に行けば輪島塗がある。漆器はJAPANですから、これは1週間いても飽きない技術集積がある。門前町に行けば、日本でもっとも美しい、日本海に落ちる夕日が見えるホテルもある。最後は金沢というように、日本のエッセンスがあつた60キロの能登半島に詰まっている。

それぐらい日本の地域というのは、歴史的にも景観的にも文化的にもきちんとした目で見ていけば、すばらしいものが凝縮されているのです。それを大湯さんはアメリカとも組んで、アメリカ人の目を通して地域の人がもう一度自分たちを見つめなおすという鏡的な位置づけでうまく活用しているといつも感心して見させていただいています。

最後にそれぞれ4人からこの「地域力の創造に向けて」ということで、話し残したところ

## ■ 東京フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

とか、いまの政府、政策的にこのような支援があったらいいとか、あるいは今日お集まりの方々に、どういう役割を果たしたら新しい地域力創造に結び付くのか。そういう点でお気づきのことがありましたら、お話をお願いしたいと思います。

では横石さんからお願いします。

**横石：**地域力創造に向けてということですが、やはり日本の場合、経営できる人材とか運営できる人材、プロデューサーですが、これがもう圧倒的に不足していると思います。NPOとか、こういうことをやりたいという人はたくさんいていいのですけれども、やはり経営できる、運営できるということが基本になれば、いまの与えられている国のお金だけではなかなかやっていけない時代が来ているので、その人材をどう育てていくかということが非常に大きなこれからの課題かなと思います。

ですから、上勝町にとっても、そのような経営力のある人材、運営力のある人材を見つけていくとか、育てていくとか。そういうことに非常に力を入れていこうということろまで来ています。

そして先ほど一つだけ仕組みの話をしましたけれども、仕組みを作るということがすごく例えば私が今日、ここに来ていることは皆、知っています。明日は何をするのかもです。いまもここから打っていましたけれども、いまのこの状況が常に住民に発信されているのです。そうすると、一体感のようなものが生まれてきて、地域の中の飛び抜けた感覚がなくなってくるのです。

これが地域力ということの中ですごく大事で、勝手に行こうとすると、地方というのは浮いてくるというか、孤立してくるというか、そういう社会になっている。仕組みの中にきちんと落とし、常に情報が見えるようにされていて、一体感があって歯車がかみ合っているというものを作らないと、現場との距離感が出てくるというようなことになりやすいという気がします。

ですから、仕組みを作るということを常に一緒になって考えていかなければ、なかなかコミュニティがうまくいっていかないとか、一部だけになりがちになるということが、いまの社会環境だというように思っています。ですから、やはり経営できる人材と仕組みということが、これからの地域力の創造に向けての大きな課題ではないかという感じを持っています。

**岡崎：**ありがとうございました。横石さん、経営できる人材というのは、どういう仕組みあるいはどういうところに力点を置けば、そういう人材が育成できたり、生まれてくるということになるのでしょうか。

**横石：**私はやはり日本の中にはたくさん優秀な方がいると思います。特に東京に、この中にもたぶんたくさんいると思います。いま日本の中には40代ぐらいで地域で何かをやりたいという方はたくさんいると思います。大企業とか、国家公務員の方もそうですけれども、すごくたくさんいると思います。

ちょっと言葉を勘違いせずに聞いてほしいのですけれども、大企業とか国家公務員の方というのは、必ずしもそういう人が上に上がっていけるかという、そうはならないですよ。どちらかと言うと、土曜日、日曜日に地域に行ったりとか、いろいろなことを現場との親しみを持っている人というのは意外に上に上がっていけないとか、そういう社会です

よね。

ですから、私は総理にもちょっと申し上げたのですけれども、やはりそういう人たちが地域の中で活躍できる、運営できやすい環境を作ってあげたらどうかと。それを例えば国が担保として見てあげたらどうかと。いままで地域づくりをやっている人というのは、皆様、ものすごく家庭に犠牲を払っているのです。

例えば、家庭のこともある、子どものこともある、ローンも組んでいるという中で、収入300万円地域へ行ってやれというのは、私は無理だと思います。そんなことはやるべきではないと思います。ちゃんと企業が保障してあげて、国が保障してあげて、そこへ舞台を作ってあげるようなことがあってもいいのではないかなと。そういうお金であれば「生き金」になる。しかし、5年ぐらいはかかりますから、5年ぐらいはそういう形を作って、それが例えば企業のイメージをアップできるようにしてあげればいいわけです。CSRではないですけれども、企業イメージが上がっていくような形を作ってあげれば、それは私はずっと行く可能性があると思います。

ですから、本人の気構えというのはすごく大事だけれども、やはり環境も整えた仕組みというものを私は並行していくべきではないかというように思っています。そうしなければ、やはり決断ができないとか、家庭を捨ててまでそれをやるということは、本当になかなか現実的には難しいというように私は思っています。

ですから、「やりたい」という人に対してそういう舞台を作って、仕組みの中で、組織の中で、そういうものを作っていくときが来ているのではないかなと。20代や学生などはそういうリスクがないからですけれども、経営できる人材となってくると40代かなというようにことをちょっと考えています。

**岡崎：**ありがとうございました。一つのジョブローテーションとか、キャリアアップの中でそういうことを保証してあげる。あるいは一つの枠組みで、そういう制度を作っていくことは確かに必要ですね。そういう仕組みはなかなか持続しないので、例えばアメリカの私の付き合っている人たちを見ると、いろいろな仕事をうまく点々としながら、NPOのディレクター、次は州の役人、また大学の研究所に移るとか、社会的な流動性が非常に高い。

そういう中でNPOも育つし、地域の経営的なセンスも生まれてくるという感触も持ちます。労働市場の流動性をどうやって高めていくかは、やはり日本が抱えている大きな問題かもしれません。それでは、富永さんお願いいたします。

**富永：**横石さんのお話にとっても共感するのですけれども、やはり地域をプロデュースできるというか、経営できる人材は日本にはたくさん必要です。そういう人が必要だというようにいま、言い始めているのですけれども、必要だというように言っても誰も財政支援をしないのです。誰も金を払ってくれないのです。やはりそういうところに社会システムとして、ちゃんと食べていける仕組みが必要だと思います。

例えばいきなりそういう人に報いるということが難しければ、行政職員がNPOで働く。大企業の職員が一時的にジョブローテーションの中でNPOで働く。NPOに就職した若者が、1年、2年、行政職として働いてみる、大企業に行って働いてみるというような、どこが親元であるかは別にして、出て行って就労する場所をローテーションして交換してみるとか、そういうようなことをやれば人材は育ってくると思うのです。

## ■ 東京フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

そんな中で時間もありませんので、いきなり私の結論部分に行きたいのですが、地域はやはりいまのこの時代の閉塞感の中で、何かを打ち破ろうとしている人たちが出てきているのです。遊休の財産があるという話をしたのですが、私はずっと地域密着型人材育成センターをやりたいと思っています。端的に言うと少々、生意気ですが、この4人のような人を育てないと明日がありません。10年、20年して我々が年を取って死んでしまったら、次の世代が育っていなかったら大変なことになるということなのです。

いまはまだ賞味期限切れになっていませんので、食べておいしい時代にこそ、実践的なOJTをどこかでやらなければいけないという話をずっとこの何年間かしていました。そうしたら、わが八王子の企業でエイビットという企業があるのですが、その会社の社長は、17歳で創業して35年間社長を張ってきました。小さい会社なのですが、すごくもうかっているそうです。この社長が嘆いているのです。昨年5月1日に久しぶりにお会いしたら嘆いている。何を嘆いているかというと、本社が1フロア100坪なのだけれども4フロアも余っている。使い道がない。こう言っているのです。遊休不動産と遊休の金もあるのです。

一方、私はおかげさまで霞ヶ関までお友だちができてきて、人を知っているわけです。情報と知恵は糾合できる自信があるわけです。ところが、これも人と知恵だけでは武士は食わねど何とかの世界で、少しも活性化しないのです。

2人がともどもに物と金、人と情報で遊休しているものを全部、提供して融合させたらどうなるかということで、6月1日、なんと人材育成センターが完全に民間で出来上がるのです。100坪のフロアを二つのフロアの改装工事を全部エイビットの社長がやってくれて、これが完成するのです。そこで彼が言っているのは、政府の金をもらおうと面倒くさいからいらなと言っているわけです。自分たちでやると。

ところがやはりお墨付きはほしいのです。政府が応援してくれているこの葵のご紋のようなところで、胡散臭くないというところを応援してほしいのだというように言いますので、私が霞ヶ関に話をつけて21年度、国土交通省お墨付き、内閣府のお墨付きと二つのお墨付きを取ってきました。社長は喜びました。

もう一つはITです。孫正義さんがUstreamというものを提携されたのを新聞紙上で読まれましたでしょうか。アメリカの新しい動画サイトですが、YouTubeが、イギリス人で歌を歌った人が一気に世界的にデビューしてしまいましたね、ああいうことが起きるといって、それの上に行くような仕組みでUstreamというものと提携された。それと連携して、このエイビットスクエアで、もし私が講座をやっているとしたら、それを皆様にはお茶の間観戦できるように、Ustream経由で無料で配信するというのをやろうではないかと。そして、その講座をNHKオンデマンドのようにサーバーの中に、コンピューターの中に溜め込んでおいて、背番号をつけてちょっと会員制にして年間1万円かなんかの支援金、応援金などをいただければ、その人はパスワードを開ければ自由自在に過去に行われた講座などを自分の見たいときに見て勉強できるようにしていきたい。

例えば今日、これだけの人が集まって我々が話をしているのを日本語の通じる場所は日本全国に、日本人学校のような海外のところまで全部ライブ中継されるようなことがあったとしたら、ここにかけられたお金と、事務方が大変苦労してここまで持ってきてくださったわけですが、そういった黒子の方々の思いももっともっと価値化して、それを可視化

していけば、もっと世の中に社会貢献できるのではないかと思います。

そのことが必要なときにできればあつと言う間に新しい価値の共有化、情報の共有化の流れに則って、人が学び直すことを瞬時にできる社会が来るのではないかと思います。

ですから、ここから私の10年をかけて、6月で58歳になりますので賞味期限は後10年。そこから先は消費期限に向けて進みますので危ういのですが、それをかけて社会変革と新しい豊かな精神の黄金の国ジバングというようにJICAの若者たちにも語ったのですが、そういう少々、経済力がシュリンクしても日本国は文化と精神において世界一豊かな国だと思っただけのような国家像を描くほうが、いまの21世紀を生きる主役である若者たちの心に報いることができるのではないかと思います。

13億人の国に対抗するというより、対抗軸よりも仲良く、中国、韓国は文化の恩人でありますので、そういったことに感謝しながら豊かに世界に尊敬される日本人を、一人ひとりが尊敬されるように生きてみたらどうかということが私の思いであります。

**岡崎：**富永さん、ありがとうございます。猿舘さん、大湯さんご意見いかがでしょうか。

**猿舘：**地方にいま私がいて、地方と都市の結び付きというのはどうなのかと、話を聞きながらずっと考えていました。ただ産直の野菜が行ったり来たりというのが、地方と都市の結び付きだとは思わない。では、これから地方も生きていくのだけれども、都市もどうやって生きていくのか。都市に住んでいる人たちもどのように自分の中で生きがいをもって、やりがいという自分がここにいるという、生きているというものがあるのかなと思ったときに、またお金の話になるのですが、都市で余っているお金が温かいお金として地方に戻ってきたら非常にありがたいのかなと。そのお金で、地方が元気になることで、都会の方たちも地方との結びつきを共有してもらえれば、こんなにありがたいことはないなど都合のいい話をちょっとさせていただきます。

やはりこれからは都市とか地方とか別々ということよりも、自分がどのように生きていくのか、自分がどのようにここで最期までいくのかといったときに、何が生きがいなのかといったときに、いろいろなつながりというものが大切になってくると思うのです。

例えば自分は農村には遠くて出向いてはいけないのだけれども、何か農村のためにしたい、地域のためにしたいといったときに、何ができるのか。そして、私たち地方の人間が都会の皆さんに何ができるのかと。まず今できることとしたら、私たちは地方で元気に頑張るしかないのかなというように思うので、ぜひ野菜のやり取りではない部分で都市と地方の付き合いができたらいいなというように感じています。

**富永：**都市と地方との融合という話が出てきましたので、ちょっと話し忘れたことを思い出しました。日本ぐらいの小さな国土の上で、どこが田舎で、どこが都市で、どこが限界集落で、どこが限界都市かという話をしてもしかたないというように僕は思うのです。今日、話をしても、皆様もお分かりのようにほとんどコンセプトの原点は同じなのです。いま、私ができること。コーポラティブ住宅という無謀な挑戦を二つやってすごく苦労しましたので、何が発生するかということは、経験してわかるのです。

ですから、インターネットがあることで、離れた人のところに相談するというのがいいです。地域で相談すると、あつと言う間にそれがうわさ話として広がってしまっ、取り返し

## ■ 東京フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

がつかないことがあるかもしれませんので、私でよければいつでも相談相手になります。

ですから、距離だとか、時間だとか、田舎だとか、都市部だとかというような人間社会を分けてしまうような垣根の考え方よりも、日本人は皆が幸せになろうというようなところで情報交換できるような仕掛けをする。Ustreamは無償で誰でも使えるのです。花巻のコーポラティブ住宅にも入れていただいて。

ですから、それをつないでいつでも顔を見ながら都市の多摩ニュータウンにいる私と花巻にいる方がディスカッションするというのか、庶民がいつでも会話できるようなところで、そのギャップなり距離というものを全部超えてみたいというように思います。

**岡崎**：有難うございました。そういう可能性は高くなってきたと私も同感ですが、やはり農山村の日常から見ると、どうでしょうか、自分たちは置き去りにされたのかとか、日々の生活の中でやはりそう感じざるを得ないということは、農山村の方にはどうしてもあるというように思うのです。

いま宮崎県は口蹄疫で大変ですが、宮崎のいちばん西、熊本の人吉・球磨地方に接したところに西米良村があります。人口が1800人位ですが、すばらしいまちづくりをやっていきます。西米良型ワーキングホリデーということで、若い人たちも随分来ています。

私も先般行ってきましたが、役場のある中心部でも朝起きて散歩をしていると、やはり人通りが非常に少ない。こういうところにずっといると、隔絶された自分たちの農山村の姿のようなものを、どうしても意識せざるを得ない。そういうところと富永さんの都会とどうやったらつながるのか。Ustreamもその一つだと思いますけれども。

私はもう少し工夫とか、何かもう少し実態としてのやり取りをする仕組みを作らないと、日本の農山村はかなり厳しさがあるのかなという感じは持っています。会場においでの皆様は東京の方が多いと思いますので、そういう感覚を払拭する都市からの手を考えていただきたい。大湯さん、いかがでしょうか。そういう点でお感じのことがありましたら。

**大湯**：簡単なことを言えば、自分の住みたいところに住めばいいということなのです。定年を迎える方は、生活コストが高いところに住むよりは、多少は不便でもいまのマンションを売り払って、退職金を持って年金を持って、生活コストの低いところで生活したほうが楽しいと思えば、そちらに住めばいいというわけです。

ただ我々の地域も、こういう生活ができますということをちゃんとプレゼンしたり、ちゃんとまわりの人達にお見せしないと、どこで生活すればいいのかと選択しようがない。ふるさとというのは自分で選べるのです。生まれ育ったところだけがふるさとではない。自分がふるさとと思ったところが、ふるさとと思えばいいということです。

私どもの活動は、自分がずっと最後までやれるはずがない、組織もずっとやれるはずがない。広葉樹だと思っているのです。針葉樹と広葉樹があるとすれば、横石さんが葉っぱは専門ですけども、いわゆる広葉樹になって短命でいいという。組織、団体も短命でいい。そして、夏の太陽に葉っぱを広げて、そして毒になるような二酸化炭素を吸って、社会に役立つ酸素を吐き出す。そして、秋になったら真っ赤に色を付けて、枯れて下に落ちて腐葉土になっていく。

我々は腐葉土になりたいと思っています。腐葉土が深ければ深いほど、その地域は豊かだ。そこに若い新しい芽が飛んできたら、またすくすくと伸びるだろうというようなことを

思っています。ですから、地域づくりのために皆様がどう腐葉土の1枚の葉になれるか、我々もそういうように短命でいい。そういうような形でこれから進めていきたいと思っています。

**岡崎：**それでは、パネルディスカッションの4名の方のご発言はここまでということにさせていただきますと思います。今日はいろいろな話が出ました。富永さんのほうから、お祭りをやって発見できるのはやはり人間だ、多摩ニュータウンにはそういういろいろなタレント性を持った人間が沢山いて、その人間を連携していくことで新しい人間力が生まれてくるというお話。

それから、ソーシャルビジネスとか、コミュニティビジネスを通して、地域できちんと稼いでいく。稼ぐというのは、あくどく稼ぐのではなく、それぞれの働いた分相応のものが生きていく足しになっていくというような意味で、ソーシャルビジネス、コミュニティビジネス、稼ぐという話も出ました。

また、連携、つなぐという話。人と人をつなぐ、あるいは組織と組織をつなぐ。都市と農村をつなぐというようなことです。日本には約10万近い集落があるかと思っています。冒頭にお話ししましたように、現在の農山村はその約半分の6万2,000の集落が、この過疎地域に指定された自治体の中にあります。そのうちから毎年、100とか150の集落が、限界集落化しているという状況にもあるわけです。

そういうことを抱えた集落がお互いに連携していく。都市と距離は離れていてもつないでいくということも非常に重要で、日本の新しい課題になってくるのではないかと思います。

そして、4人に共通して出ていましたのが、ICT (Information and Communication Technology) です。こういうものを地域づくりにフルに活用されている。これは新しい日本の地域力創造では重要なポイントになってきているのではなからうかと思っています。

まちづくりというのは、パソコンを駆使して外の情報を取るというよりも自分たちで地道に内発的に頑張るのだということですが、外とつなぐにもこういうICTを最大限に活用していく、これはやはり重要な新しいツールになってくる。上勝町では88歳のおばあさんもこういうものをフル活用しているわけですが、一般的には若い人たちがそういう地域の現場にICTを使いながら接近していく道筋もあるのではなからうかということです。

今日、お集まりいただいた4人は、やはり新しいリーダーシップの体現者です。横石さんが役職部隊と実働部隊とおっしゃいましたが、従来の既存の役職部隊のリーダーシップではなく、現場を熟知していて人との繋がりを重要視する、そして現場に蓄積した人間力を発掘していくというリーダーです。2年に1回、3年に1回、順番でなるリーダーシップではなく、地域の課題を自ら解決していこうとする新しいリーダーシップ。こういう人々が、日本のこの地域社会の中にも徐々にではありますが生まれてきています。

今日はそういうモデルを見させていただいたという成果もあったのではないかと。果たして「地域力の創造に向けて」という本来のテーマに十分沿えるような議論を私が引っ張り出せたかどうかは心許ないところですが、それぞれにご発言いただいた内容は奥深いものがあるかと思っていますので、ぜひお持ち帰りいただきまして、今後の皆様の活動に役立てていただければ非常に有難いと思います。

**司会：**岡崎先生、そしてパネルディスカッションにご参加いただきました皆様、大変ありが

■ 東京フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

ありがとうございました。

---

◇ 福岡フォーラム ◇

## パネルディスカッション

---

### 「地域力の創造に向けて」

〈コーディネイター〉

岡崎 昌之 氏

法政大学 現代福祉学部 教授

〈パネリスト〉

豊重 哲郎 氏

鹿屋市申良町柳谷(やねだん) 公民館 館長

野上 泰生 氏

NPO法人ハットウ・オンパク 運営室長

本田 節 氏

農家レストラン「ひまわり亭」代表

横石 知二 氏

株式会社いろどり 代表取締役社長

## 福岡フォーラム／パネルディスカッション

それでは、これより第二部のパネルディスカッション「地域力の創造に向けて」に入らせていただきます。はじめにパネルディスカッションにご参加いただく皆さんをご紹介させていただきます。

まず、鹿児島県鹿屋市を拠点にご活躍されている、柳谷（やねだん）公民館館長、豊重哲郎様。次に、大分県別府市を拠点にご活躍されている、NPO法人ハットウ・オンパク運営室長、野上泰生様。続いて、熊本県人吉市を拠点にご活躍されている、農家レストラン「ひまわり亭」代表、本田節様。そして、徳島県上勝町を拠点にご活躍されている、株式会社いろどり代表取締役社長、横石知二様。

パネルディスカッションのコーディネイトをお願いするのは、法政大学現代福祉学部教授、岡崎昌之様です。

それでは、これからの進行は岡崎教授にバトンタッチさせていただきます。

**岡崎：**皆さん、こんにちは。今日は福岡での開催ですので、主に九州でご活躍の場をお持ちの3名と、隣の四国から、上勝町の株式会社いろどりの横石さんにおいていただきました。テーマは「地域力の創造に向けて」です。

昭和50年代の前半、日本の地域には輝かしい一時がありました。個別の地域で国をリードするような新しいまちづくりの試みで、例えば北海道池田町のワインづくりを中心に頑張った池田町、あるいは大分県由布院は、別府をしのぐような新しい温泉観光地のイメージを形成しました。しかし、それ以降、なかなか日本の地域が輝きをもって国全体をリードするということは、残念ながらかなり少なくなってきたのではないかと思います。

そういう中で、今日おいでいただいた4人の現場は、以前のまちづくりを凌駕するようなめざましい動きを新たに始めておられます。それぞれが、日本の地域づくりの新しい波を担っておられると考えています。

その新しい波とは何か。ここで私が最初にその謎解きはせず、皆さん方にそれを考えていただこうと思います。

実は、昨日久しぶりに、自分自身でも高揚していました。東北の秋田県のほぼ中央部に阿仁という町があります。いまは合併して、北秋田市ですが、阿仁はかつて日本の銅の生産量は全国の半分という山中の町ですが、現在では、その影もない衰退した町になっています。

私が訪ねたのは、阿仁の中心地から車で20～30分、さらに山の中に入った根子という集落でした。人口は186名、66戸です。しかし4年前、そこにあるきっかけで入ったところ、非常に美しい景観の町でした。トンネルを抜けると、眼下に66戸が肩を寄せ合うように小さな盆地の中で暮らしているのです。ここは東北全体を足にかけたマタギ集団の発祥の地といわれています。まだかろうじてマタギが生き残っているのですが、それと同時に、国指定の重要無形文化財の根子番楽という歌舞伎と神楽を一緒にしたような踊りも受け継がれています。

こういう誇りの高いすばらしい価値を持った集落がどんどん衰退をしているのですが、何とかならないかということで、4年前に入りました。いろいろ住民の方と相談してきたので

すが、昨日やっと「根子・菜の花番楽まつり」が地元の人主催で開かれまして、なんと、168名の集落の中に、昨日は350名、東京、秋田、仙台からも人が集まってくれました。ある意味では集落再生の切っ掛けの兆しが見えたのです。

こういう点で見ると日本にはパワーを持った潜在力のある集落が点々と国内に点在しています。そういうところにいかに新鮮な空気を与え、毛細血管が再活性するようなまちづくりをするかということが、重要なことだと思っています。

最初に、四国からおいでいただいた上勝町いろどりの横石さんから、どういう取り組みをしているかを中心にお話を伺っていききたいと思います。

**横石：**皆さん、こんにちは。株式会社いろどりの横石です。四国からは私だけがこういうお話をさせていただける機会を得たのですけれども、上勝町といえば、テレビや新聞などでよく、葉っぱの町、おばあちゃんが葉っぱでビジネスをするということで、皆さんもご存じの方が多くと思います。でも、昔は本当に、誰もこの町には住みたくないというところでした。

私が上勝町へ行ってちょうど31年になります。私はもともとは上勝町の生まれではなくて徳島市で生まれました。父親は県庁の職員で、農業改良普及員という県庁の職員になって農業の指導を行うことが私の道だったのですけれども、たまたまその年に採用がなくて父親から2～3年、山へ行って勉強してこいという話もありました。人口が2000人、86%は山、四国の中で町と付けば最も人口が少ない所で、まったく見ず知らずの、行ったことがない所だったので、行ってみて本当にびっくりしました。

何にびっくりしたかということ、酒飲みが多いこと。朝から暇だから集まったら酒を飲んで、「おい、補助金ないか、私らに何してくれるか言うてみい」と。営農指導員で行って、呼び出されたところ営農指導の話ではなく、「1杯、飲まんか」というのが町の現状でした。女の人は軒先で嫁の悪口、近所の悪口を連発していました。先ほどの話ではありませんが、いちばん驚いたのは、お母さんが私の目の前で「あんた、勉強せなんだら、この上勝町に残るようになるでよ。お父さんのようになったらあかんのでよ」。これを聞いたときには本当に驚きました。自分のところにいることがいちばん悪いと言っているのです。これが田舎の現実かと思いました。

でも、そこまで言うのはなぜかと思ったときに、仕事がないこと、暇であること、生活していくのが厳しいことが根本の原因だとすぐわかりました。だから、仕事をつくらなければいけない、居場所と役割を持たなければいけないということが、自分の中にすごくありました。まちづくり、地域づくりは、私は結果的にそうなることだと思っています。やろうと思っただけでできることではないと思うのですけれども結果的にそうなることであって、仕事をつくらう、居場所をつくらう、役割を持とう、という形を一つひとつつくっていかなければいけないと思って事業を始めていきました。

でも、上勝町の人たちは変化することをすごく嫌いました。変えるということがものすごく嫌いなのです。生活の習慣を変えなければいけないと思う、習慣がいけないから生活習慣を変えよう、ということで提案をしました。「いままでのやり方では駄目です。地域にあるものを見つけて、そこで仕事をつかっていきましょう。よそばかり見て、ほかのものばかりにみんな目が向いているじゃないですか。足下にいいものがあるじゃないですか」という話をしたら、ものすごく怒られました。「おまえ誰に向かってものを言うんだ。小若衆が言う

## ■ 福岡フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

ことか。おまえ、何もできへん小若衆やないか。明日から来んでええわ。」と言われてしまいました。

そのとき、ちょうど父親に県庁へ帰ってくるように言われたのですけれども、あまりにもばかにされたので、こんなことでは絶対いやだと思い、父親には「一生後悔するぞ」と言われましたが、「絶対に残って、やるぞ」と行商人から始めたのがスタートでした。

だいたい田舎というのは、出てくるのは役職組なのです。役職組と現場組があって、役を持った人に食いかかっていくとすごく怒られて、謝りに何度も行きました。そうして気がついたことは、そういう人は奥さんに弱いな、嫁さんにすごく弱いなということです。直球を放っても駄目だな、奥さんを口説いて何か仕事をつくっていったら、もしかするといつなかりになるのではないかと考えてのが、葉っぱの仕事でした。だから、奥さんも出来て、女の人が元気になる、特に女の人のおしゃべりがすごいで、この人たちがいいしゃべりをしてくれたら変わるのではないかと、とも思いました。

そういうこともあり、大阪の店で若い子が葉っぱではしゃいでいるのを見たときにこれは面白いと思い、葉っぱのビジネスをやろうと考えました。これはいいぞと思いました。急いで帰って、みんなに葉っぱを売ろうという話をしました。

集まってきてくれたのはよかったのですが、「横石さん、あんた葉っぱをお金に変えるんは、昔から阿波の狸か狐の御伽話だ。もっとあんたは仕事をまじめにしてくれなんだら。もう寝ぼけたことをいう子やな」と言って怒られ、男の人は「こんなもん売れたら、飲み屋街を逆立ちして歩いたるわ」という話になってしまいました。

そこですごく私が印象的だったのは、「横石さんの話は聞かん」「どうしてですか」「私はごみまで拾って生活しとうないわ。こんな臭い落ちてきよう葉っぱまで売って、私は生活しとうない」と言われ、このときに、「そうか、地域にある資源って一つだけ共通点があるな、そこに住んでいる誇りや自信がなかったら資源は見えないものなのだな」と、この言葉で気がつきました。だから、これができたら自信を取り戻すことになるな、葉っぱを売るぞ、と思って言ったけれども誰も言うことを聞いてくれませんでした。なんとか4人を口説いて事業を始めましたが、ぜんぜんうまくいかなくて、売れなかったです。

やはり現場を知らないといけないということで、給料をはたいてお客さんとして料亭通いをしました。いろいろなことがありましたけれども、自分がお客で行って現場を知り、そしてそれを伝えていくということで、事業がだんだんうまく走り始めました。これで、みんなが非常に自信を取り戻してきた結果です。



そのような中で上勝町がすごくうまくいったのは、仕組みなのです。よそにできない仕組みを次々と考え出しました。まず、防災無線を使った電波FAXシステムといって、防災無線の電波を使って1秒間で送信をかけるという仕組みを日本で初めて開発して、注文が来たらパッと瞬時にそれを流す。

それとコンピュータを使います。これはセブンイレブンの鈴木会長にお会いしたときにあの仕組みを見て、「これだ」と思いました。コンピュータを使わないといけない、あの仕組みこそ地域の中で必要だ、と実感しました。これは絶対いいな、この仕組みを入れていこうと思って、急いで帰ってみんなにコンピュータを入れるという話をし、議員さんに相談しました。私がそう言ったら、上勝町の議員さんは「わしらができんもんが親にできるか」。ごもっともなご意見です。「おまえ、あほやなあ。コンピュータなんか年寄りがどうして使えるんだ。おまえ、何を考えて言いよるんだ」。おじいちゃん、おばあちゃんに言ったら「横石さん、怖い。だまされるよ。爆発するよ」と言う人がいました。ぜんぜん話にならずという状態です。

国も駄目、県も駄目、町も駄目、町民も駄目、誰も賛成がない。でも小さいときから絶対にあきらめないというか、何が何でも自分がやると決めたことは最後までやり通すという気持ちで非常に強かったので、「やるぞ」と思って、1億円ぐらいかけて誰も考えないコンピュータシステムをつくり上げました。いまでは80代のおばあちゃんがみんな、コンピュータを使います。高齢化比率50%の町で、なんとコンピュータ保有率が70%以上あるという、まさに頭脳集団的な、非常にレベルの高い町にまで仕上げていくことができました。

でも最初はまったくコンピュータを使ったことがなかったので用語がわからない。特殊なトラックボールというものを開発しました。マウスを使わないのです。マウスを持たせて「上だ、上だ」と言ったら持ち上げる。あれは持ち上げても動かないのですけれども。

いちばん驚いたのは、用語がわからないので、最初「皆さん、これから始めるから立ち上げてくれますか」と言ったら、全員起立したのです。「立ち上げる」という言葉を聞いたことがなかったので、起立して礼をしたのには本当に驚きました。知らないということは本当にすごいことだなと思えました。いまはコンピュータをみんなが使っています。

これはすごく巧みな仕組みになっていて、毎日の成績表が出ます。ランキングも出ます。世の中の状況も出ます。いま私もここで打っていましたけれども、いま見たことはすべていま広がります。だからこの会場のこととか、いま見たことが、ブログ式になっていますからすべてが、土俵が一つになっている。地域づくりは縦にいく、上に上がっていくと足を引っぱられるのです。舞台がこの会場のように、平面的になっているとすごくうまくいきます。でも、縦にずっと上がっていくと、リーダーが浮いてきます。だから地域づくりは浮いていくと、「あの人は何をやっているの？」ということになるのです。

でも、絆やコミュニケーションはすごく大事です。私は、田舎は9割がコミュニケーションだと思っています。事業は1割だと思っています。だから常に一体に、平面的に、舞台を距離感を感じずに持っていくことができれば、非常にうまくいくと思っています。これが、いまコンピュータを使ったシステムで、ほとんどが加入しているという形になっています。

最近、とにかく若い子がたくさん来るようになってきたのです。Iターンが非常に多くなりました。うちの社員は全員Iターンですけれども、それこそ全国各地からIターンで

## ■ 福岡フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

次々と人がくるようになりました。

上勝町は2000人の町ですけれども、去年の「田舎で働き隊！」で、50名の働き隊を募集したら、なんと、応募総数は1500名を超えました。「へーっ、こんなに来るのか」と思いました。とにかく優秀な人材です。大企業がのどから手が出るほど欲しいというような人材が田舎へ来て、自分が何かの役に立ちたい、自分が地域の中で役割を持ちたい、一緒に地域の人と活動したいという形に変わってきました。

私は、これがこれからの地域でものすごく大事なことだと思っています。この変革ができてきたことが上勝町の新しい動きになってきました。そのような流れが、いまの上勝町の取り組みです。

ぜひ皆さんも一度上勝町に来てください。すごい山の中で、ここに人が住んでいるのかと思うような所ですけれども、非常に面白い町になってきたということで、紹介に代えたいと思います。

**岡崎：**横石さん、ありがとうございます。

いま全労済協会で「地域社会研究会」が開かれており、横石さんもそのメンバーですが、実はその研究会で4月末、上勝町へ一度行ってみようということで、全員で押しかけました。横石さんが、いどりに参加しておられるお婆さんたちとフランクに手をつなぎ、肩を抱えながらこやかにお話をされていたのが、非常に印象的でした。まちづくりは、縦につなぐと足を引っぱられる、横で一体化することを現場で常に考えておられるのだということ、いまのお話を伺って確認させていただきました。

それでは次に本田さんをお願いいたします。

**本田：**皆さん、こんにちは。熊本県の人吉から参りました本田と申します。私は12年前に農村レストラン「ひまわり亭」をオープンしたのですが、そこに入る経緯をまずお話しさせていただきますと思っています。

私の生まれは、球磨郡相良村という人吉と五木村のちょうど中間です。川辺川ダム問題で四十数年揺れ動いている、まさに中山間地域の専業農家の長女として生まれました。小さいときから両親が農業をいそしみながら、私たち兄妹3人を育ててくれました。もともと私は大学に行って自分の夢をかなえたいという思いがありましたが、大学受験を失敗しました。農山村においては、まだまだ女性という立場の中で、浪人までして大学に行かなくていいと父が非常に反対して、地元に残って就職したのが農協でした。18歳のまだまだ未熟な私が、農協の職員という経験の中から、両親が専業農家として生きることの喜びや厳しさ、両親の思いを知るきっかけとなりました。

いまから30数年前の話ですので、まだ合併前の単協で、共済の推進、貯金の推進など、とにかく地域に出向いて足を運ぶ、人を説得する、そしてそれぞれに課せられたノルマを達成するという、私のいまの基本的な考え方や行動に結びつくような、とても大事な時期を農協職員時代に経験させていただいたのではないかと思います。

それから隣の人吉市に。結婚して31年なのですが、3人の子どもたちがそれぞれ独立をし、いまは母がちょうど3カ月前に大腿骨骨折をし、ちょっと不自由な身になりましたので、母の介護食をつくり、一緒にいるときには母をお風呂に入れるという、本当に身近に、子育ての問題から介護の問題へと移っていき、社会が抱えている問題そのものを自分の暮ら

しの中で体験しています。

活動をするきっかけとなったのは、そもそもが生涯学習からです。地域の社会教育が非常に重要だということで、地域のお母さんたちと何か交流をしたいとか仲間になりたいということで地域のコミュニティセンターの講座に参加したのが、もともとの始まりでした。そういう生涯学習の中に加わっていくと、地域に集まってくるJA女性部や元婦人会など、非常に経験、知恵、技がある地域の女性たちが60代、70代、若い方はもちろん40代、50代の方もいますが、すごくパワフルで力を持っていらっしゃるということにまず気づきました。

そこでいつまでも行政の力におんぶにだっこではいけない、ということで「ひまわりグループ」という独自の活動をする母体をつくりました。そこから何か地域に恩返しをしようということで始めたのがボランティアグループ「ひまわりグループ」で、独居老人、二人暮らし老夫婦に安否確認を兼ねたお弁当の宅配をする活動でした。

そういう活動をしていくうちに、60歳になったあるスタッフは「人生二毛作って言うよね。これから年が戻る還暦というのをセカンドステージと考えるならば、隣の村から結婚をし、明けても暮れても仕事、仕事に追われていた自分の生き方、これからはもっともっと自分の生きがいを見出したい」という話になり、みんなで1年ぐらいいろいろな先進地に勉強に行きました。

そこで、みんなが私たちのこれまでの活動からすると、食を生業とした企業を起こしたいということになりました。私たちの人吉球磨というエリアは、非常に農林業が豊かに栄えてきた基幹産業を持っています。その中で加工という技術の経験、知恵、技を生かすコミュニティビジネスにつなげていく、これは特別なことではなく、地域にいる女性たちがすぐにもやれる新しい起業ではないかという考えになりました。

そこで女性たちが何かをやろうとするときに、従来ならば「行政にお金を出してもらおう」「いろいろな補助金がないかしら」という考え方になるのですが、まずは自分たちの身の丈に合った自分たちのやれるところから始めようということになり、みんなで出資をし、法人化をし、そして、すべてのリスクを自分たちで負ってやるというところからスタートしました。

いまから12年前にひまわり亭というコミュニティビジネスをスタートした折には、まだまだ地域の中には理解というか十分なる認識がなく、「あんなお婆さんたちが『待ってました、定年60歳新入社員』『生涯現役』といううたい文句でレストランをやろうとしているけれども、あれはたぶん1年もたないね」と言われたのがその当時の話でした。女性はもともとよそ者が多く、やはり結婚という形で地域に生きているので、粘り強いし、あきらめないでコツコツとやり抜くというとてもいい特性を持っているので、まず「石の上にも三年」、3年やってみようということでやり続けて、今年で12年になりました。

横石さんがおっしゃるように、私たちはその地域の中で、高齢化の問題、学校が少子化で統廃合していく、産業が低迷していくという、世の中で一般に言うデメリットのようなものを、逆に高齢者だからできる企業というものや、農山村という大きな地域資源を持っている産業も文化も歴史も、どこにもない地域の地域資源を生かしていくということを考えるならば、地方という中山間地域は、こういうコミュニティビジネスにはとても条件有利だという考え方になったのです。

## ■ 福岡フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

いまやっている内容は、地産地消という言葉どおりに、「地域にあるもの、もったいないね」と、地域にあるものをもっともっと地域の中で消費していく仕組みをつくっていくということになり、地域にある食材を生かしながら家庭料理をつくり、お弁当を独居老人、老夫婦含めて毎日300食を配食し、全国から来られる研修など受け入れ、また、お食事を中心とした来店ですが、農村レストランをおこなっています。いま、農、商、工、観光も含めた連携ということで新たなツーリズムの展開ができないだろうかと思っています。

やはり、そこに住民が主体を持っていくのだけれども、行政がいいパートナーシップの中に関わっていく。民間主導と言いながらも、行政とよりよい関係になっていったということが、12年も続けられた所以だと私は思っています。

そういう状況の中で、私たちはこれから目指すべき方向の中で、この地域の中になるべく長期滞在して、地域をもっともっとよくして、よく知ってほしいと思っています。それが長期滞在から二地域居住になり、そのうちにIターン、Uターンという形の中で、地域が抱えていく課題を少しでも解決していく一つのビジネス展開になっていくのではないかと期待しています。

農山村の中において、男女共同参画社会という基本法が成立し、農村において女性や高齢者が大きな担い手であるということとをどんなに大きな声を上げてうたってみても、精神的な確立と経済的な確立の両方のバランスを持っていくことがこれから地域再生につながっていくのではないかと、いま思っています。

ですから当初から、地域づくり、地域おこし、地域をマネジメントするような思いでやったわけではなく、そういう一段ずつのプロセスの中から自分たちにできること、そして、持続可能な地域のためには自分たちがやっていて楽しくなければできないということ、そして市町村合併という平成の大きな地域のあり方の中で、住民サービスを含めながら、これから新たな公的な役割を担っていくNPO、民間セクターなど、さまざまな中間的支援組織の中に、今後新たに一つのジャンルを増やしていきたいと思っています。

**岡崎：**本田さん、ありがとうございます。3月初めに私は熊本県小国町の九州ツーリズム大学の卒業式に出て、その足で本田さんのひまわり亭に寄せていただきました。ちょうど日曜日ということもあって、大変な賑わいでした。

しかもこれが女性の感性なのですね。ちょうど雛祭りということで、多分、町内の皆さんから集められたのだと思うのですが、壁一面にお雛さんが飾ってありました。出てきた食材がまたすばらしいですね。食材はだいたい球磨一円でとれたものと限定しておられるのですか。

**本田：**はい。できるだけエネルギーを使わないで地元のものを、ということをやっています。

**岡崎：**そうですか。彩りもきれいで、ほれほれとするような、ひな御膳が出ていました。それでは続いて、別府の野上さんをお願いします。今年の初め、寒いときでしたが、野上さんのところにお寄りして現場を見せてもらいましたが、都市ならではのユニークなパワーを、野上さんがいろいろとコーディネートしながら、新しい別府の再生を目指しておられました。

**野上：**皆さん、どうもこんにちは。別府から参りましたNPO法人ハットウ・オンパクの野上と申します。私は、別府の本当の町中、中心地、どちらかというところと繁華街、飲み屋街の中で、昭和40年に生まれました。昭和40年頃というのは、実は別府が最も栄えていた頃で、

私の実家は旅館なのですが、幼いながら、毎晩のように宴会をしていて、にぎやかなところで育ったという記憶があります。

それから高校、大学、社会人と別府を離れていて、ちょうどバブルが崩壊した平成6年頃に、家業の旅館を継ごうと、別府に戻ってきました。当初、私は、旅館はけっこう楽だろうなと思っていたら、とんでもないことになっていて、これはまずいな、いつつぶれるかわからないなという状況であることがわかりました。父親が、「大もうけをしたから、帰ってこい」というので帰ってきたのですが、戻ってみるとひどい状況で、こんなにのんびりしてられないなと思いました。

それで、福岡県とかいろいろなところに営業に行き、お客さんを集めていく中で、お客さんから何度も何度も言われたことが、「由布院がいまよくて、別府はなんで…」というような話です。別府が何とかよくなってもらわないとうちの旅館も困ると思いつつ、旅館のすぐ近くには竹瓦温泉という非常に立派な温泉があって、そこがもしかしたらうちの旅館にお客さんを集めるのにいいのではないかと思ったのです。

実は恥ずかしいことに、私はその頃30歳ぐらいだったのですけれども、うちから1分で行ける竹瓦温泉に入ったことがなかったのです。うちの母はずっと旅館をやっているのですけれども、地獄めぐりに行ったことがないと言っているぐらいです。そういう状況です。

そういった中で、私はよく旅館で受付をしているときに、お客様に「このあたりは何か面白いものはありませんか」と聞かれたときに、不覚にも「いま、由布院が面白いです」などと言っているような状況でした。これは何とかしなければたいへんだという状態が何年か続きました。

その頃、新聞等で目にする話題は「オランダ村が長崎ではやったから、別府に英国村をつくろう」というようなことばかりなのです。それと、いろいろな人と話をしても、そのうち何かできてくるようになる、行政がどうだ、という話がとて多くて、何なのだろう、これは、と思っていました。それで自分のところの話をするときには、皆さんは自虐的に「別府には何もないよ」とけなすのです。

「そうかな、本当に別府には何もないのかな」と考えているとき、ふとしたきっかけで竹瓦温泉が壊されるといううわさが出てきたのです。そのとき、いまのオンパクの代表の鶴田から「竹瓦温泉を保存する活動のようなものを始めてくれ」と言われて、地域づくりなるものに参加したことが、私の活動のきっかけです。それが平成10年ぐらいのことです。

そのときまず始めたのが、町歩きという形で我々がガイドになって地域を歩くことでした。当初は、町の駄目なところを教えていただくというコンセプトでスタートしたのですが、実はその前に下見で、いま県庁にいる詳しい方がガイドをしてくれて、町を歩くと、とても面白かったのです。

本当に目から鱗が落ちたというか、30年間僕はこの地域で何をしてきたのだろうというぐらい、いろいろな面白いものが出てきて、すごく素敵で面白かったです。それを実際にやると、悪いところを教えてもらうというよりは、参加したお客様皆さんが、こういうところがすばらしかった、あそこは面白いですね、と褒めてくれる。町歩きを繰り返してまちづくりをどんどんしていきながら、自分自身が地域のことをよくわかってきたということがありました。

## ■ 福岡フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

当時始めた頃は、ある意味、私には東京コンプレックスがあって、「東京がすばらしい。別府は駄目だ。田舎は駄目だ。何もない」という状況だったのですけれども、そういったまちづくり、町歩きを通じて地域のことを知るに従って、そのコンプレックスもどこかに消えていき、「いい町に住んでいる」と思うようになりました。つまり自分自身がまったく知らなかったということと、知ることによって誇りが出てきて、要は、「東京がどうだということは基本的に関係ない。別府はいい町だ」と思えるようになってきたのです。

それと同時にまちづくりの活動を通じて得たのが、一緒に活動していく仲間です。その人たちがいろいろなイベントやメディアでちょっと紹介されると、すごく変化していくのです。スイッチが入るという状態というのでしょうか。それで一緒にやっていく仲間たちもどんどん地域のことを学んでいきましたから、みんながすごくアクティブになっていきました。

当時、「別府の人はゆうばっかり」という言葉があったのです。つまり「お湯ばっかり」ということです。言うだけで何もしないという状況だったのが、少なくとも我々の周りの仲間は、いろいろなことを始めていくのです。それでメディアで紹介されて、新聞に載ったりしたらその気になってしまう。私もその中の1人なのですけれども、いろいろなことを始めていながら、すごく楽しい状況が周辺に生まれてきたのです。

それともう一つ、必ず町歩きが終わった後に意見を聞くのですけれども、町歩きをやっていて非常に印象的だったお客様の言葉は、「こんないいことをやっているのに、なんであなたはもっと多くの人に宣伝しないんですか」ということです。非常に多くの人から言われました。「ああそうか。僕らがやっているのはいいことだよな」と。自分でやっていて楽しいわけですから絶対これは自信があるのだけれども、残念ながらほとんどの人は知らないわけです。

一方で、おそらくまちづくりや地域のことをやっていることは、みんなそれぞれ面白いことだらけです。つまり地域は面白いことだらけだけれども、要はそれが単純に知られていないからうまくいっていないという状況なのだろうと思って、そのあたりからオンパクに入っていくわけです。つまり大切なのは、地域をまず知ることからすべては始まるということです。それは地域の人が、です。観光客が知る前に、まず地元の人を知るべきなのです。

人間はどこかで主役になるとスイッチが入って、いきなりまちづくりに没頭しだすということです。そういう人たちが増えていくという状態が、たぶん活性化していく地域だというイメージです。

もう一つは、そういったすばらしいことは実はほとんど知られていません。だから伝える必要があるということです。それを何となくイメージしながら、オンパクという事業に変えていきました。

オンパクに関してはどういった状況か。オンパクは一定の期間のうちに。別府だと24日間なのです。24日間という期間中に、地域の魅力を伝えていく、もしくは本人が持っているスキルを伝えていく。いわゆる自己を表現していく、地域を表現するプログラムというものがある、それにいろいろな人が参加していきます。地域の人が7割、地域以外の人が3割ぐらい参加して、とにかく地域を体験する、現場をたくさんつくるということです。

別府でいうと、いちばん最近のオンパクだと24日間の中に、150種類ぐらいのプログラムが発生しています。これは、ほとんどのプログラムが地元の人が主役で、先生になって表現

するのです。よそから偉い人を呼んでやることは、ほとんどないです。落語ぐらいです。さすがに落語はできないので、落語の師匠を呼んできてやることはあります。

つまりオンパクはどういうことかと言うと、地域の中にいろいろなプロジェクトが一気にワッと来るのです。そのプロジェクトはそれぞれ地元の人が全部主役で、しかも1人だけではなくて、いくつかと組み合わせながら一緒になってやっていくものです。それに参加するのも地元の人で、参加した人は地域の良さをそこで知るとか、知り合いになるということが起きていくわけです。その結果、そうやってチャレンジした人が褒められたり、メディアに出たりということを繰り返して、その人が変化していく。

それをとにかく毎年1回とか2回というペースで地元で起こしていくことで、地域の中で主体的に活動する人がどんどん増えていきながら、またオンパク仲間ということで一緒に時間、別府を盛り上げようという人たちが集まるわけですから、そこで仲間ができてきて、その人たちがオンパクをやっていない間も何か始めていくというような世界ができていくわけです。それがオンパクモデルという地域再生の手法で、そのコーディネイトをやっているのが実は、我々NPOオンパクであるということです。

**岡崎：**九州の方はよくご存じのことだと思いますが、別府は熱海と並んで明治の頃から外国にも開かれていた温泉ですから、その中には蓄積された色々なものが残っている。それをもう一回、埃を取り除きながら、現在にどう活かしていくか。これは非常に面白い試みです。私も野上さんのご案内でいくつか見て回り、また夜は竹瓦温泉も入らせてもらいました。すばらしい仕組みを昔の人は作ったのだと感動いたしました。

鹿屋市の柳谷（やねだん）には、いま毎年5000人が全国からここで勉強してみたい、現場を見てみたいと訪れているそうです。豊重さん、よろしく願いいたします。

**豊重：**会場の皆さん、こんにちは。私は69歳です。今朝6時半に、大隅半島の柳谷（やねだん）をマイカーで出てきました。ここまで5時間かかりました。私は北海道まで日帰りで講演することもあります。すなわち体力が勝負だと思います。地域づくりも、体力がなかったら、とてもではないけれども耐えきれません。

私は昭和35年、18歳で上京しました。東京の銀行に11年間勤めました。

その東京の銀行を辞めて、29歳で柳谷（やねだん）に帰りました。たぶん大隅でいちばん先に、一次産業でいちばん難しい水管理のウナギ養殖を見よう見まねで始めました。設備資金を含めて、5年間で3000万円の借金をつくりました。この経験が、いま考えると最高によかったと私は思います。

それはなぜかと言うと、皆さん、子どもが楽しみにしていた貯金箱を割ったことがありますか。私は7000円ぐらいの電話料を払えなくてわが子の貯金箱を割ったことがあります。その子は、今、ボストンに留学をして、シアトルでアメリカ人と結婚し、子どもが2人います。そうした私の生きざまは、柳谷（やねだん）の地域再生の基本となりました。私が柳谷（やねだん）を任せられたのは、他薦でした。私が柳谷（やねだん）の地域再生を言いだしたのではなくて、他薦だったのです。

その時私が覚悟したことが四つあります。一つは、行政に頼らないで、自分たちでできることは自分たちでやって、10年後に認められたらモデル料として国からでもいただくという、行政に頼らない村づくりの提言です。

## ■ 福岡フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

二つ目は、自主財源を持つということです。アイデアどころか、言わばなしだったら私に変なラベルがはられてしまいます。柳谷（やねだん）では、わたしは「哲ちゃん」と言われていますが、「哲ちゃんと言うだけ。後がない」と言われてしまったら、リーダーを任せられても1年、2年で終わってしまいます。これでは駄目です。やはり自主財源を持つことが大事になります。

三つ目に考えたことは、後継者ヘレールを引いてバトンタッチするためには業績ではない、組織だと。組織と数でもの言える柳谷（やねだん）の組織をスタートしないと、絶対にどんぶり勘定になって、バトンを渡したときに数字も言えない。これでは駄目だと思ったから、そのためには、企業会計原則論、総勘定元帳、それを説明していく補助帳が必要でした。補助帳を専門部に位置づければ、オーナーは総勘定元帳さえ管理して、見ていれば大丈夫。柳谷（やねだん）は、絶対に現金に触れてはいけないという組織をつくらなければいけない。万分の一でも自主財源を疑われたら、駄目だ。すなわち組織の原則は、銀行にいたときの、数字でもの言えるということをやらないといけないという組織論に入りました。

四つ目はリーダーの存在です。集落の人口は330人。柳谷（やねだん）は、一つの集落です。すなわち自治公民館です。私は55歳のときに、そこの館長に90数パーセントの得票率で選挙で選ばれて、15年目を迎えました。

リーダーは絶対に即実践、即行動が不可欠の要素です。併せて感動と感謝の地域づくりをするにはどうしたらいいかといったら、私の結論は、無視されたら終わりだということに行き着きました。私が無視したら、その人を殺すことになってしまいます。柳谷（やねだん）には補欠はいないのです。私は柳谷（やねだん）にはレギュラーしかいない考え方でやってきました。

まず自分から半径100メートルの人のフルネームなどを覚えることから始めます。なかには反目者が1%ぐらい絶対いますから、その人たちの分析もします。1人の反目者には10人、15人がグループ化してしまいます。たった1%といっても300人の1%は3人です。これに10人ぐらい反目者が付いたら、300人のうち30人が最初から「やめた」となってしまいます。最初は「何が奉仕作業か。何がボランティアか。やがて哲郎は市長になるつもり、おれたち踏み台にするんじゃない」と聞こえてはこないけれども、そんなうわさがあったのも事実です。この人たちを無視して蚊帳の外に置いたら、絶対に足をすくわれてしまいます。

だから私の四つ目の基本は、まず2年かかってもいいからあわてるな、急ぐな、目的に近道するな、と言いつつ、土台づくりをしたことです。奉仕作業も集落営農もいずれは自分のことだということで始めの2年間の苦労を、私は一つずつクリアしてきました。いま15年目になりましたが、たぶん柳谷（やねだん）に来られたら、すべての人は喜んで笑っている、物語的な集落に到達したのではないかと思います。

そこで、私は負の項目のアンケートさえとれば、アイデアはいらないと思いました。「柳谷（やねだん）で、いちばん不満なこと、特に館長、豊重に不満なことも含めて教えてください」というのが私の仕事だと思いました。病院でも手術の前は必ずカルテをつくります。これができなかつたら、地域のへこんだ限界集落、準限界の柳谷（やねだん）をどうやって再生するかということは、私のアイデア、体験だけではとてもではないけれどもクリアできないと思いました。

負の項目のアンケートでいちばん多かったのが、孤独死、畜産、悪臭の3つです。柳谷（やねだん）はいま、500頭のウシがいます。7000頭のブタがいます。3万羽のニワトリがいます。「豊重さん、臭い。悪臭する。ハエが蔓延する。これ、何とかならんか」。これを私たちは、そうだ、逆転の発想だ、微生物を勉強してこれを家畜に食べさせて、その排便で自然農業、オーガニックの有機堆肥までつくれたら、集落は一挙に環境整備をしたうえにビジネス感覚を養成するところまでいけるのではないかと思いました。さらに、いちばん多かった孤独死の解決と絡めて、「だったらイモを植えましょう」と。1ヘクタール植えたら、70万、80万、収益が上がります。基本は、人件費を払わないボランティアです。畑も、高齢者から、無償で貸してもらいました。

こういった入り口を3年目から始めて、なんと10年後には自主財源ができました。だいたい年間に300万円です。六つの専門部があって、会計がそこに30万円ずつ自主財源から運営費を充当します。六つのブロックですから180万円です。年間7000円の町内会費を10年目から4000円に減額しました。こうやって、集落では75歳以上になったら、もう町内会費はいりませんということにできました。

毎年、300万円使うのですが、500万円近くの余剰金が出てしまったので、自主財源で10年目に、この10年間で亡くなった18人の方の御霊にお礼の気持ちとして1万円ずつボーナスを配布したら、良い事が二つありました。

一つはメディアです。新聞がバーンと報道しました。感動しましたけれども税務署がすぐ来ました。「もう申告しなさい」。そして2006年度から、みなし法人として毎年納税しています。

皆さん、地域活動の町内会活動は絶対誤解しないでください。ビジネス感覚が先行ではありません。もう一つは結束です。みんなが結（ゆい）、共同なのです。忘れかけていた半径100メートルの人のフルネームと顔を畑で確認ができないかという集落営農が相乗効果をして、300人、高齢者から子どもまで知らない顔の人はたぶんいないと思います。

こうやって柳谷（やねだん）では、10年目にやっと言えた言葉、待ちに待っていた言葉がありました。それは、すべて集落の財源から、ボーナスを払ってみんなが安心して緊急警報装置の孤独死対策ができて、「寺子屋」をやってわからない算数、数学の基礎学力を先生を呼んで、謝金を集落営農の財源から払ってあげるということでした。これは永遠に続くでしょう。

そうやってきたときに、焼酎「やねだん」はオーガニックの原料で、集落の名前がブランドになりました。「やねだん」焼酎で、なんと韓国に1300本単位で去年から輸出するなどとは以前は考えたことはなかった。

すなわち地域づくりは、物語的に、あわてない、急がない、近道しないというビジネス感覚と地域経営的なリーダーがどうしても共存しないといけないのではないかと、柳谷（やねだん）の皆さん方に私は感謝しているところです。

**岡崎：**有難うございました。先般、柳谷（やねだん）に伺いました。全国のこういう集落、市町村を訪ねていますが、そういうときに一つの目安にしているのは、集落を構成する各家庭の庭がきれいに手入れしてあるか、生垣がきちんと整備されているかどうかなのです。豊重さんに車で集落内を見せてもらいましたが、非常にきれいなのです。亜熱帯に近い大隅半島だと植物はどんどん成長しますから、ちょっと手を抜くと、ほとんどやぶのようになって

## ■ 福岡フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

しまうと思うのです。

後ほど、空き家対策をどうされたかというお話も出てくると思いますが、集落あるいは各家庭の庭や生垣がきれいなところは、何か意識をしながら住まい方を考えておられる集落ではなかろうかと思います。

いままでのお話でいろいろなテーマが出てきましたが、一つの問題はこういう地域社会の再生、あるいは新しく地域をつくっていく力は、誰が担うのだということです。リーダー論や後継者の育成は、これからの日本の地域社会、あるいはそれが基盤となった日本全体の再生を考えていくうえでも、重要なポイントではないかと思っています。

この担い手あるいは人材育成、それから、今日は労働組合関係の方、地方自治体の行政のご担当の方も来ていますので、住民や勤労者という立場から見ると、そういう人たちはどういう役割をまちづくりの中で果たすべきなのか、こういう活動をしてもらいたいということも含めて、「人材育成」と「住民や勤労者の役割」という2点について、ご発言をお願いしたいと思っています。

横石さんから、お願いします。

**横石：**地域の活性化のために何が必要かということですが、私自身は、プロデューサーがいまはすごく大事だと思っています。それは、上勝町の場合で言えば、一人ひとりの舞台をつくっていくということです。私は、どちらかといったら田舎の人は組織に甘えるところがあると思ったのです。ですから個を磨くというか、一人ひとりが役割を持って仕事を持つということがすごく大事だと思いました。個を磨く舞台をつくるプロデューサーがすごく大事だということを感じたのです。

非常によかったと思うことは、いろどりを最初に始めたときに、注文を全部一人ひとりに電話をしてお願いしたのです。そうすると、終わるのがだいたい夜の11時、12時です。朝は、早いときは5時からとかになるのです。どうしてそうなるかという、一人ひとりがどういう生活習慣を持っているかということをもものすごく調べたからで、この人は何時に寝る。この人はどういう趣味を持っている。この人はこういうことがいやだ。これがすごくよかったです。それがわかったのです。

ですから私は、いい舞台をつくる、その人が喜んでもらえるような感覚の舞台をつくるのが田舎ではすごく大事だということがわかったのです。お父ちゃんがお母ちゃんに弱いこともそうだったのですけれども、そういう感覚を見つけていく。だから私はどちらかといったら事業家ではなくて、心理学的にあの人がどういふことをすれば喜ぶか、あの人がどういふところが嫌いか、あの人が何を求めているかということを見抜くのが面白いというか、好きなのです。

おばあちゃんにこの間も、「あんた、銀座におったら日本一のホストになっとるわ」と言われたのです。「ばあちゃん、ホスト知っとるんか」と言ったら「知ってるよ」と言われました。面白い言葉で言うと、そうなのです。

ですから、いい舞台をつくるのがすごく大事なことだと思います。うちの社員には、「人が喜んでもらえる仕事ができたら、あなたは幸せになれるよ」ということをいつも言います。「それは、仕事の部分でないところが大きいよ」と。私はうちの社員を採用するときには全部、何かを持っているかを聞きます。例えばいまの社員でも、歌がうまい、ブログができる、

英語ができる、バイオリンが弾ける、デザインができるとか、何でもいいから自分のできることを一つ持っている子は、地域の中で活躍できる舞台があるのです。

歌がうまい子は、敬老会で歌を歌いにいくのです。そうしたら仕事は絶対できます。おばあちゃん、おじいちゃんが喜んでくれるでしょう。敬老会で歌ってくれたら、何を頼んでいっても言うことを聞いてくれます。田舎って不思議ですね。

だから喜んでもらえる仕事をつくって喜んでもらえることをお世話していると、自分に返ってきてそれがうまくいくのです。このうまくいくという環境をつくれるプロデューサー、つくれる人が、地方ではすごく大事な役割だと思うのです。これが先ほど岡崎先生が言ったことに当てはまるというか、その人をどうやって育てていくかというか、どうやってそれをつくっていくかということが大事なことだと思っています。

家庭もそうだし、会社もそうだし、地域もそうなのです。役割があって自分が認められたら、家族の仲がすごくよくなりました。おばあちゃんが嫁の悪口を言っていたらうまくいかないけれども、朝から黙々と自分がこれをやらなければいけないとやっている、役割を持っていると、家の中はものすごくうまくいきます。家族がよくなってくると、地域もよくなってきます。ですから、全体の中ですごくよくなってくるわけです。

「いろどり」ができたことによって全部地域がつながっていきました。それはどういうことかと言うと、例えば医療費が徳島県内で最も少ないのです。介護保険も少ない。生活保護も少ない。これは福祉ですね。つぎに教育です。教育レベルがものすごく上がってくるのです。皆さん、家庭環境がよくなってくると、教育レベルはものすごく上がってきます。勉強もよくするようになってきます。

それから「いろどり」ができたことによって、モミジを植えよう、サクラを植えようという環境がよくなって国土保全が保たれてくる。環境もよくなってくる。また、「ごみゼロ」といって、まったくごみを出さないような町にしよう、34分別にしてごみ収集車も走らない、燃やす施設もなくそうということで、環境にまでこだわっていくような町になってくる。そして交流人口がどんどん増えてきて、特産品も売れていく。産物もよくなっていくという好循環です。

100の地域には100の「いろどり」があるというように、地域というのは一つの舞台の中でつながってくるものなのです。ですから一つのことではなくて、つながってくるのが私は地域だと思います。それにはプロデューサーのマネジメントできる役割が、すごく大事なことだと思っています。

私はいまの地域や日本でもものすごく欠けていると思うのは、経営できる人材だと思います。これはボランティアでは続かないというのが自分の中にはあって、会社も株式会社になっているのです。やはり経営ができるということは大事です。うちの社員もそうなのですけれども、自分の給料は自分で稼ぐことができるということです。

ですから給料のカットは絶対にしません。コストを落とすこともしません。自分の中に自分の楽しさがあるってそれを自分が意識するようになってくると、コストは落ちてくるのです。ですから楽しいことをやって自分が経営感覚を身につけてくると、地域は運営できるし、会社も経営できると私は思っています。うちの会社は12期目ですけれども、12年間、連続黒字です。28年商売をやって1回も落としたことがないというのはそうなのです。

## ■ 福岡フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

そういう経営的な感覚の意識を地域も人も持っていかなければ、楽しいことだけではなかなか続きません。経営できるというバランスが非常によくなくて地域は保たれていきます。お金をくれることではなくて、地域は自分たちが経営していく、個人も家も地域も自分が経営していくという感覚を身につけていくことが、すごく大事なことだと思っています。私は、それができなければ、持続可能な地域にはなっていないと思います。経営できる人材は、これからの時代もすごく大切なことだと考えています。ですから舞台づくりとプロデューサーが、これからの大きなキーポイントになっていくのではないかと考えています。

**岡崎：**ありがとうございました。いま「経営」という言葉を横石さんは何度もお使いになりました。横石さんご自身もおっしゃいましたが、色々なものがいろいろな形でつながっているのが地域です。経営といっても、企業の経営であれば目標は非常に定めやすいわけですが、地域の経営というときに、上勝町全体の経営といった場合には、色々な関連性の中でどういう方向を目指すことが上勝町としての経営になるのでしょうか。

**横石：**ですから、一人ひとりの居場所と出番ができてくることだと考えています。例えばおばあちゃんが1日2万円稼ぐでしょう。そうしたら病院へは行かないのです。そうすると、上で2万、下で使わないですから、ものすごく経営にとっては大きいのです。働ける人、役割を持つ人がどんどん増えてくると、どんどん稼いでいきます。おばあちゃんでも、葉っぱで1千万以上稼ぐ人もいます。ですから一人ひとりが居場所、出番、所得をあげていくことによって、実はコストにかかる部分が落ちてくるのです。これが経営だと思います。

でも、それを先に地域の経営と言ってしまったらおかしいわけであって、私は先に居場所と出番と役割が来て、経営ができるということにつながるという順序だと思います。経営しろ、儲けろ、ということではなくて、役割をしっかりと自分が担っていけることになってくる、与えてくれて守るのではなくて、攻めていって、自分がそこに役割などができてくると、地域の経営はできると考えています。

**岡崎：**先般、88歳のおばあさんの作業現場に、横石さんが連れて行って下さいました。実際に葉っぱを集めて、それをトレーに綺麗に並べておられるのです。その隣には先ほどのコンピュータが置いてあって、88歳のおばあさんがトラックボールで一生懸命、出荷状況などを見ておられるのです。そのときに個人情報のところを開いて見せてくれたのですが、約200人のうち、その日はおばあさんは売り上げ4位でした。その前の月の売り上げが50万円。88歳で、50万円葉っぱで売り上げる。

それで稼ぐということがダイレクトに地域の経営につながるわけではなく、そういう稼げる場を周辺が様々な形で、特に横石さんがマーケティングや情報分析をしながら、役場ともうまい関係をつくりながら、そういう場を設定される。だから地域の経営は、企業経営よりもある点では難しい、幅広さを要求される概念ではないかと考えさせられました。これから地域の経営ということを考えることは非常に重要なことです。

それでは続いて、本田さん、お願いいたします。本田さんは16名の農家婦人を束ねてひまわり亭を経営し、高齢者への食事の配食や、実際のレストランの経営もやっています。本田さんのリーダーシップはかなり強烈ですが、そろそろ後継者ということもお考えですか。あるいはそういう次の人材育成は、どのあたりをポイントとしてつかんでいらっしゃいますか。

**本田：**女性は、なかなか独特なものが環境的にありまして、私がいちばん年齢が若いのですが、ほとんど60代、70代の女性たちが働くということになると、まず人間関係というもの、性格が合うとか合わないとか、あのおばちゃんとこのおばちゃんは意見が合わなくてけんかをして帰ってしまったというような、日常いろいろなことがあるのです。そういう中で、確かに人材育成とか、次世代を担っていくリーダーは必要だと思いつつも、これは非常に難しい問題なのです。

今日、実はこの会場の中には、福岡、佐賀など九州各県の女性リーダーがいらっしやいます。「今日、久しぶりですね」とご挨拶をしながら、「非常にいま、日本の中でも九州の農山村の女性たちは元気ですね」と声をかけていただいているのですが、そういう中で女性たちがいま、仲良しグループからどう脱皮しながら自立をしていけるかというところに、とても大きな鍵があります。そこで、こういう研修や交流という場面がとても重要な役割を担っているし、これからもっともっとそういう人材を養成していく一つの拠点が必要になってくるなと思っています。

いま岡崎先生からご質問いただいたように、私は地域づくりという形の中でどんどん進んで、逆についていくのが大変だと、実はうちのおばちゃんたちは言っているのです。本当に人を育てることはとても難しいし、自分の思いを伝える、つなげるというところに、12年経過して一つのジレンマも持っています。

しかしながら、実は私の師匠は96歳でまだ現役です。球磨郡湯前町、市房漬加工組合代表、山北幸さんという方で、戦前、戦中、戦後を通してながら農村ビジネスを六十数年やり、たかが漬物、されど漬物で、年商1億を売り上げます。その当時、地域づくりとか、まさに農山村女性の起業家というような言葉はないのですが、貧しかったから、本当に経済的なものが女性の中になかったからということで、いまでいう六次産業化を始めた山北幸さんが私の師匠ということになります。

その師匠も95歳の昨年まで現職の会長を務めざるを得ないというぐらい、市房漬を代表する53の漬物がブランドではなく、そこで生きてきた人がブランドになるということです。ただ農産物をつくって流通に回すことが地域の活性化ではなくて、その方がどのような思いで、どういうストーリーの中で、この地でこの物語をつくり上げたかということがブランドになるということに改めて気づかせていただきました。

そのようなことで昨年、会長を退かれたのですが、それでもまだまだ元気で、「私はまだ96歳」と言われている山北幸さんのDNA、思いをつなげていくことしかできないかもしれないということで、漬物づくりはできないにしても、形を変え、また、いろいろな職種やものを変えながらも、そういう先人たちの思いをつなげていくことが必要ではないかと私は思っています。

ですから「ひまわり亭」は、一つには女性たちが自分たちのリスクを負いながらどこまでやれるかという社会実験的なものもありますが、それがどう形が変わっていくかが、その思いを誰かがつなげていくことが重要だろうと思っています。

岡崎先生が「地域づくり団体全国協議会」という、すべての都道府県に平成6年に地域づくり団体を結成されて、私は熊本県の300を超える地域づくり団体の会長を4年前から仰せつかっています。いま、そういう小さな、コンパクトな地域づくりの団体で一つの共通のベ

## ■ 福岡フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

クトルに向けてみんなで学んでいくというきっかけをつくっていくことが大事だということで、来年、第29回の大会をスタートします。九州は新幹線全線開業という平成23年にベクトルを合わせながら、九州は一つであるという共通認識、テーマ性を持って進めることが重要だと思っています。

今後、地域活性化の担い手をそういう形の中で育て上げるし、またそういう方たちがその役職になったら、その器の中で育っていくものだと思っています。私自身はひまわり亭という一つのレストランを継続するのではなくて、地域を持続していくためにそれぞれの役割分担の中で活動をしなが、私自身もまだ途中経過ですので、「まだ96」と言える山北幸さんの後を追いかけてながら、今後もがんばっていきたいと思っています。

**岡崎：**ありがとうございます。本田さんはバイタリティがあり、活動的、行動的な女性だと拝見しています。彼女のそういう行動の後姿を見ながら、熊本県内、九州のそういう女性たちは、これから頑張っていていただくことを期待しております。

それでは野上さん、担い手論、それから野上さんの地区に、色々なご商売をしている住民もおられますが、そういう方々をどのようにハットウ・オンパクの動きの中に巻き込んでいったのか、そのあたりをお聞かせ下さい。

**野上：**これからの話は、すでにできていることもあるし、これからオンパクの組織としてこうなっていきたいというような話でもあります。まず、私どもの別府市もそうですし、オンパクはいま全国でいろいろなところが始めていて、10カ所ぐらいのところが我々と一緒にやっていますが、どちらかというとならべて地方都市です。しかし、温泉がなければ駄目だというわけではなくて、温泉のない地域でもオンパクを始めています。

地域の中でできるだけ多くの方がスイッチが入って何かをしだすということが、まずは重要な地域活性化です。もちろんスイッチを入れるには、地元でどのような宝物があってそれをどう使おうとか、いろいろなことにチャレンジする精神的な変化というか、何かを始めていこうということが大事です。そういう人がたくさん増えていくことで、もしかしたら大ヒット商品も生まれるかもしれません。そうは言っても、その一人ひとりに、ちょっとした収入源が出ていくといったことを狙っているわけです。そういう状態が、持続可能な地域のあり方という気がしていて、つまりいろいろな人がいろいろなことを常にやりながら変化してチャレンジしていく、という状況です。

それに巻き込むリーダー、組織がどういうモデルであるかということをお我々は常に考えるわけです。我々はオンパクをなぜやっているかということ、そういう人たちがチャレンジして自己表現して、何らかの変化のきっかけをつかむ場を得ているわけで、そういうような良質なきっかけを、我々は「地域の苗床」と呼んでいます。要は、潜在的な種が芽を出すような豊かな苗床が地域にあるかないかで地域の力は変わってきますから、その苗床をとにかく整えて、苗床が苗床としてきちんと機能するようなことに徹している組織が、最初のオンパクの組織のイメージです。

それをやるリーダーは、自分が上に立って、「よっしゃ」という理念を出して指し示す型のリーダーかということ実はそうでもなくて、どちらかというとな人が喜ぶことを自分の幸せと感じるようなタイプの人たち、それはスタッフにもいえますが、そういう方々が向いているのではないかと思います。もちろん理念をしっかり持ってぶれないようにするリーダーでな

ければいけません。だけど自分が表に出て、「すべて私がやりました」ということでは当然ながら苗床は腐っていくので、そうではなくて多くの人が日を浴びてすくすくと育つような、とにかく苗床づくりに生きがいを感じるような人がリーダーになるべきではないかと思っています。

一方で、オンパクという活動自体が上勝町のいどりさんのような収益を生んで利益を出していくかという、実はけっこう難しいところがあります。というのは、事業をするというよりはそういう人たちが成長するのを支援する、いわゆる中間支援型の組織になっているためです。ただ、経営という面ではちゃんと回していかなければいけないので、そこはこれからの課題でもあるわけです。

まず第一に必要なのは、その地域で絶対にこの活動がなければいけないという評価を得ていくということです。その次はきっと、「じゃあ、なくさないように地域で支えていきましょう」というような、例えば行政が応援してくれるといった話が次にステージとして出てくるのです。当然だけれども、それが永劫に続くかというたとぶんそうはならないので、その次のステージを我々はこれからつくっていく必要があります。

そのような中で我々が非常に注目していることは、地元の企業や市民そのものなのです。一つは、地元の企業は今後、社会的責任だ何だという中で、自分たちの企業で働いている人などがどういった優れた労働環境で働けるかということに、すごく努力する必要があると思うのです。例えばそういうものを、自分たちの企業で全部やりましょうということは、たぶんできない話なのです。

そうすると、地域のNPOや小規模な事業者といかに組んで、そういう課題を解決して企業としても発展していくかを考えるようになります。だから企業がお金を払って我々を応援するというイメージではなくて、何か一緒にやることで我々も成立することができます。そういう能力を、オンパク、我々のような組織が高めていく必要があると思っています。企業も巻き込んでいく力が大事です。

いまオンパクで活躍して変化している人たちは、立派なビジネスを立ち上げていくというよりは、例えば女性でも特別なスキルを持っているから、パートに行くぐらいのお金が毎月稼げるようになったとか、地域づくり団体でもいままでボランティアでやっていたものをちゃんとお金をとって、そこでは損はせずに利益が出るようになってきたとか、そういう非常に小さな、マイクロなビジネスがいっぱいオンパクにはあるわけなのですが、次のステージとしては、そういうマイクロビジネスと地場の企業をどのようにコラボレートさせて新しい価値を創造していくか。そういう提案力、コーディネート力がオンパクのような組織には必要だと考えています。

もう一つは、地域そのものがよくなるということです。一番の受益者は市民だと思うのです。その市民が我々の活動にどのように参加するかというような形を僕らはつくる必要があると考えています。それは、オンパクの参加者として楽しんでいただくことも大切なことです。もう一つは、市民が「この地域は、こういう新しい形で地域を運営していくんだ」という共通の合意のようなものができて、例えば寄付してくれるといった形で参加してもらいたいと感じています。

そういう仕組みを僕らはつくる必要がありますが、実はまだできていないのです。それ

## ■ 福岡フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

は、オンパクがどういう活動をして、どれぐらいのいい影響を我々が提供しているか、ということ伝える力がまだまだ弱いからです。そういう力を高めていって、地元の人が地元のための活動にちゃんと参加して貢献できるという環境づくりを我々の組織としては行っていかなければいけないし、できるようになればいいなと考えています。

そうした仕組みは、立ち上げて5年ぐらいのスパンでできると思っています。経営全体はできないと思うのですけれども、ある部分の役割、特に小規模なものを生み出していく、地域のいいものを発掘する、現場の人を育てるといった部分に対して、オンパクという組織がちゃんと地域の中で回っていくような仕組みをつくりたいと思いながら、活動しています。オンパクでは、まだそれは道途上なのですが、あと2年後ぐらいかな、別府でまずはそういう世界を成し遂げたいと考えています。

**岡崎：**なるほど。非常に興味深いですね。別府のような都市になると、いろいろな企業も存在している。そういう企業との連携の仕組み、あるいは参加者としての市民の参画、もっと主体的にその中に入っていけるような仕組みをどうつくるか。なかなか難しい作業ですけれども、オンパクという仕組みから一つの道筋が見えてくるのではないかと思います。

野上さん、別府には立命館のAPUがありますね。この大学はちょっと変わった、ユニークな大学ですが、ここの連携はどういう状況ですか。

**野上：**実はAPUとは非常に深く連携していて、今日も2名、APUを卒業した人が会場にきています。この2名は、いまオンパクのスタッフとして勉強しているところです。

やはりAPUには面白い生徒がいるということと、世界とつながっているのでもそを利用しています。特にNPOの経営というと、若い人にとって学ぶ現場がすごく多いので、我々はインターンに来ていただいています。ただ、我々は、男性のインターン生に関していうと、だいたい1年間活動してもらいます。その期間、APUの方は休学してもらいます。それぐらいやらないと本気で成長しないので、1年間休学してもらって、インターンとして本当に現場に放り込んでいきます。オンパクを立ち上げていく現場に放り込むのですけれども、そこで成長した若い人には別府に定着せずに、どこかの企業、いいところに行ってもらいたいと僕は考えています。つまり人を育てる機能です。

女性に関していうと、できるだけ地元に残ってほしいと思っています。僕もあまり新しい人間ではないので、男ばかりでなく女性にも活躍してもらう必要があるのかなと思うのです。女の方はNPOのような現場で学んで自分で立ち上げていくとか、ある時期を我々とともに過ごすことで人を育てていけるような組織になるといいなと考えています。

**岡崎：**ありがとうございました。

豊重さん、続いてお願いいたします。柳谷（やねだん）は、豊重さんが非常に強烈なリーダーシップで、いままでの15年間は引っぱってこられたわけですが、やはり後継者のことも非常に気にしておられる。先ほどもそのあたりのご発言がございましたが、どのように後継者を育てておられますか。また柳谷（やねだん）の330人の住民に対してどのように参画の意識を築き上げてこられたのか、どのあたりに腐心されたのか、そのあたりについてのご発言をお願いします。

**豊重：**私が15年前に引き受けたとき、柳谷（やねだん）の人口は330人でした。10年間で285人まで右肩下がりになりました。10年間で50名近くが他界されました。そこで私は、分

布図をつくって、数やグラフで周囲に示さないと駄目だと思い、公民館に、総務省の統計パターンの中でいちばん柳谷（やねだん）に近い条件を設定し、10年後、20年後、30年後の人口推移の折れ線グラフを書きました。

そのときに思ったのは、4～5人亡くなっていくと本当に集落が消滅する。それなら、維持するにはまずどうしたらいいか、文化を語る地域を創らないと、子どもも柳谷（やねだん）で学んで住んでほしいので羨望をもたれるような地域づくりをやらないと駄目だと思いました。

それはなぜかといったら、初めから文化を語ったら「豊重、東京にいて頭が少しぐらいよかったからといって、文化なんてしゃべるなよ」という抵抗勢力があったと思うのです。それを満を持して10年後に、空き家を歴史として見せるために蓄財500万の中から毎年100万円ずつ投じて、屋根工事やトイレの改修ができないか、と思い、築140年の建物がいちばんゲストルームにもふさわしかったので所有者にお願いしたら、なんとこの人が県庁職員なのです。「駄目」と言われてしまいました。

ここで引かないのが私なのです。最後に8号館をやっと手を入れて古民家活動の研修宿舎に変わってきた、すなわち1号館から周囲を全部改革して使うようになったとき、定年退職された県庁職員の方が、「豊重さん、あの建物を使ってくれない」と言ってきたのです。皆さん、ここなのです。強制して命令形で目的だけ言ってしまうと、案外、人間は引いてしまうものなのです。これが私はよかったと思います。

ですから行政はパートナーでいい。私が柳谷（やねだん）を引き受けた15年前は、役場職員が11名いました。いまは7名います。4名はリタイアしています。途中で、六つの専門部に部長を必ずセットします。すなわちエントリーは行政のいちばんふさわしい経験者のところに「あなたは、畜産家だから畜産部長をやってくれないか」と。いま畜産部長をやっているのは県庁の畜産課長なのです。

行政マンは、地域で役割を引き出すということさえ考えていたらいいのだと思います。集落民ですから、技術、体験を必ず出してくれるいちばん身近にいるのが行政マンとっているので、私はこれで成功したと思っています。

皆さん、誤解しないでくださいね。柳谷（やねだん）は本当に無理していないのです。どこでもできることをやっているのです。ただし、僕でないといけないことが一つあるのです。それは何かと言ったら、一つには、古民家を改装して、メディアを使って、ホームページでインターネットを使って「芸術家、どうぞ」という募集をすることです。いま、遠くは富山、石川から7人来ています。7人全部バージョンが違います。

この人たちを集めるのは簡単です。ところが田舎で生活するための保全担保ができなかったら、呼んでもただのイベントになってしまいます。これでは呼んだ意味がありませんので、面接します。履歴をもらいます。そして、対面で「柳谷（やねだん）にふさわしいかな」ということで私たちは7人を受け入れました。いちばん古い人は4年目になります。10年間帰らないと言っています。班活動も地域活動も、順番が来たら配布物も1カ月担当をやってもらい、町内会費も払う。こうした条件で集落が認めて、迎え入れる館だから「迎賓館」とつけています。

二つ目は、私の母校の中学校を動かすことで、去年122名の生徒がいて、この生徒たちに、

## ■ 福岡フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

油絵、ブロンズ彫刻、水彩画、カメラ、陶芸の項目で迎賓館に展示する作品をつくらせました。これをやるのに2年間かかって、やっと学校を動かすことができました。地域で学校を動かすことができ、青少年には最高の出番と、学園外で本物に触れることができることをやっとスタートできたかなということなのです。

学校から生徒たちを往復すると1時間20分かかる。午前中を費やしているともったいななし夏は暑いから、集落の財源でマイクロバスをチャーターして、まず乗せて、着いたら開講、学びたかったらどうぞ、といって4時間みっちり作品づくりをさせました。こうやって芸術でなくても本物を、本気でその策を考えたら、古民家も考え次第では迎賓館になるのです。

もう一つは、リーダー養成の話です。19年度から5月と11月に、柳谷（やねだん）から招待状を送り、故郷創生塾、超リーダーの養成をやるうとして、すでに7回目を終わりました。この近くでは筑後市は毎回来ます。大牟田市からも来ました。熊本は御船町からも来ました。菊陽町からも来ます。

柳谷（やねだん）では、3泊4日でリーダー養成をやります。並みの感覚で来たら地獄だと思われま。帰るとき書いてもらう感想文を私は持っていますけれども、自分の考え方のポイントの甘さ、「苦労は宝だ」と言う集落の生き字引の人たちの、いろいろなチェックのさせ方を学ぶのです。併せて今回は、総務省の椎川審議官も来てくれました。1泊しました。熊本の九州財務局長の水野局長は3泊4日しました。次回は11月に実施します。

今回は7回目で32名来ました。トータル7回で128名、全国に散らばっています。すべての人が超リーダーとは思いませんけれども、まず地域づくりをやるうと思うならば、それはやめたほうがいいというのが私の持論です。まず自分が身太りをする雑学を学んだうえで、ということがスタートではないかと思ひます。

国の審議官、官僚が柳谷（やねだん）まで足を運んで国を語ってくれるということは、最高のコミュニティの場所、柳谷（やねだん）は社会に貢献しているんだよね、という感覚で、私は自信を持ってぜひ皆さんにもご案内したいと思ひます。

先ほど講演された木村俊昭さんは私によくメールをくださいます。私たちは、情報をいち早くお互いがキャッチボールをして、それを柳谷（やねだん）だけにとどまらないで、社会にどんどん情報を流していくという橋渡しのために木村さんも協力してくれていると思ひますので、今度の11月は、「日程をぜひ組んでください」と言ひて、木村さんをお呼ぼうかと思ひているのです。

柳谷（やねだん）に40人視察が来ると、10万円のお金が集まるシステムがあります。これをやるから芸術家は残るのです。40人来ると、まず視察料をもらひます。1000円の食事をしてもらひます。これで5万5000円ぐらいのお金がお動くのです。

併せて、土着菌、加工品などで収入を得ています。プロのカメラマンは、柳谷（やねだん）で商売できるはずはありません。プロのカメラマンでも「柳谷（やねだん）視察記念、はい、800円でどうぞ」と言ひたら、だいたい8割の人が買ひます。現金が入ってくるのです。そうすると40人の8割といたら30人でしょう。2万4000円の現金が入る。鹿屋で、個人でカメラをやっている専門家でそれだけの収益を上げる人はいないと思ひます。こうやって陶芸も油絵も一つ買うと3000円で三つ入れたら9000円が、3000円で福袋があるのです。そ

の売り上げの1割を柳谷（やねだん）にバックさせる方式をとっているのです。それはなぜかと言ったら、カメラマンは金を持っていません。撮るのは専門です。でも、15万円するプリンターを集落で購入して貸しているのです。帰るまでの間はプリントを使ってどんどんセールスしています。

陶芸家にも、30万円する中古の1300度まで温める炉を集落で買って貸しているのです。いま彼らに僕が提言しているのは、「7人で1万円ずつ出したら7万円だ。迎賓館で53名の70歳以上の高齢者を、敬老の日に芸術家で祝ってやってみては。もっと集落はあなたたちに協力体制ができるよ。そのときに作品を並べていたら、それは買ってくれるよね」。ということですよ。

皆さんが笑って、私も楽しくなかったら、リーダーは務まりません。どうぞ皆さん、リーダー養成、よかったら柳谷（やねだん）の苦勞に挑戦してください。

**岡崎：**ありがとうございます。子どもたちの芸術教室は、色々なコースがあるんですね。町内に移住してきた7名の芸術家に最大限に活躍の場を与えて、そこへ子どもたちが一緒に焼物や油絵などを勉強しに来るといいう仕組みを、集落や公民館がバスを出し負担をしながらやっていたらいいですね。

当初、考えもしなかったのですが、私がいちばん最初に豊重さんとお会いしたときに「自分たちの柳谷（やねだん）のまちづくりのテーマは二つある。子どもと文化だ」と。私は、出てくるのは空き家対策や過疎化対策ということだろうと思っていましたが、収益で外から先生を呼んできて寺子屋を公民館で開き、子どもたちを集めてそこで勉強させ、それをまた芸術家と結ぶ。そういう形で、文化というものを基礎に置きながら。持続的な活動に繋がっていくのだと思います。

しかも将来を見据えるために、子どもを通して柳谷（やねだん）の将来を考えるという視点を住民の方たちにも提供する。孫の教育費に文句を言うお年寄りは一人もいないとおっしゃっていましたが、人々の考え方、行動パターンをお考えになりながら、具体的、持続的な活動をしておられるというユニークなまちづくりだと思います。

いろいろお話を伺ってきましたけれども、会場の皆さんから、ご質問、ご意見などがありましたら、それをお伺いして、4人の方に最終的なご発言をいただこうと思います。

**質問者：**横石さんは、6月4日に発表された「新しい公共」の会議の構成員でいらっしゃいますので、お伺いしたいのです。「新しい公共」の中で市民の役割、企業の役割、政府の役割と分かれています。特に市民と企業の役割について、上勝町の新しい公共のイメージあたりも全部資料としてお出しになっていますけれども、ここで市民に対してのメッセージといましようか、「新しい公共」の考え方について教えてください。

いままでのお話を聞いていると「新しい公共」という概念について皆さんは共通の認識をお持ちのようだったので、横石さんのほうから直接言葉をいただければと思います。

**岡崎：**ありがとうございます。それでは横石さん、お願いいたします。

**横石：**皆さん、「新しい公共」というのをお聞きになったことはありますか。私は政治にはあまり関心はないのですが、どちらかというと鳩山総理が所信表明演説で特に言った居場所と出番をつくるということは上勝町から出ていったような言葉で、非常にいいなと思いました。日本でいまいちばん必要なことだと私は思っています。一人ひとりが役割を持っ

## ■ 福岡フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

て居場所と出番があって、それを担っていくということがすごく大事なことだと思います。

でも、なかなかうまくいかなかった点もいくつかあったのです。それはNPOの税制優遇の問題であったり、どちらかという、かなりNPOのほうに話が行ってしまったところがあるのですけれども、私は優遇するとか、寄付ということより本当に大事なことは、豊重さんも書いてありますけれども、「結」の精神というか、日本人は本当に、高齢者が持っていた「結」の精神がすごく大切だと思います。

権利を主張し自分がよければいいという、どうしてこのようになってしまったのでしょうか。もう少し前の日本のいいところに戻ることはないのかなと思う。これが、上勝町の場合は居場所と出番ができたことによって変わったのです。例えば生活保護も県下でいちばん少ないと言いましたけれども、上勝町では働かない人がいたら「どうしてあの人は働かないのですか」という疑問が地域の中に出てきたのです。「もっと仕事があるから、あなた、仕事をすればいいじゃないの」と、地域が仕事をするように勧めていくような地域環境になったのです。

ですから「新しい公共」というのは、私は一人ひとりの居場所と出番があって、しっかりとみんなが地域をつくっていくということが本当に大事なことだと思っています。そういう意味では市民と企業の役割という点からみると、私は、市民は昔から自治会、町内会があったと思うのですが、こういったことをできるだけ、社会企業化させていくとか、市民と行政と企業の三つの役割があって、それぞれが糸を引きながら地域をつくっていくということがすごく大事です。

自治会は非常によかったのですけれども、だんだん自治会の役割がなくなってきてしまって、みんなが参画しなくなってきたのです。婦人会、PTAもそうです。それがどういうところに課題があって、どうしていかなければいけないかというところを、もっとみんなが検討したり、課題を解決して行って、市民としてももう少し社会企業化させていけば、その社会企業が地域をつくっていくという形ができると思います。企業側は企業として社会貢献している部分はたくさんあるので、CSRの問題もそうですけれども、形だけではなくて企業と市民をもう少しうまくつないでいくことができれば、地域はよくなっていくのではないかと思います。

怒られるかもしれませんがけれども、ちょっと私がああ会議で浮いたのは、現場がわかる人が非常に少なく、どうしても理論的なこと、形をつくることばかりに走ってしまったところがあるので、一つでもいいからみんなができることを「新しい公共」という観点で進めていくということが、これからすごく大事なことだと思います。ですから、昔のよかった日本とか、「結」の心をみんながもう1回見直して、地域をつくっていくようにしていければいいなと思っています。

**岡崎：**それでは、パネリストの皆さんから、全体的な、とりまとめのご発言をお願いいたします。

**豊重：**農業立国とか、地方によると休耕地とかいっぱいありますけれども、基本的には農業は土づくりだということの入り口で、いま私たちは10年間、土着微生物、バクテリアをやっています。行政の皆さんに、「農業はアイテムではないですよ、微生物の力で土づくりが基本ですよ」ということをぜひ言いたいです。

もう一つは、柳谷（やねだん）は特別なことはやっていません。ただ、基本があります。その基本とは何かと言ったら、自治なのです。

自治の基本は何かと言ったら、三つの原則を私は常に考えています。まず国でも一緒に。基本的には日本は治安が最高だと思います。柳谷（やねだん）でも、夜中でも1人でも歩けるとい自治の基本は、治安の見直しと、治安の大切さ、これが一つ目です。

二つ目には、義務教育。義務なのに学校にも行かない、来なくてもいいという社会に、そして、学校、学園があまりにも変わりすぎてしまって、子どもが犠牲者になっています。だから義務教育を集落で、手を貸してあげなければならない子どものために、地域が見守ってあげるとい、義務教育の復活徹底をもう一回柳谷（やねだん）はやらないといけないと考えています。キーワード「子どもだもん」というのが二つ目。

三つ目は、国が動いて、大切なのは確定申告。「がんばれよ」「もうけたよ」「おかげさまで」「でも4割は還元して国税、地方税を払います」という社会は、自己責任だけではなく、これも国民の義務ですから。

私は、この治安、義務教育、確定申告の納税を地域づくりの基本としてやっていかなければイベントになってしまう、だから長く続かないのではないか、ということを考えてながらやってきています。

**岡崎**：有難うございました。いまのご発言は、現在いろいろ議論されているソーシャル・キャピタル、社会資本ではなくて社会関係資本、つまり安全な地域社会、信頼関係のある社会、連携のある地域社会をもう一回、再確認することだ、というご発言ではないかと思ってお聞きしました。

では、野上さん、お願いいたします。

**野上**：地域力ということで考えますと、オンパクは地域づくりの活動なのですけれども、実はまちづくり、市民活動の方々だけではやらないと決めているのです。そういう方々だけでやってしまうと蛸壺化していくとか、開かれてこないのです。我々の最大の特徴は、本当に普通の事業者さん、個人の方も含めて活動の主役になっていただくことで、より多くの人がそこに集まれるようにしている。

ただ、まだまだ足りないのは、企業の方、もしくは働いている方という意味でいくと、その方々はきっと退職した後に、地域に関わっていないとけっこうリスクだと思うのです。会社の中で飲み会があって行くのはいいけれども、いざ辞めてみると何もやることがないというような話があるわけです。そういう方々が地域で何ができるかというよりは、今のうちにやっておかないとリスクになるのではないかということです。

もう一つは地域ということで見ても、NPO、市民活動、行政、もしくは意思のある個人だけでやっても地域は駄目で、そこにはいろいろな人たちが関わらなければ駄目だと思うのです。ただ、それは自然に関わりだすことはまずないと思うので、そういった多様な関係者が集まって地域の課題に対して対応できるような組織が必要だと思うのです。その組織を経営するとか、マネージメントする人は、とても高い能力が求められるわけです。

そういう方々を、例えば地域で育てるとい、もっと言うと、地域で食べていけるように考えられる地域がおそらく今後残るだろうし、そういうことに対して価値を認めずに「ボランティアでやりましょう」「ありがとう」と言っている地域は、そのようなことをやる人

## ■ 福岡フォーラム／パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」

はいなくなるので、きっと駄目になっていくのだろうと思っています。

いわゆるそういうところにちゃんとコストと時間をかけるというような考え方ができる地域なり、制度というものが今後できるといいと思っています。オンパクをやっている人たちはそういう形で地域の経営的なものやっけていきたい人たちがとても多くて、地域の新しいリーダーがすくすくと育っているのですけれども、まだ残念ながらその人たちが未来永劫、安心して活動に臨むというようなところまで僕らはつくれていないので、これからの課題です。

もう一つは労働者の人たちが地域活動に参加するためには、先ほど木村さんが言われたように楽しくなければ駄目です。だから地域をコーディネートする経営者も、一方で楽しい現場をたくさんつくれる能力もいるだろうし、あまり難しい話というよりは、現場の中でとにかくどンドン知り合いになって、楽しく参画できるような雰囲気づくりができる人材や組織になっていきたいと考えています。

**岡崎**：ありがとうございます。では、本田さん、お願いいたします。

**本田**：昨年、政権が交代し、最近、鳩山首相から菅さんに替わったということで、私のイメージの中ではもともと市民運動から市川房枝さんの思いをつないでいただいているというものに関して、非常に期待感を持っています。その中で、私たちは、この地域にそれぞれに自信と誇りを持って勤労していく、働けるという喜びをどう自分の中に持っていかかということがとても大事なことだと考えています。それがどういう職種だろうが、私たちはこの地球に生まれてきてよかった、住んでよかった、ずっと住み続けたいと思える地域を創造していくことは本当に大切なことであるし、私たちの子どもや孫たちにそういう思いをつなげていくことが地域づくりの中に大事なことだろうと、常日頃、思っています。

そういう視点の中から、私は三つの大事な「ワーク」という働きの中で、常にこれからはそれぞれが連携していくネットワークづくりが強化されていかなければ、自治というものは成り立たないだろうということが一つ目。

二つ目には、フットワーク。それぞれが役割を担い、まさに出番を持つというとても大事なフットワークという実践。地方の問題は現場でしか解決できないという、現場をもっとよく知るということが大事なことだろうということで、私たちも自分たちの住んでいる暮らしの生業の中で、身の丈に合った、できるところからスタートしていくということを大事にしていきたいと思っています。

三つ目には、世の中、やはりチームワークという輪。循環していく輪であろうが、つながっていく輪であろうが、日本の「結」、「輪」というものが必要だろうと思っています。

こういう財政危機、さまざまな社会課題を抱えていく現在の社会の中で、私はこの三つのワークを大事にしながら、働ける喜び、そして働かせていただいている喜びというものを感しながら生きていきたいと思っています。

私も1年間、ガンとの闘病生活の中で生きるということ深く考えるきっかけがあり、そこから食に関わっていく生き方となりました。これからもこの三つのワークを大事にしながら、すべての基本は家庭力であると。いま、家庭という基本、大事なものがこわれていっている。家族の絆はとても大事であるし、その中にもう一回、本物の教育という教育力を上げていくことが大事だろうし、その教育力をつくっていくのが地方の役割りではないかと思っ

ています。

3省連携の「子ども農村漁村交流プロジェクト」というモデル事業が開催されています。そして平成25年には、小学校5年生が3泊4日ぐらいで農山村に泊まる、そして農業を体験するという政策がスタートします。そういう役割の中で、私たちはこれから環境整備をしていきたいと思っています。

**岡崎：**では最後になりましたが、横石さん、一言お願いします。

**横石：**私は後継者をつくっていくということを、すごく大きな課題として持っています。でも、おじいちゃん、おばあちゃんがすごく元気になってきました。それがいま、地域の若者、都会の若者というところへつながり、若者がキラキラした感覚で上勝町に来てくれるようになりました。若者の意識が、ここ2～3年の中で大きく変化してきたことが私はすごくうれしいです。これからの日本を背負って立ってくれるというか、すごくうれしいことだと思っています。

そのような意味も込めて、うちでは思いきってインターンを160名募集という形で、来月から2000人の町にインターン生を160名、2年間かけて受け入れていきます。どうしてするかというのは、やはりマッチングです。考えていることと現場とを、うまくすり合わせていくところが必要だと思うのです。面接でもそうですけれども、ぱっと見ただけではわからないですけれども一緒にやっていくことによっていいところもわかり、「これは一緒になってやっていけるな」ということがうまくつながってくるので、この舞台をつくっていくことで、160名受け入れていこうということに踏み出しました。

そういう意味では、地域の舞台の中でマッチングをしていくようなことがどんどん広がっていったって、自分を見つけていくというか、自分の役割や出番が見つかっていく。そういう意味ではもっと、仕事のことも、地域のこともいろいろな意味で舞台づくりができていけば、これから面白いなと思っています。

最後に、私は福岡に来るのが大好きです。たつみ寿司さんというのはご存じですか。福岡では非常に有名なお寿司屋さんなのですが、たつみの大将は上勝町の出身なのです。中学校を出て、長浜食品の社長とたつみさんのご兄弟で、福岡で一代をなしました。たつみ寿司の社長が、「故郷が元気なことが、私は何よりもいちばんうれしい」といつも語ってくれます。出身者にとったら地域、故郷が元気なことが本当にうれしいということで私によく声をかけてくれます。

**岡崎：**わかりました。

今日、4人の皆さんは、非常に具体的に、また噛み砕いてお話をさせていただきました。いまさら解説するまでもありませんが、さまざまな発言の中から冒頭申し上げた地域力とは何か、あるいはそれを創出する力とは何かということを、皆さんなりにご理解いただけたのではないかと思います。

短い時間ではありましたが、濃縮したご発言をいただけたと思います。4人の皆さん、有難うございました。

**司会：**岡崎先生、そしてパネルディスカッションにご参加いただきました皆さん、たいへんありがとうございました。

## 閉会挨拶

**司会：**それでは閉会にあたりまして、全労済協会専務理事、小池正明より、閉会のご挨拶をさせていただきます。

**小池：**全労済協会専務理事を仰せつかっております小池でございます。このシンポジウムの閉会にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

さて、本日はたいへんお忙しい中、私ども全労済協会の5周年記念のシンポジウムにご参加いただきまして、ありがとうございます。多くの方にお集まりいただきまして、盛大に成功裏のうちにこのシンポジウムを終えましたことを、心から感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

また、ご講演いただきました木村先生、そして、ただいま、パネルディスカッションをしていただきました4人のパネリストの皆さん、コーディネイターをしていただきました岡崎先生のご協力がありましてこのような質の高いシンポジウムに取り組むことができたのではないかと考えており、この成果を今後の全労済協会の調査研究活動に生かしてまいりたいと考える所存です。

さて、私ども全労済協会の組織につきましては、冒頭、理事長の高木からお話をさせていただいたところでございます。全労済協会は公益法人という立場から、二つの事業を行っているところです。一つは、勤労者の福祉向上のための調査研究を行うシンクタンク事業です。

もう一つは、勤労者団体が保有する財産の保全を目的とする共済事業です。

大きく分けてこの二つの事業を行っている公益法人ということでございます。現在、非常に大きな岐路に立たされております。公益法人制度改革法の中で、言うなれば共済事業を行っている公益法人は今後、公益法人として認可するという事は難しい、事業の5割以上の収益事業をやっている公益法人については公益法人としては認めないという改革方針を国が推進しています。したがって全労済協会も2013年6月をもって、公益法人から一般財団法人へ移行していこうという方針を決定しているところです。

今後その方向に基づいて活動を進めていくわけですが、いま申し上げたような二つの事業を一般財団法人になっても継続して進めていくという所存です。とりわけ目的は勤労者福祉のための諸活動を積み上げていこうという事業が私どもの中心事業ですので、その公益性の事業を一般財団法人になっていっても、是非続けていきたいと思っております。

私どものこの事業がさらに発展して勤労者のための事業になるためにも、今日、ご参加いただきました皆様方のさらなるご支援、ご協力をいただきたく、心からお願い申し上げたいと思います。

最後に、このシンポジウムが成功裏に終えましたことにつきまして、あらためて御礼を申し上げまして、閉会にあたっての挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

## 参考資料

---

### ○講 演

「地域現場から描くソーシャルデザイン」

木村 俊昭 氏 農水省 企画官

### ○パネルディスカッション

「地域力の創造に向けて」

大湯 章吉 氏 能登乃國ゆるぎ塾 塾長

猿舘 祐子 氏 株式会社土澤まちづくり会社 専務取締役

富永 一夫 氏 NPO法人フュージョン長池 理事長

横石 知二 氏 株式会社いろどり 代表取締役社長

豊重 哲郎 氏 鹿屋市串良町柳谷 公民館 館長

野上 泰生 氏 NPO法人ハットウ・オンパク 運営室長

本田 節 氏 農家レストラン「ひまわり亭」代表

# 地域活性化の動向

地域現場から描くソーシャルデザイン

小樽市 副参事 木村 俊昭

1

## 目 次

- ・地域活性化とは？
- ・人との出会い～一期一会
- ・これまでの体験談（成功と失敗）
  
- ・地域と大学との連携
- ・地域活性学会と地域活性機構
- ・地域活性化事例
- ・戦略的システムデザインによる活性化

2

地域活性化システム論(地域再生システム論)開講校

【平成18年度】モデル事業(1大学)

【平成19年度】10大学

【平成20年度】25大学

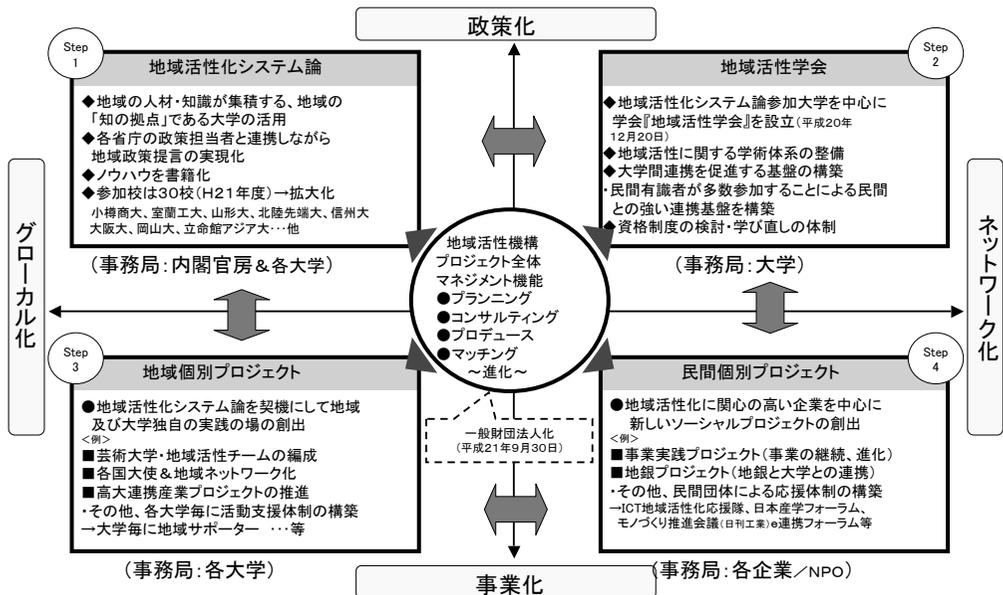
【平成21年度】30大学で展開予定

- \* 足利工業大学(H21年度より開講) テーマ: 足利市・西毛地域の活性化
- \* 秋田県立大学(H20年度より開講) テーマ: 秋田県農業の再生
- \* 大阪大学(H20年度より開講) テーマ: 医療・福祉、地域活性化、人材育成
- \* 岡山大学(H20年度より開講) テーマ: 農業と地域活性化(農と福祉、バイオマス)
- \* 沖縄大学(H20年度より開講) テーマ: 農業(イノ)、農と食、特産品開発、観光による地域再生
- \* 小樽商科大学・室蘭工業大学(H19年度より開講) テーマ: 観光戦略、地域ブランド戦略、ものづくり戦略
- \* 鹿児島国際大学(H21年度より開講) テーマ: 鹿児島県の地域再生・活性化
- \* 岐阜大学(H21年度より開講) テーマ: まちづくりリーダー養成
- \* 京都府立大学(H20年度より開講) テーマ: 「地域活性化」とは何か
- \* 高知工科大学(H20年度より開講) テーマ: 農業、観光、スモールビジネスによる地域活性化
- \* 甲南大学(H20年度より開講) テーマ: 六甲山の活性化
- \* 滋賀県立大学(H20年度より開講) テーマ: 大学連携、地域資源を活かした地域活性化
- \* 鳥取大学(H19年度より開講) テーマ: 地域資源を活用した産業振興
- \* 信州大学(H19年度より開講) テーマ: 信州の食、観光、文化振興、人材育成
- \* 高峰経済大学(H19年度より開講) テーマ: 地域づくり論、現代の地域づくり
- \* 千葉大学(H20年度より開講) テーマ: 地域活性化人材育成
- \* 東京藝術大学(H20年度より開講) テーマ: 芸術が地域にできること
- \* 東京農業大学(H21年度より開講) テーマ: オートワーク地域の特性を生かした地域活力の再生
- \* 東洋大学(H20年度より開講) テーマ: PPP制度手法論
- \* 獨協大学(H19年度より開講) テーマ: これからの「まちづくり」のヒントを探る
- \* 鳥取大学(H21年度より開講) テーマ: 大山地域活性化
- \* 法政大学(H19年度より開講) テーマ: 人口オーナス進行(人口高齢化、人口減少)下の地域再生
- \* 北陸先端科学技術大学院大学(H18年度より開講(モデル事業)) テーマ: バイオマス、伝統地場産業の活性化
- \* 三重大学(H21年度より開講) テーマ: 三重県内の実態分析・課題抽出
- \* 宮城大学(H21年度より開講) テーマ: 国土政策、住民参画、地方自治体の行財政改革
- \* 明治大学(H21年度より開講) テーマ: 地域活性化のコツ、連携による地域活性化
- \* 山形大学(H20年度より開講) テーマ: 地域中小企業のためのグローバル戦略(予)
- \* 和歌山大学(H20年度より開講) テーマ: 観光を通じた地域再生
- \* 早稲田大学(H20年度より開講) テーマ: 北杜市の地域資源の有効活用



※小樽商科大学・室蘭工業大学は共同開講。

地域活性化の効果的な事業展開図



## 地域活性化事例

### 日本のふるさと再生特区

(岩手県遠野市)



農業・都市農村交流  
関連

「どぶろく」の製造免許の要件緩和の特例を認めるなどして、地域資源、多彩な人材等を活用し都市との交流拡大を図るとともに、地域に根ざした新たな起業を促進する。

### 小豆島・内海町オリーブ振興特区

(香川県内海町)



農業関連

農業の担い手不足、地場産業の停滞中、株式会社の農業経営参入の特例を活用し、地域資源であるオリーブを、加工する企業自らが町内の遊休農地を有効活用して栽培。町の活性化を図る。  
※町名は認定時のもの 全国化済

### 海士デパートメントストアープラン～「選ばれし島」まるごと届けます～

(島根県海士町)

地域提案型雇用創造促進事業(パッケージ事業)【厚生労働省】



雇用対策関連

時間と距離という離島物流のハンディを解消するため、CAS(キャス・細胞を壊さない冷凍新技術)を活用した農水産物保存加工の新産業を興すことで、雇用を確保、定住者増加による島の再生を図り、次世代への持続可能な発展を目指す。

### 豊後高田「昭和の町」づくり計画～「昭和の町」を核とした商業と観光の一体的振興を目指して～

(大分県豊後高田市) 地域提案型雇用創造促進事業(パッケージ事業)【厚生労働省】



雇用対策関連

観光サービスを企画・提供する人材の育成により、中心市街地の街並みの「古さ」を逆手にとった「昭和30年代」をコンセプトとする「昭和の町」づくりに取り組む。

5

## 農業・農山漁村の潜在力

### ○ 耕作放棄地

- ・我が国の耕作放棄地面積 **39万ha**
- ・我が国農地1haあたりの農業総生産額(H18) **101万円**
- ・**10万ha**の耕作放棄地で営農を再開した場合  
⇒ 新たに**約1,000億円**の農業生産が見込まれる

### ○ エネルギー

- ・農地利用が困難な耕作放棄地のうち、仮に**4万ha**(全耕作放棄地の1割に相当)に太陽光パネルを設置した場合  
⇒ **約240億kwh/年**の発電量 (約**650万世帯分**)
- ・今後、開発可能な水力発電所…**約2,700地点**  
⇒ **458億kwh/年**の発電量 (約**1,250万世帯分**)
- ・その他、農業用水路等に未利用の水力エネルギーが存在

### ○ バイオマス資源

- ・我が国では年間**3億2千万トン**のバイオマスが発生(稲わら、家畜排せつ物、食品廃棄物、林地残材等)
- ・これらを全て発電に利用した場合の電力量 **約600億kwh**  
⇒ **約1,600万世帯**の年間電力消費量に相当
- ・さらに、原油に換算すると **1,600万kl**  
⇒ 我が国の原油輸入量(**2億4千万kl**)の**6.5%**に相当

### ○ バイオテクノロジー

- ・我が国のスギ花粉症患者は**約3,800万人**と推定  
これらの人々が医療費や医療関連費(マスク・目薬等)として**約2,300億円**を毎年支出  
⇒ 発症を抑制する花粉症緩和剤には、市場から大きな期待
- ・民間企業の推計では2009年の世界の医薬品の市場規模は**8,200億ドル(約82兆円)**(成長率:**4.5~5.5%**)

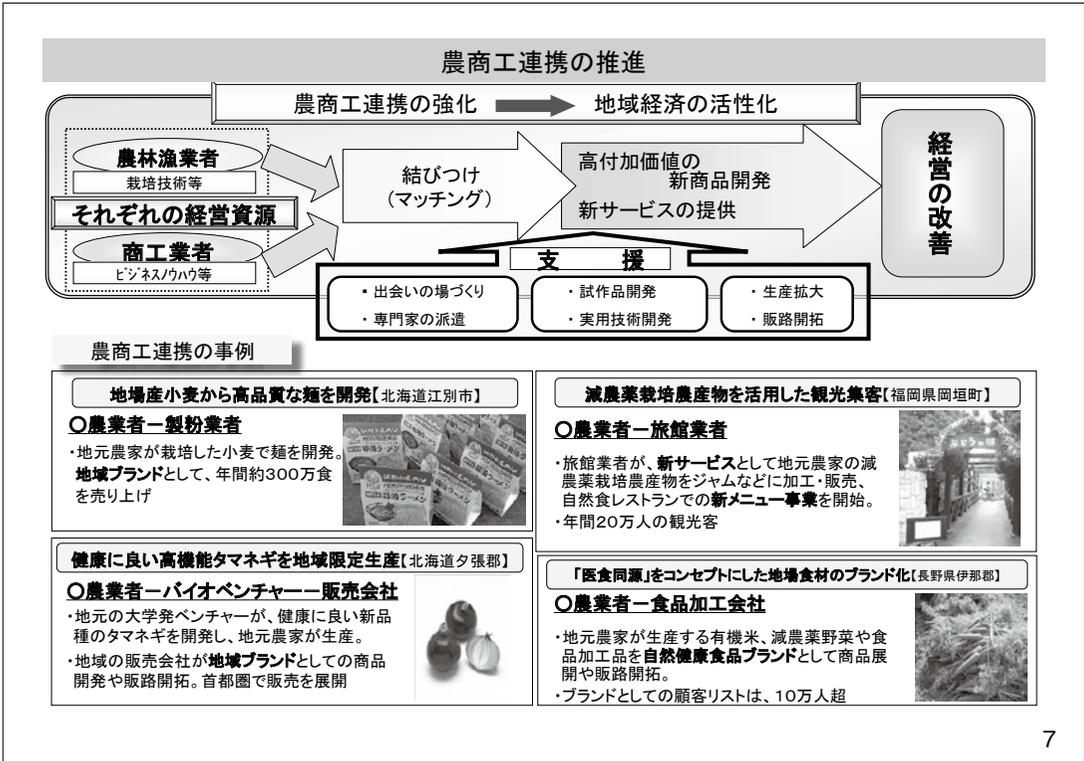
### ○ 情報通信インフラ

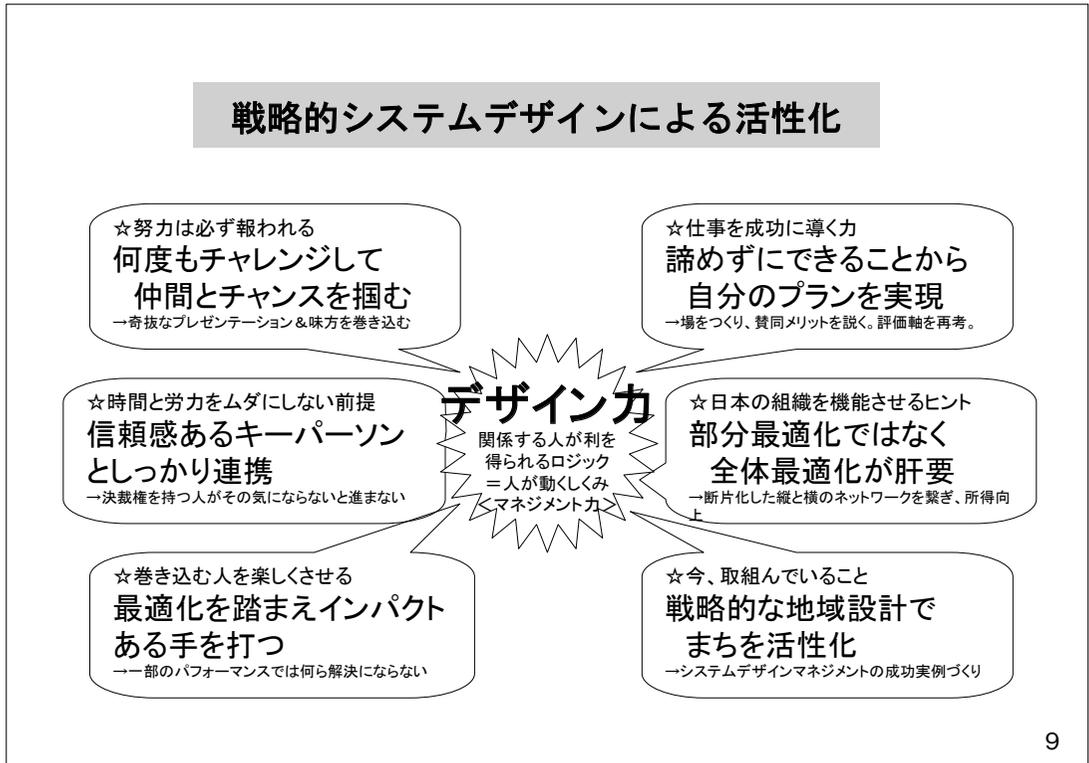
- ・ブロードバンドの普及状況  
サービスエリアの **98.3%** ⇔ 利用率 { (町村) **24.5%**  
世帯カバー率(全国) (都市部) **47.9%** }
- ・携帯電話エリア内人口(全国) **99.8%**  
⇒ 農山漁村では条件不利地域の情報通信インフラの整備と有効な活用の拡大への期待

### ○ 食品廃棄物

- ・我が国の食品廃棄物**約1,900万トン**のうち、**約1,400万トン**が未利用で焼却又は埋立により処理。これらを全て焼却したと仮定すると、**約3,500億円**の焼却費用  
⇒ 肥料・飼料利用の拡大による焼却・埋立費用の大幅な削減が可能

6





能登乃國ゆするぎ塾の活動

2010.5.24

能登乃國ゆするぎ塾  
塾長 大湯章吉

I 能登乃國ゆするぎ塾とは

元気な地域づくりを目指し1991年に発足。地域の資源、人や組織をコラボしながら新たな価値を創造する活動を展開。

ゆするぎの名称は、中能登町の宝である1300年前に開山された修験道の霊山、国指定史跡「石動山」の訓読み「いするぎやま」と人々の心を揺すり起こす「ゆする」を掛け合わせた造語。

II 地域づくり活動とは

一定の地域内で生活する人々が、過去から積み上げてきた価値に新たな価値を加え、地域に住むことを誇りに思い、豊かな暮らしを持続させていく活動。また、地域外の人との交流から刺激を受け、新たな気づきや発見による価値の広がりを深めていく活動。

III 豊かな地域とは

- 1、それぞれの活動が生き生きしている
- 2、個人や団体の連携・協働（コラボ）活動が展開されている
- 3、役割が分担（得意分野が発揮）されている
- 4、新たな価値が生まれ、引き継がれている
- 5、連携・協働（コラボ）を担うコーディネーターがいる

IV 能登乃國ゆするぎ塾活動の特徴

地域の特性や資源を発掘・発見し、地域内外の個人や団体をコラボして、新たな価値を創造するコーディネーターの役割を担っている。

V コラボ成功の秘訣

- 1、手柄（実績・成果）は相手（連携する団体）に与える
- 2、一部の団体に過度な負担をかけない（持続するために）
- 3、連携する個人、団体のそれぞれの目標を満足させる
- 4、時々ガス抜きをする（不満を溜めない）
- 5、連携する個人、団体のプライドを傷つけない

VI 地域資源の活用

1、地域資源とは

自然、地形、文化、歴史、宗教、人、動植物、伝統、物語、営み、活動、珍しい、希少、多い、小さい、大きい、短い、長い、技術、喜び、悲しみ、辛い、有名、無名、暑い、寒い、冷たい、目に見える、目に見えない、役立つ、役立たない、綺麗、汚い、醜い、臭い、ナンバーワン、オンリーワン、ワーストワン  
※プラス面だけが資源ではない。マイナス面やハンディーキャップも資源。無いもの探しから有るもの探しへ。

2、資源の活用方法

- ①今ある価値に磨きをかける
- ②埋もれた価値を発掘、発見し磨きをかける
- ③今ある価値に別の価値を加えて新たな価値をつくる

④価値が無いと思ひ込まれたものに命を吹き込む

⑤価値を交換、使用、積み重ね、組み合わせ、融合させて新たな価値をつくる

## VII 地域を蘇らせる10カ条

### 第1条 実践あるのみ

- ・計画だけで終わらない（計画するだけで疲れない）
- ・評論家は沢山いるが実践家は少ない（当事者意識を高める）
- ・誰かがやるでは無く自分がやる（一人からでもできる）

### 第2条 石橋は叩かずに渡る

- ・先を考えすぎない（叩いていたら渡れない）
- ・命を落とさない程度の冒険をする（溺死しないようライフジャケットを着用）

### 第3条 失敗を恐れない

- ・失敗は財産＝実証成果（基本的に失敗は存在しない）
- ・不毛な原因追究は無駄（かも知れないに止める）
- ・常に誠意を持ってあたる（信頼がすべて）

### 第4条 できそうも無いから、やる意味がある

- ・できそうなことは他人に任せる
- ・荒野を切り開くパイオニア精神で進む

### 第5条 大儲けでなく小儲けが良い

- ・初めから儲かることを考えない
- ・ボランティアだけでは続かない
- ・一人勝ちは続かない（皆が恩恵を受ける方法）

### 第6条 待っていても何も起こらない

- ・何もしないと何も始まらない
- ・行動から連鎖、化学反応が生まれる

### 第7条 自己完結型で終わらない

- ・多くの人や団体とコラボ（協働）する
- ・ギブ&テイクからWin-Winの関係へ（互いに結果をもたらす）

### 第8条 降りかかる火の粉は払うな

- ・一緒に暑くなって燃える
- ・ご縁を大切に（運命的な出会い）

### 第9条 大衆に支持される計画は劣化が始まっている

- ・先（結果）を読まずに時代を読む
- ・時代の先駆けを目指すのでは無く、時代を創造する意識が大切

### 第10条 馬鹿が育つ環境をつくる

- ・馬鹿の足を引っ張らない
- ・馬鹿を犬死させない（手をさしのべる）

## VIII 活動の事例紹介

### 1、アメリカ中学生の受け入れ事業（People to People Student Ambassador Programs）

- ・2007年から実施 6グループ 240人
- ・地域づくり団体や集落4団体で受け入れ

<目的> アメリカの中学生を大使として日本へ派遣し、日本の中学生や日本文化に親しむことを目的に開催。

<実施期間> 7月～8月 6回

<連携団体> P T Pインターナショナル、J T B、受け入れ団体

2、農家ビジット・ツアー（TAUCK ESSENCE OF JAPAN）

・2007年から実施 25グループ 800人

・農家3戸、農業法人3団体で受け入れ

<目的> アメリカ人等の富裕層を対象に、日本の文化などを知るツアーに日本農業を紹介するプログラム。農家の元気起こしや将来のコミュニティ・ビジネスモデルとして実施。

<実施期間> 4月～10月（毎月の金曜日） 25回

<連携団体> T A U C K（アメリカ・コネチカット州の旅行者）、J T B、受け入れ団体

3、能登オンパク「うまみん」

・2007年から実施 32プログラム 登録会員 350人

・旅館、小売店、酒屋、味噌醸造、農家、漁業組合、病院、地域づくり団体など32団体がパートナー

<目的> 別府ハットウオンパクの手法を使い、地域内の中小企業や地域づくり団体で着地型体験観光の商品を開発しネット販売。埋もれた資源の掘り起こしと磨きをかけることや地域連携で新たな商品開発を支援。本年は能登全域へ拡大。

<実施期間> 秋編（9月～11月） 冬編（1月～2月）

<連携団体> 別府ハットウオンパク、オンパクジャパン、(株)御祖祓川、地域情報誌「Fのさかな」、和倉温泉組合、パートナー32団体

4、ICT活用遠隔地対面販売実験事業

・2009年に実施

・特産品生産者8団体が近江町市場と遠隔地の対面販売を実験

<目的> 販売ツールの弱い特産品生産者に新たな販路を見出すことや、消費者が安心して購入できる仕掛けとして、Bフレッツを使い遠隔地の対面販売を実験した。石川県の台所「近江町市場」と中能登町、能登島町をテレビ会議システムで生産者と消費者を結んだ。

<実施期間> 5月30日、31日

<連携団体> 星稜短期大学、N T T西日本、金沢大学イノベーション創造センター、近江町市場商店振興組合、鹿北商工会、中能登町繊維デザインセンター、中能登町ケーブルテレビ、石川県中小企業団体中央会、特産品生産者8団体

5、ふるさと農業体験

・2000年から実施 町内小学生30人

・山を開墾した石動山の農園で野菜栽培のみならず広葉樹の植植管理、キノコ栽培、野鳥観察、巣箱づくりなども行っている。

<目的> 土づくり、野菜栽培、収穫、販売まで一貫して体験するプログラム。販売

金の全額はユニセフへ募金。体験を通して自ら考えて行動できる力を身に付ける。

<実施期間> 6月、7月、8月、9月、11月 年間6～8回

<連携団体> 石動山テント村、中能登町農林課、中能登町教育委員会、森林組合、  
石川県野鳥の会、(財)日本青年協会、アルプラザ鹿島

#### 6、集落活性化事業

久江集落（人口500人、世帯数180戸）をモデル集落にして活性化の実験を実施。

##### ①幼児世帯ツアー

・2008年に実施 金沢近郊の30組の幼児世帯を招待

・受け入れは介護予防サークル35人

<目的> 金沢在住の転勤者の妻と3歳未満児を久江集落に招き、お年寄りと交流を  
深め、幼児世帯は「緑豊かで人情溢れるお年寄りと交流し、ストレス解消と良い  
子育て環境が生まれる」、受け入れの高齢者は「若い奥さんと幼児を受け入れ、  
刺激と元気を得て介護予防に役立つ」を狙いに実施。

<実施期間> 7月8日

<連携団体> 石川県中山間対策室、久江集落、介護予防サークル

##### ②農村ボランティア交流事業

・2008年に実施

・リコー中部㈱のCSR活動とタイアップ 4回延べ100人（社員）

<目的> 高齢化、人口減少の進み住民だけでは手に負えない桃ヶ滝の整備や遊休農  
地対策を、リコー中部㈱と力を合わせて実施して集落の活力を引き出す。

<実施期間> 7月26日、8月23日、9月6日、9月20日

<連携団体> 石川県中山間対策室、リコー中部㈱、久江住民

##### ③久江ふるさと応援団

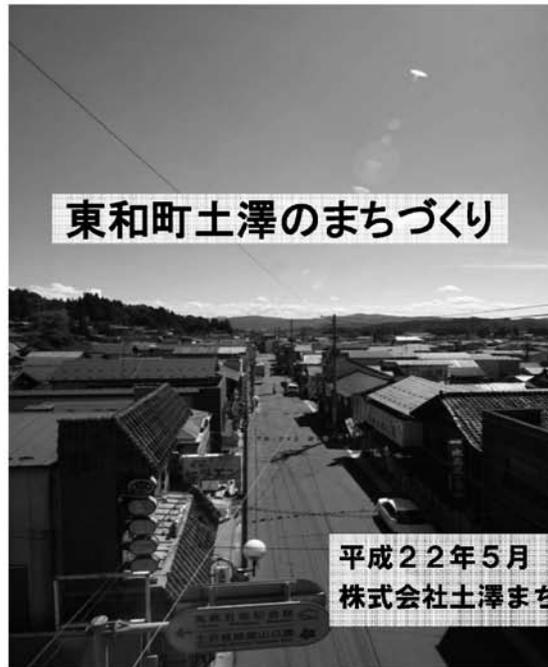
・2009年に実施

・金沢近郊の一般市民 35人

<目的> 身近な都市と農村の交流の在り方として、地域住民と桜植栽箇所の草刈り  
などの作業を実施。継続交流を希望する19名は「久江ふるさと応援団」として  
登録。久江広報の配布や集落行事への参加を促している。

<実施期間> 10月31日（以後、登録者へ広報配布、集落行事に参加）

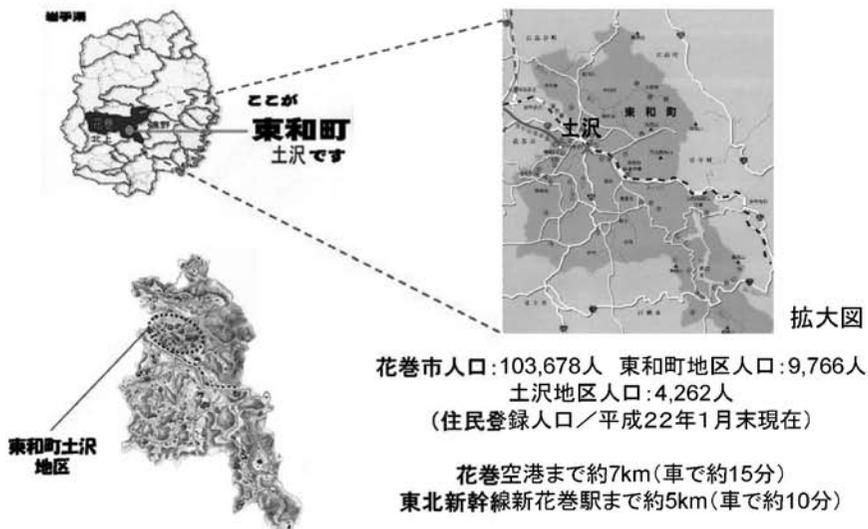
<連携団体> 石川県中山間対策室、金沢近郊市民、久江集落



1

## 東和町の概要

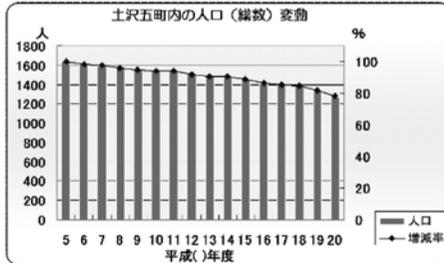
(H18年花巻市・東和町・石鳥谷町・大迫町の1市3町が合併)



2

## 東和町中心市街地の概要

### ● 土沢地区を構成する五町内の人口減少



平成5年のピーク時から約350名が減少。はどめがきかない状態。

毎年約20名(1.25%)が減っている計算に。

### ● 土沢仲町・上町・駅前地区における高齢者世帯の現況



約1/2が高齢者単身・夫婦で暮らしている世帯に

3

## 土澤まちづくり会社の概要

#### 会社概要

資本金 1,000万円(市500万/旧東和町民500万円)  
住民参加協働型第3セクター/平成14年12月設立

#### 株主

102個人団体  
(内6団体法人)

事業方針計画等の決定  
(総会参加)

#### 取締役会

7名(監査役2名)  
役場オブザーバー

経営に関する決定  
(経営責任)

#### 理事

14名  
(参加自由・  
住民株主が中心)

事業活動の推進

#### PJT

事業の実施母体  
(ボランティア組織)

事業内容毎に  
チーム編成

住民参加協働型第3セクター(旧TMO認定組織/中心市街地活性化機構)

- ①出資者を町(50%)と共に住民に呼びかけ、全員の参加のもと設立した。
- ②会社の取締役組織とは別に、まちづくり事業に参加する理事組織を設置し、まちづくり会社と理事会による協働のまちづくりを目指す。
- ③取締役会には行政が直接参加せず、自立性を確保。経営責任を行政は負わない。行政は筆頭株主としての権限を持つ。

#### 土澤まちづくり会社の目的

- ①土沢中心市街地コミュニティの復興
- ②商業・商店街の活性化

4

## 土澤まちづくり会社の主な活動

- 「館山つつじ祭り」(2003年～;商品開発)
- 全国地芝居サミットin東和の支援
- 街なか連続劇場(落語寄席、ストリートコンサート、ミニ劇団ライブ)
- ゴミの堆肥化と有機農産物の特産化
- **歩道の確保と「道路の社会実験」(遊びの歩道、オープンカフェ)**
- 街なかギャラリー、絵手紙講習会と展示
- **店舗・住居の共同化と「歩道の確保」**
- コミュニティガーデンの整備
- 「館山」と商店街の回遊性(路地裏ネットの活動)
- まちづくり講師の派遣及び視察の受け入れ
- TMOニュースとサポーターづくり
- 上町地区共同建替え事業(事業コーディネート)
- 土澤ちょこつと市(事務局コーディネート)
- エコ・コミュニティレストラン事業
- 街かど美術館アート@つちざわく土澤)
- 土澤ちょこつと市(毎月第4金曜開催) など



遊びの歩道



エコ・コミュニティレストラン

5

## 道路の社会実験

### ◆2003道路の社会実験～地域住民による「遊びの歩道」創出実験～

都市計画道路の拡幅を想定し、現道の片側に3.5mの歩道を設置(片側相互一方通行)



### ◆2004道路の社会実験～「にぎわいの”みち”暮らしの歩道」協働型創出実験～

現道を拡幅された歩道と見立て、オープンカフェを開催。2度の社会実験は、地域住民が主体となって土沢にしかない方法を見つけ、まちづくり事業を展開するスタートとなった。



6

## 街かど美術館 アート@つちざわ<土澤>

### ＊アート@つちざわ<土澤>

2005年から実施している『街かど美術館』は、花巻市との合併前に東和町のカタチを残したいという想いからはじまった。



7

## 上町地区共同建替え事業

### 移り変わる地域の姿

商店街の空洞化

人口減少

建物の老朽化

空き家の増大

(都計道拡幅計画を見越した移転の見送り)



《想い》

「私は土澤が大好きです。生まれ育った愛着あるこの地で最後を迎えたい」



店舗と住まいの共同建替え

～生まれ育った土沢で暮らし続けるための方法～



地域再生計画策定（2007.7認定）

テーマ：住む人にやすらぎを与えるまち 土澤

「コレクティブタウン構想（新・長屋暮らしのすすめプロジェクト）」の策定

8

## 「環境」と「地域」と「人」にやさしい共同化



土沢共同化  
1階 平面図

**身の丈にあった  
三層の優良建築物等整備事業の実現**






現況敷地写真(北側・南側)

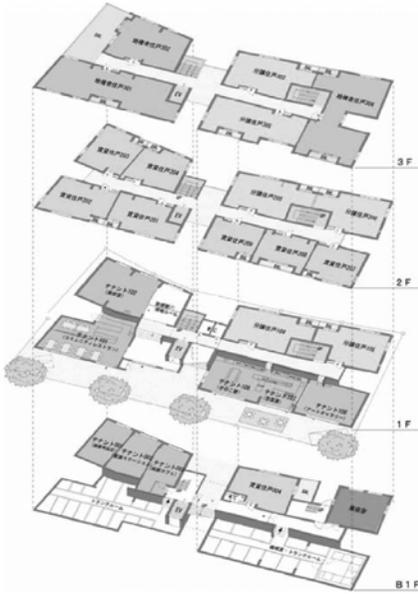
9

## 共同建替え事業の概要

事業主体	東和町上町地区建設組合(権利者5名)	
施行者	合同会社(LLC) 土澤長屋暮らし(2008.2設立)	
コーディネート	株式会社土澤まちづくり会社	
協力	早稲田大学都市・地域研究所 (社)コミュニティネットワーク協会	
地区面積	1,039.64㎡(約0.1ha)	建築敷地面積 768.39㎡
建築面積	495.46㎡	建築延床面積 1,853.46㎡
規模構造	地上3階・地下1階建て 鉄筋コンクリート造 一部木造	
主要用途	住宅	827.30㎡ 17戸(うち地権者用3戸 分譲5戸 賃貸9戸)
	店舗	320.38㎡ 8店 喫茶店、きのこ屋、健康用品店、訪問看護ステーション、美容室、コミュニティレストラン、惣菜屋、アートギャラリー

10

## 施設建築物「こっぼら土澤」の概要



### こっぼら土澤とは

『こっぼら』とは『コーポラティブハウス』（みんなでつくりあげる住まいの意）を「こっぼら・ていぶ・はうす」と土沢風に洒落た言い回しをしていたことから名付けられました。



15坪タイプ



10坪タイプ

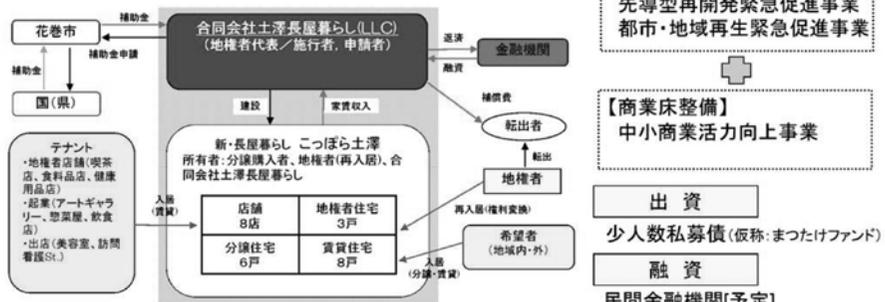
ただいま入居者募集中！

11

## 共同建替え事業の流れ

### 事業期間中

・LLCが地権者を代表し、事業を行う。（補助事業の申請等）



### 建物完成後

- ・地権者住居は権利変換。分譲住宅については、売却。
- ・共用部は建設組合で持分所有。
- ・LLCは賃貸住宅と店舗部分を所有する。
- ・土地は、地権者と分譲住居購入者、LLCの3者が持分で所有する。

12

参考資料：パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」 富永一夫氏

地域力の創造に向けて

**地域づくりにおける  
NPOの役割**

NPOフュージョン長池 富永一夫

1

**実績**

2

**地域経営の4+2資源+事務局**

人  
物  
金  
情報  
時間  
協働  
事務局

3

**地活隊(ちいきたい)  
地域活性化支援事業**

94年: 居住団地の組織化に貢献  
95年: 第1回長池ぼんぼ祭りを実施  
2007年は、4500人規模に成長。  
主催団体: 見附ヶ丘連絡協議会  
01年: 国民生活白書に掲載。  
05年: 「多摩NPOセンター」の業務を受託  
多摩市と契約、08年他団体へ継承。

4

**自然隊(しぜんたい)  
長池公園(自然保全型公園)  
支援事業**

95年: 「長池おっちゃんクラブ」を結成 都市機構と協働  
「長池里山クラブ(任意団体)」に発展  
01年: 八王子市と契約して、「長池公園自然館」の業務を受託  
国土交通大臣表彰、東京都知事表彰を受賞  
国土交通白書へ掲載  
06年: 「長池公園(20ha)」の指定管理者 八王子市と契約  
(株)富士権木、(株)ブレイスとの協働事業を継続

5

**夢伝隊(ゆめつたえたい)  
地域広報活動支援事業**

95年: ぼんぼこかわら版の発行  
都市機構発行の「かわら版」へ編集協力  
「長池ぼんぼこかわら版」として  
自主発行継続 地域10000世帯へ配布  
10年: 「みんなの長池」広報紙として継承  
97年: ぼんぼこホームページを開設  
<http://www.pompoco.or.jp/nagaike/>

6

### 高支隊(こうしたい) 高度情報化支援事業

- 00年: 長池地域にADSL500回線を契約  
（株）東京めたりっく通信との協働事業  
01年: 総務省関東総合通信局長表彰を受賞  
03年: 自然館や多摩NPOセンター及び高尾山の  
ライブ中継へ発展  
八王子市、多摩市、㈱エイビット、  
㈱エーデンとの協働事業  
内閣府防災白書に掲載。

7

### 住見隊(すみたい) 住宅管理支援事業

- 00年: マンション(団地)の自主管理化を支援  
5団地の自主管理化に成功  
組合費引落指示代行、月・年会計報告書作成、  
修繕、清掃等業者紹介  
06年: 「暮らしと住まい相談センター」へ発展  
国土交通省、多摩市、京王電鉄との協働事業  
08年: 「町会・自治会・管理組合」との連携を実施  
09年: NPOフュージョン長池の相談業務として継承

8

### 夢見隊(ゆめみたい) 夢の住まいづくり支援事業

- 04年: コーポラティブ住宅14戸完成  
岡建工事、中央労金、富士植木、  
都市機構との協働事業。  
07年: コーポラティブ住宅6戸12月完成  
岡建工事、中央労金、富士植木、  
都市機構、ミサワホーム東京と協働

9

### 食生隊(しょくいきたい) 毎日の食をること支援事業

- 08年: 「きみどりキッチン(総菜・弁当・飲食)」  
を1月15日に開業  
ケイ・エイチ デリカ(株)との協働事業

10

### 調部隊(しらべたい) NPOフュージョン研究所

- 00年: NPO「ぼんぼこ」出版(NHK出版)  
04年: 「NPOの底力」出版(水曜社)  
多摩ニュータウン人口・住宅実態調査  
都市機構より受託  
05年: 「多摩みんなのでつくる暮らしの安心づくり産業  
のための基礎調査」 国土交通省住宅局より受託  
06年: 「第1回ニュータウン人線卓会議」を実施  
07年: 「八王子市長池公園を事例とした参加型公園管理  
評価のための基礎調査」  
国土交通省都市・地域整備局より受託  
多摩大学総合研究所と協働

11

### 多摩NPOセンター支援事業

- 05: 多摩NPOセンター(多摩市)  
地域密着型NPO活動支援センター  
公設・民営を受託  
09: NPOアート多摩へ後継を託す。

12

指定管理者  
フュージョン長池公園における  
NPOの役割

13

八王子市指定管理者  
フュージョン長池公園の構成団体

- 代表団体：  
NPOフュージョン長池
- 構成団体：  
(株)富士植木 (株)プレイス

14

八王子市指定管理者  
フュージョン長池公園の経緯

- 2001年7月～2006年3月  
NPOフュージョン長池が体験学習施設  
長池公園自然館の業務を受託
- 2006年4月～2009年3月  
第1期指定管理者
- 2009年4月～2014年3月  
第2期指定管理者



15

2006/2007/2008年度の成果

- 来園者数(推計): 123,053人/155,537人/176,143人/171,468人
- ボランティア参加: 3,203人/4,707人/5,446人/4,883人  
16,245時間/24,386時間/30,421時間/28,507時間
- 体験学習参加者: 4,169人/3,507人/4,570人/3,630人  
620回/470回/631回/302回
- 小学校総合学習利用: 649人/1,291人/1,412人/1,394人  
14回/31回/24回/25回
- 中学校総合学習利用: 303人/184人/353人/76人  
11回/6回/8回/9回
- 視察(国内): 226団体/247団体/255団体/280団体  
2,976人/3,581人/3,335人/3,842人

16

八王子市長池公園の管理・運営とコミュニティ形成の融合

●子どもたちの遊び(総合学習、生涯学習) ●高齢者の生き甲斐(体験学習、ボランティア) ●自然館の楽しみ(ワークショップ)



17

フュージョン長池公園の活動を  
持続可能にするもの

- ヒト：  
行政人・企業人・教育人・福祉人・地域人の融合
- モノ：  
公共財産と寄贈品財産の融合
- カネ：  
行政資金とNPO法人が生み出す資金の融合
- 情報：  
情報発信力

18

ヒト：行政人・企業人・教育人・福祉人  
・地域人の融合

＜行政人の協力＞

- 八王子市公園課の日常的な理解と協力
- 東京都西部公園緑地事務所の協力
- 国土交通省公園緑地景観課の協力

---

19

ヒト：行政人・企業人・教育人・福祉人  
・地域人の融合

＜企業人の協力＞

- (株)富士植木の協力  
社歴160年の企業としてノウハウと実務で協力
- (株)プレイスの協力  
里山コンサルタントの内野秀重氏を派遣

---

20

ヒト：行政人・企業人・教育人・福祉人  
・地域人の融合

＜教育人の協力＞

- 幼稚園・保育園  
日常的なお散歩コースとして協働
- 小学校・中学校  
総合学習の一環で協働
- 大学  
学生：インターンシップで協働  
教員：調査研究で協働

---

21

沼池清掃(小学校総合学習)

首都大学東京 環境管理の研修

東京学芸大学インタープリテーション実習

東京家政学院大学インターンシップ

---

22

ヒト：行政人・企業人・教育人・福祉人  
・地域人の融合

＜福祉人の協力＞

- 福祉作業所の物販で協働
- ・八王子市  
かたくりの会・ぶらさdeかたくり・ふきのとう・ひのき工房・八王子いちよう福祉作業所・もぐらはうす・サンフレンズ八王子・ポケットクラブ・木馬工房
- ・町田市  
花の家・町田ゆめ工房
- ・多摩市  
多摩草むらの会(遊夢)

---

23

---

24

ヒト：行政人・企業人・教育人・福祉人  
・地域人の融合

＜地域人の協力＞

- ボランティアで協力  
2009年度  
延べ人数： 4,883人  
延べ時間数： 28,507時間
- 有給スタッフで協力  
一人一人が複数の職能で協力  
2009年度  
延べ時間数： 約18,000時間



25

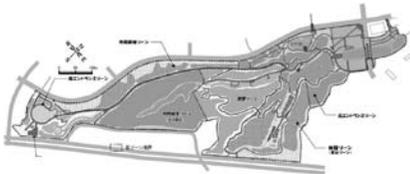
モノ：公共財産と寄贈品財産の融合

＜公共財産：八王子市長池公園＞

- 多摩丘陵の原風景を残存させた自然保全型公園(20ha)  
公園利用ゾーン・観察ゾーン・里山体験ゾーン・特別保全ゾーンに分かれ、源泉の湧水による長池・灌漑用の築池・遊水用の姿池と3つの池、体験学習施設の自然館(1,300㎡)、農作業用の作業小屋、水車小屋、炭焼き小屋等々

26

八王子市長池公園



27

八王子市長池公園自然館



28

モノ：公共財産と寄贈品財産の融合

＜寄贈品(貸与品を含む)＞

- スタジオジブリ：アニメ映画「平成狸合戦ぽんぽこ」の原画(貸与)
- (株)エイビット：インターネットライブカメラ2台分のシステム(貸与)
- カゴメ(株)：毎月70ケース(1,680本)のジュースを無料提供
- 個人：押し花額絵、カワセミの写真、椎茸菌等々と書籍数百冊が寄贈。

29

カネ：行政資金とNPO法人が生み出す資金の融合

＜八王子市からの資金＞

- 八王子市指定管理者協定金(管理・運営費)：  
八王子市の指定管理者としての協定金  
予算上の使途目的はあるが、  
自由に予算執行できる資金。
- 八王子市指定管理者協定金(修繕費)：  
予算管理は八王子市公園課  
予算執行を指定管理者側で行うことができる資金

30

カネ：行政資金とNPO法人が生み出す資金

＜NPOフュージョン長池が産み出す資金＞

- 広報誌への広告掲載料
- 福祉作業所の製品の展示・即売手数料
- 自動販売機の設置とジブリグッズの販売手数料
- 民間助成金、国や公益法人からの助成金
- 活動支援金（寄付金）
- 研修受託費



31

- 研修(含む視察等)事例(2009年度)  
280件 3,842人



32

情報：情報発信力が、情報受信力を育てる

＜自然館で発信する情報＞

- 体験学習の案内チラシ
- 生涯学習の案内チラシ
- 農機具の展示
- 長池地域の模型
- 長池公園いまここ情報等




33

情報：情報発信力が、情報受信力を育てる

＜長池公園で発信する情報＞

- 樹名板
- 植物名ラベル
- インフォメーションサイン
- コーシオンサイン
- マナーサイン
- コミュニケーションボード




34

△まもって安心・長池公園マナー 緑の空間を誰もが安心して楽しめるようにご協力ください。



マナーサイン一覧

35

情報：情報発信力が、情報受信力を育てる

＜かわら版で発信する情報＞

- ぼんぼこかわら版(年4回)  
2010年4月現在66号  
長池公園の広報誌  
「みんなの長池」として  
発行継続



36

情報：情報発信力が、情報受信力を育てる

＜ミニコミ誌の協力で発信する情報＞

- 長池公園の近隣新聞販売店が発行する無料ミニコミ誌（ウエズデイ：約11,000部）に行事を掲載。



ネイチャーイベント  
「水生昆虫観察会」



ネイチャークラフト  
「オリジナルポットに藍の種を蒔きまよう」



企画展示「多摩川源流写真展」

37

情報：情報発信力が、情報受信力を育てる

＜八王子市広報誌の協力で発信する情報＞

- 八王子市広報誌（こうほうはちおうじ）に、「市からのお知らせ」として、行事予定を掲載。



長池里山クラブの活動

38

情報：情報発信力が、情報受信力を育てる

＜長池公園のHPで発信する情報＞

- 八王子市長池公園の情報をHPで発信



39

協働というネットワーク組織

- 地域人と指定管理者（NPO）と地域人の協働
- 地域人と指定管理者（NPO）と行政人の協働
- 地域人と指定管理者（NPO）と企業人の協働
- 地域人と指定管理者（NPO）と教育人の協働
- 地域人と指定管理者（NPO）と福祉人の協働

40

指定管理者の事務局に  
多彩な人材が協力

- NPO関係者という人材  
週末になると集まって様々な知恵を提供
  - ・大学人
  - ・企業人
  - ・行政人
  - ・地域人

41

指定管理者の事務局に  
多彩な人材を採用

- ＜自然館のインドアスタッフ＞  
地域人、一人一人が複数の職能で、可能時間内を働く
- 窓口業務
  - 電話相談
  - 経理業務
  - ホームページ作成
  - サインボード作成
  - 広報活動

42

### 指定管理者の事務局に 多彩な人材を採用

＜長池公園のアウトドアスタッフ＞

地域人、一人一人が複数の職能、  
1週間に3時間から可能時間を働く

- 清掃業務
- 草刈り業務
- 選別除草業務
- 駐車場管理業務
- 修繕業務

43

### 指定管理者の事務局

地域のお世話係り人＝事務局人

- コーディネーター
- プロデューサー
- バランサー
- 広報活動
- 研修担当
- 事業計画作成



長池ほんぼこ祭り

44

### 協働の事務局

＜三層の事務局が要＞

市民活動＝花畑事務局  
指定管理者（NPO）  
＝表土事務局  
行政＝岩盤事務局

45

### 人間力の時代

10代、20代、30代、40代、50代、  
60代、70代、80代の長池公園の  
男女スタッフが、人間力と長池公園等  
の社会資源の有効利用を促して  
持続可能な地域社会を豊かに生きる

46

# 上勝町 ~町の取り組み~

KAMIKATSU TOWN

## 町の概要



上勝町は、県庁から南西方向に40km(車で約50分)の位置にある。地形的には四国山脈の南東山地にあり、標高1,439mの高丸山を最高峰とする山脈が重なり、東流する勝浦川は、深い渓谷をなし、その流域にごくわずかな平地が見られるほかは、大部分が山地で、山腹斜面に階段状の田畑があり、標高は100mから700mの間に大小55の集落が点在している。総面積は109.68k㎡、内85.6%が山林で、そのうち83%が杉を主体とした人工林である。

町の人口は、国勢調査結果によると、昭和30年の6,265人をピークに毎年減少し、平成12年には2,124人で45年間に66%の減少となり、現在(H21.4.1)2,000人、高齢化率は49.50%、過疎と高齢化が同時進行している四国で1番小さな町である。しかし、上勝町では小さくても輝くオンリーワンを持つ農山村となるよう、自立・持続可能な地域であり続けるよう努力をしています。そこで、日本初の設立として全国七つの町村にて「日本で最も美しい村連合」を設立しました。

## 小さな町が大変身

本町は昭和56年2月、マイナス13度という極地的な異常寒波に襲われ、ほとんどのみかんが枯死。本町特産の香酸柑橘であるゆこうやすだちも枯死寸前となり、農業は大打撃を受けた。

これを契機として、町づくりとは何か、町の活性化とは何の課題に、「次代を担う若者定住」と位置づけし農家はもちろん、農協、町、普及所等が一生懸命取り組んだ結果、彩農業や菌床しいたけ栽培、第3セクターによる新しい産業が生まれた。

1Q塾や1Q運動会による人づくり活動など地場産業の振興や町づくりの視察は毎年増え、平成19年度は全国各地から390団体、3,957人が訪れています。



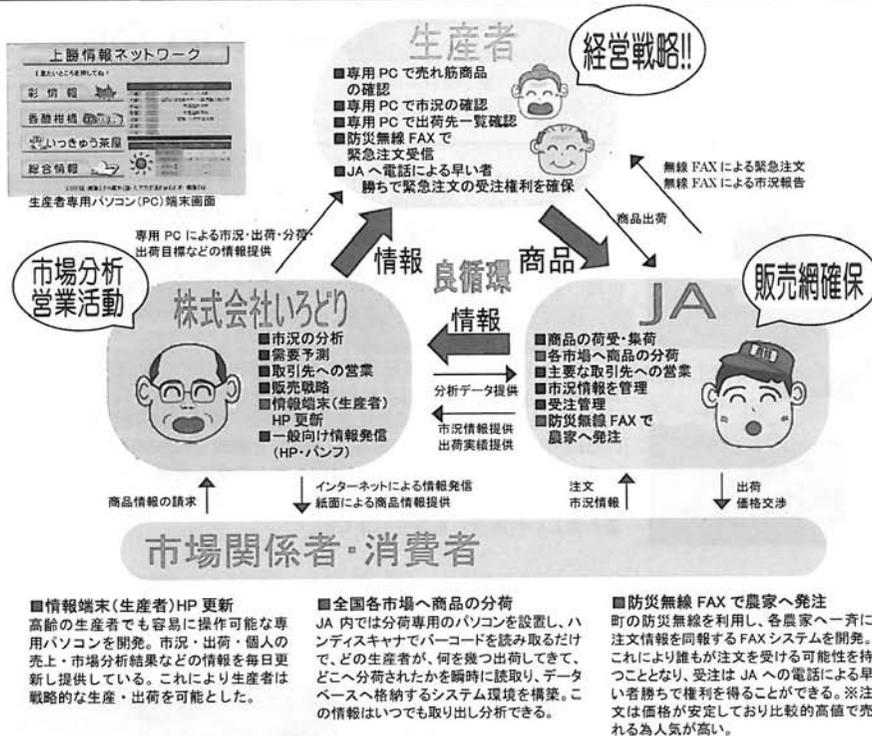
平成15年3月、21世紀を地球環境の時代ととらえ、町の森林農地の適正な管理により「持続可能な地域社会づくり」を目指し、町並びに森林所有者等の責務を明確にするとともに、森林農地の適正管理施策を総合的かつ計画的に推進し、町民の健康で文化的な生活の持続に寄与することを目的に上勝町森林農地適正管理条例が制定された。

また平成15年9月には、焼却・埋め立てによるごみの処理を限りなくゼロに近づける努力をするというごみゼロ宣言を行い、全国的な情報の受発信ができ注目を集めている。



【上勝町キャラクター】

# 彩 事業について



【彩の情報分析をする生産者】

「彩」とは、紅葉、柿、南天、椿の葉っぱや梅、桜、桃の花などで、料理のつま物にする材料として商品化したものです。これらの生産物は軽量で、女性や年輩の方に大変喜ばれ、現在販売額は約2億6千万円程となっている

上記の図のように、農協で収集した販売単価や出荷数量などのデータを(株)いろどりで分析し、農家へ伝達、農家はこれを分析し翌日の生産量や品目の選定の目安にしています。彩事業は、農家・農協・(株)いろどりの3者が一体となって運営されています。

また、出荷・受注業務を効率化する為、防災無線FAX送信システムを始めとするIT機器を積極的に導入した仕組みづくりを行なっています。平成19年7月からは、光ファイバーを使った新システムを稼働しています。

## 一 みゼロ(ゼロ・ウェイスト)宣言



未来の子どもたちにきれいな空気やおいしい水、豊かな大地を継承するため、2020年までに上勝町のごみをゼロにすることを決意し、上勝町みゼロ（ゼロ・ウェイスト）を宣言します。（2003.9.9町議会で議決）

### ■ ゼロ・ウェイストとは？

現在日本では家庭からでるごみのほとんどが焼却あるいは埋め立て処理をされています。これらの処理方法によってわたしたちは多くのお金と、限りある資源を無駄にしています。「ゼロ・ウェイスト」とは、目標年（例：2020年）を定め、リデュース・リユース・リサイクル・リペ

アなどの実践や、そもそもごみにならないものづくりを求めることによって資源を有効に活用し、焼却・埋め立てごみを限りなくゼロに近づけようという取り組みです。

\*ゼロ【zero】・・・「ゼロ」 ウェイスト【waste】・・・「無駄」「浪費」「廃棄物」

■ 現在、一般廃棄物の約80%を資源化している。

■ 特定非営利活動法人、ゼロ・ウェイストア카데미（2005.4.1認定登記）

目的、活動方針はホームはページで [www.zwa.jp](http://www.zwa.jp)

## 上 勝町有償ボランティアタクシー

上勝町有償ボランティア輸送特区事業は、2003年5月に町が、国の「構造改革特区」の認定を受け、町社会福祉協議会に委託し、2003年10月より開始した。

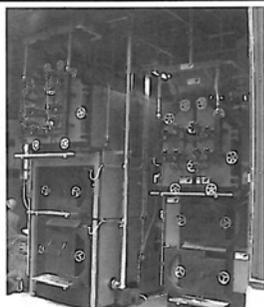
過疎化が進む中、タクシーの休業に伴い交通弱者の移動手段として自家用車等を活用し、路線バスへのアクセス、買い物等のための移動サービスをタクシー代の約半額で（1km＝100円）で提供している。

2006年4月よりNPO法人ゼロ・ウェイストア카데미に事務局を移行し、同年12月末現在、運転手17名、会員登録398名、運行回数937回（延べ1,214名）を移送している。



【上勝町有償ボランティアの仕組み】

## バイオマス事業

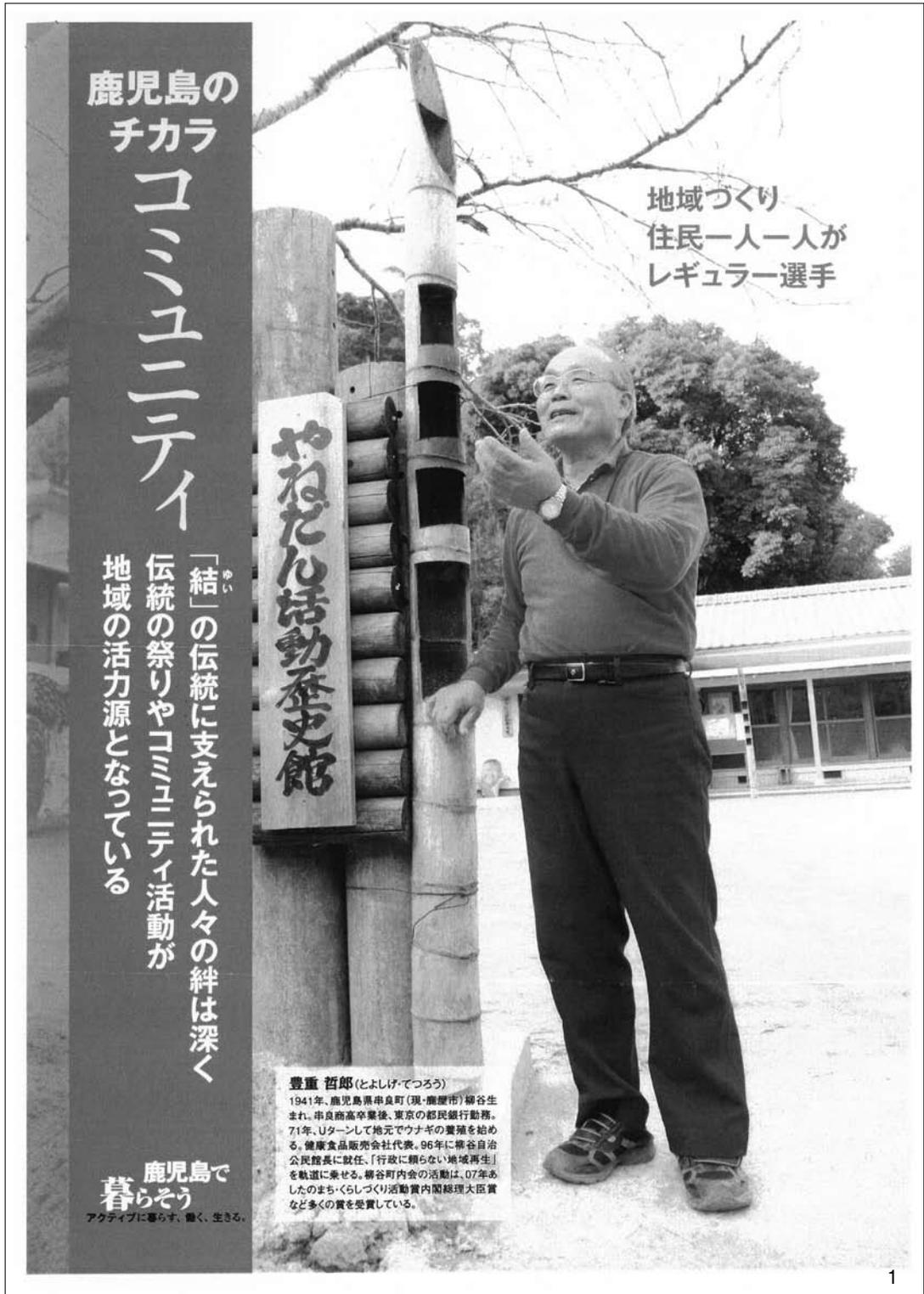


【温泉チップボイラー】

全国に先駆けゼロ・ウェイスト宣言を行った町として、環境をキーワードにバイオマス等未活用エネルギーの積極的な利用・啓発に努めています。

上勝町の86%が森林で、この資源を有効利用するため間伐材等未利用木材を燃料利用することにより、化石燃料の使用削減による地球温暖化・CO2排出抑制を図り、地球環境をよくすると共に、地域経済も好循環するまちづくりを目指しています。

平成16～17年度に環境省の交付金を受け月ヶ谷温泉に木質チップボイラーを導入し運転している。



## 人口300人、 65歳以上が4割。 過疎と高齢化に悩む集落を 自分たちの知恵と汗で 再生させる物語

「やねだんの未来、おまえに託すッ！」  
55歳の公民館長、どうする!?  
豊重哲郎さんは頭を抱えた。  
東京での銀行勤務10年に区切りをつけ、地元・鹿兒島に帰ってウナギの養殖を始め、地元中学校の男子バレー部では熱血指導。弱小チームを強豪校へと育て上げた。96年、そんな豊重さんに長老たちが目を付ける。「哲郎ならこん集落をどげんかしてくるっじゃろ」。リーダーとしての素質を見込まれ、公民館長に。55歳、異例の若さだった。

高齢化と過疎が進む集落。住民たちの表情は暗い。どうしたものじゃろか…。  
豊重さんは思い悩んだ。  
「地域おこしに補欠はない。集落のみんながレギュラーとして活躍してもらおう」。お年寄りから子供まで、みんなを引っ張り出した。まずは自分たちで知恵を出し、汗を流そう。欲しいものはみんなで手作りする。住民が利用する広場や施設は集落300人の共同作業の成果だ。みんなが楽しんで集落を元気にしよう。その根本には鹿兒島特有の濃い連帯感があった。  
鹿兒島県の大隅半島中部、鹿屋市串良町の柳谷集落は地元の呼び名で「やねだん」。戸数約120戸、280人余り。



地域づくりの基本は近所づきあい。豊重さんは言う。「半径百メートル内に住む人のフルネームを覚えて会話をしてみらんですか」。子どもの教育、年寄りの介護、買物の交通手段……。さまざまな話題と課題が見えてくる。



柳谷には独自の地域おこしを学ぼうと、全国各地から年間五千人を超える視察が訪れる。2時間近い講演で熱弁をふるう豊重さん。



上/公民館には柳谷住民の顔写真が飾られている。下/土筆画を壁につめる豊重さん。



公民館横にある「ギャラリーやねだん」。柳谷に移住してきた芸術家たちの作品が展示してある。

この小さな集落が今、地域再生のトップランナーとして脚光を浴びている。集落を率いる豊重哲郎さん（68歳）。「行政に頼らない地域再生」をモットーに、住民総参加の地域おこしを進めてきた。年間600万円の収益を上げ、みんなにボーナスを支給。補助金頼みではなく、自分たちの手で活動資金を稼ぐ。元銀行マンの血が騒いだ。集落の自主財源作りには、遊休地を活用したサツマイモ栽培を始めた。2000年からは土着菌栽培にも着手。畜産農家が多い串良町では糞尿の匂いが悩みのタネだった。これを山林などに生息する土着菌を使い、処理できないかと考えた。以前ウナギの糞殖でヘドロ化した排泄物を微生物で処理した経験がヒントとなった。

米ぬかに菌を混ぜ、自治会員らが交代でかきまぜながら発酵を進め、土着菌を試作。家畜の餌に混ぜると糞尿の悪臭が消え、畜舎のハエ退治にも効果があった。土着菌で育てたサツマイモを使ってオリジナル焼酎「やねだん」の販売も始めた。手打ちそばの店の売上など、集落の収入はウナギ上り。年間約600万円になった。地域再生に取り組んで10年。06年には全世帯に1万円のボーナスを支給することができた。全国的にも注目を集めるようになり、視察や見学は年間5千人に上る。「外からの評価も励みになっ

て次の活動へつながっていった」と豊重さん。「どうしたら地域おこしができそうですかとよく聞かれるが、うちの集落でできたことが他で出来ないはずはない。やる気さえあればどこでもできます」

やねだんで暮らしたい集落のファンを増やすやねだんでは集落の空き家を「迎賓館」と名付け、芸術家に移住してもらって取り組みを行っている。「文化」こそが地域の元気の源であり、未来を担う子供たちのための栄養源になると集落のみんなが考えた。現在、画家や彫刻家、写真家など7人が暮らしている。家賃は3万円。07年からやねだんで暮らす画家・石原啓行さん（38歳）は京都出身。ゲスト第号だ。「みんなが温かく受け入れてくれて感激です」。

芸術家たちが地元の人たちや子供たちと触れ合うことで、集落に新しい風が巻き起こる。迎賓館を会場に「やねだん芸術祭」を開催したり、地元の中学生たちとアーティストが一緒に作品作りを体験する授業も行われ、交流が深まっている。やねだんの評判を聞きつけ「やねだんで暮らしてみたい」という人も少しずつ増えている。

今年、新たに集落の古民家を改装し、農業者の1人暮らしを受け入れる。住民一人一人が主役の地域おこしが、新たな住民を集落に呼び込む魅力となっている。



右/オリジナル焼酎「やねだん」  
左/「とみこさんの豚味噌」。食卓で使いやすいように瓶詰めではなくチューブ入りにした。



鹿児島で暮らそう  
アクティブに暮らす、働く、生きる。

#### 柳谷集落の活動歴

- 平成9年5月 カライモ生産活動。わくわく運動遊園建設。
- 平成10年4月 活動拠点「わくわく運動遊園」完成。
- 平成12年4月 土着菌の製造・活用の開始。
- 平成12年5月 小中学生対象に「寺子屋」運営開始。まさかの時の緊急警報装置（介護用）設置。
- 平成14年3月 土着菌センター建設。お宝歴史館建設。
- 平成16年3月 焼酎「やねだん」開発。
- 平成16年5月 柳谷未来館建設。手打ちそば食堂の開業。
- 平成18年1月 土着菌による足浴オープン。
- 平成19年11月 第一回放線菌世話開講。

#### コミュニティ



収益金を元に、高齢者宅の家庭に無料で緊急警報装置や煙感知器を設置。連絡網を整備した。13年前から父の日、母の日、敬老の日は特別放送を流す。県外に暮らす子や孫からのメッセージを地元の高校生が代読。毎年楽しみにしているお年寄りも多いという。



# オンパクモデルで 地域力磨く

## 別府の成功事例が全国11地域へ拡大

10年ほど前に別府で誕生した「オンパク」のビジネスモデルが、国内各地で地域活性化や人材育成の取り組みとして広がりを見せている。1月末にはいわきつらオンパクが開催されている福島県いわき市に各地のオンパク事業者が集まり、事例報告や意見交換を行った。社団法人の設立も4月に予定され、オンパクモデルの普及・拡大に向けた動きが注目される。

取材・文／鈴木清美

いわき市で1月28～30日の3日間、「オンパク（地域の輝き見本市）人づくり事業研修会」が開催された。今回の研修会は、同事業の枠組みに基づいてオンパクが実施されている全国11地域のうち、函館（北海道）、大館（秋田県）、諏訪（長野県）、熱海（静岡県）、能登（石川県）、総社（岡山県）、都城（宮崎県）の7地域と、主催者の別府、共催者であるいわきから総勢約40人が参加した。

初日の報告会で、各地域のオンパク事業者から取り組みの成果発表とこれまでの総括を行ったのに

続き、2日目の意見交換会では、参加者がグループに分かれて話し合いを行い、地域と運営の両面から洗い出された問題点や対策について、その共有化を図っている。

研修会にオブザーバーとして参加した経済産業省経済産業政策局地域経済産業グループ立地環境整備課の福住知宏・開発一係長は、「ソーシャルビジネスやコミュニティビジネスを振興するという立場から、オンパクのように地域で熱い思いを持っている人たちの取り組みを支援し、その思いを全国

08年1月に初めて開かれた「いわきつらオンパク」は、今年も3月14日までの2カ月間にわたり第3回が開催されている。第1回は60だったプログラム数も100を超え、参加エリアもいわき市の全域に広がった。

に波及させてビジネスモデルを持続的に展開してもらおうことが地域活性化につながっていくはずだ」と挨拶し、研修会での成果発表や総括を今後の施策に反映していく考えを示した。

経済産業省では、地域住民が主体となって地域の問題解決や地域資源を活用したコミュニティビジネスに取り組むことが、地域における新たな起業や就業機会の創出につながるため、そうしたビジネスの成長こそ今後の地域経済活性化にとって重要と位置づけている。

しかし現在、コミュニティビジネスが自立しているケースは少なく、今後の成長を図るうえで、地域におけるコーディネーター機能や人材サポート機能の重要性が高まってきている。こうした実態を踏まえ、経産省は地域におけるコミュニティビジネスに質の高いサポートを行う中間支援機能の役割が必要と判断。その役割を中心的に担うプロデューサー的人材の発掘・育成を行う民間事業者の取り組み支援を目的に、今年度までの3カ年度にわたり「地域新事業活性化中間支援機能強化補助事業」を実施している。07年度には同事業に別府のオンパク事業が採択され、国内各地でオンパクの手法による地域活性化を担う人材育成の取り組みとしてオンパク人づくり事業が展開されてきた。

### 端緒は「別府八湯勝手に独立宣言」

別府八湯温泉泊覧会（通称・オンパク）が別府で初めて開催されたのは、01年10月のことだ。別府は8つの温泉郷（別府八湯）から成る温泉地で、日本随一といわれる湧出量は1日当たり13万キロリットルにも及ぶ。約3000を数える源泉は国内シェ



オンパク人づくり事業研修会のグループワークでは各地域の事業者にも専門家も加わり、問題点の洗い出しや対策の検討も

### ●オンパクが提供するメリット



アの10%を占め、11種に区分される泉質のうち10種類までが別府にはあるという。1871年までさかのぼる別府港の開港以来、恵まれた温泉資源と交通アクセスの発達、地獄巡りなどの観光施設の整備などにより、温泉地として順調に成長してきた。戦後の高度成長期には、一大レジャーブームによって国内旅行が活況を見せるなか、日本を代表する温泉観光地として熱海と並び称される存在となる。しかし、70年代半ばの石油ショックを境に、その後は長期にわたって別府を訪れる旅行者数は漸減傾向に歯止めがかからない状態を続けた。

NPO法人ハットウ・オンパクでは、1976年のピーク時に年間600万人以上に達した宿泊者数が400万人台に落ち込んできた理由について、①別府の人口が10万人を超えて都市化した大温泉地を敬遠する傾向が見られたこと、②長期にわたって右肩上がりの成長が続いたことで自主独立の気風が失われ、大型観光施設や旅行会社などに集客を依存する体質が生じて、徐々に経営者の活気が触まれていったこと、などを指摘している。

その対策として、大型の観光キャンペーンやイベントによる観光振興の取り組みが積極的に進められたものの、顕著な効果も得られないまま低迷傾向が続くなかで、地元の若い世代を中心に、抜本的な対策として、別府に固有の文化や資源を活かしたまちづくりによって地域の特長的な成長を目指す方向性が探り始められることになる。

オンパクの端緒といわれるのが、96年8月8日に行われた別府観光産業経営研究会による「別府八

湯勝手に独立宣言」だ。まだ小さな勢力だった八湯のまちづくりの団体や有志が集まり、それぞれの温泉地の個性を大切に、競い合い助け合いながら誇りを持つ町を作ろうという動きは、別府市内各地へ広がりを見せていく。

その先頭を走っていた別府八湯竹瓦倶楽部は、1879年創設の竹瓦温泉の保存運動や路地裏散歩と銘打った町歩きをはじめ、路地裏文化祭やゆかたdeピンポンなどのユニークな取り組みで2002年には「まちづくり団体総務大臣賞」を受賞するほどになった。

### NPO法人化でビジネスモデルを確立

NPO法人ハットウ・オンバクの代表理事を務める鶴田浩一郎・ホテルニューツルタ社長をはじめとする別府のまちづくりを担ってきた若手リーダーらは、98年から3年間にわたって実施された「別府ONSEN文化国際交流事業」で、滞在リゾート地として持続的に成長している欧米各国の温泉地のリーダーらと交流を重ねた。

この事業を通じ、各地の成長要因の共通点として、①地域の文化と伝統を活かすこと、②地域資源（温泉）を利用した（医療や美容など）新たな産業を育てること、③環境（と温泉資源）を保全すること、という3点が浮上し、別府にとっても地域づくりのためのテーマとして認識されるようになったという。

NPO法人ハットウ・オンバクの理事である野上泰生・野上本館社長は、「この交流事業も含め、



本家・別府のハットウオンバクは今年で10年目を迎える。回を重ねるなかで多彩なプログラムは毎年進化を続けているが、外せない温泉の中でも野湯トレッキングは極めつけのひとつ



第2回「スーラ」は初回よりも拡大したエリアで75プログラムを用意。ベリーダンスによるビューティーレッスンは若い女性の人気を集めた

第1回オンバク開催までの数年間の持つ意味合いが大きかったと思う」と振り返る。

交流事業の期間中には、多くのまちづくり関係者による議論が重ねられ、宿泊者の漸減傾向が止まらない状況の問題として、昭和初期に別府の温泉文化の根幹を形成していた「八湯の文化」「外湯の文化」「湯治の文化」「別荘の文化」「路地の文化」が失われていることが浮上してきていた。

2001年10月に開催された第1回オンバクでは、それまで積み重ねてきたまちづくり運動と交流事業を通じて得られた反省を踏まえ、「別府の将来はこうあるべきだ」というコンセプトを具現化した10日間（野上社長）に、50種類のプログラム企画を用意。総定員3100人に対して総参加者は2397人を数え、定員稼働率77%という成功を取る。しかし、プログラム数や参加者数、定員稼働率といった数字以上に大きな成果が、地域の人々による“気づきと変化”だったという。

「地域の人々が地域を知らない状況だったが、地域を知れば知るほど好きになるという取り組みの価値が理解されると同時に、オンバクがメディアに取り上げられたことで、自分たちが主役という自立的な姿勢に変わり、地域への誇りも持てるようになった」（野上社長）

01年に発足したオンバク実行委員会は、04年には「別府の活性化」と「まちづくりを生業にできる社会の創造」をミッションとするNPO法人ハットウ・オンバクに生まれ変わり、04年から06年にかけて、

経産省の健康サービス産業創出支援事業の下で、運営にかかわる人材・組織の育成、ITシステムの整備をはじめとする事業基盤の強化と事業評価手法を確立する。オンパク開催を通じて、地域資源の発掘と商品化、まちづくりプラットフォームの形成による収益性強化を実現し、まちづくりの推進母体となる自立・持続可能なオンパクモデルを完成させた。

### ノウハウ移行で全国に水平展開

06年10月には、別府以外では初めてのオンパクとなる「第1回湯の川オンパク」が北海道の函館で開催された。湯の川の歴史をたどる街歩き、紅葉の中の呈茶席、海藻おしぼり・箱館焼きなどの教室、エステやマッサージなど54のプログラムが用意され、温泉卓球と芸者遊びがフィナーレを飾った「湯の川オンパク」は、NPO法人ハットウ・オンパクが蓄積してきた事業運営やプログラム企画、ITシステム基盤、事業評価手法などのノウハウが移行され、他地域へのオンパク事業の水平展開が可能であることを実証する形となった。

07年度からは、経産省による地域新事業活性化中間支援機能強化補助事業というスキームの中で、「いわきフラオンパク」（08年1～3月）、「みちくさ小道」（08年9～10月）、「都城盆地博覧会（通称ボンパク）」（08年10月）、信州諏訪オンパク「ズーラ」（08年11月）、熱海温泉玉手箱「オンたま」（09年1～3月）、能登旨美オンパク「うまみん」（09年9～10月）、「美・食・感 大館オンパク2009」（09年10月）など、全国各地でNPO法人ハットウ・オンパクのノウハウに基づくオンパク事業が展開されてきている。

長野県諏訪地域では、第1回「ズーラ」の成功を受けて、第2回では対象エリアが諏訪湖周辺の岡谷市、諏訪市、下諏訪町から八ヶ岳山麓の茅野市や富士見町、原村も含めた範囲に広がった。10年度には「諏訪大社式年造営御柱大祭（御柱祭）」（4～6月）やJRグループなどによる信州デスティネーションキャンペーンも予定されていることから、こ



プログラムを掲載したガイドブックにも各地のオンパクが工夫を凝らす。西の別府に続いて東の熱海が再生に立ち上がり、温泉のない都城でも盆地の営みをアピール

うしたイベントやPR展開との相乗効果による移住・交流促進や旅行者のリピーター化を図るうえで「ズーラ」が重要な施策として位置づけられている。同時に、滞在・交流型の観光地の実現に向けた体制整備、人材育成や地域の人々による参画の拡大などが今後のテーマとして掲げられている。

いわきフラオンパク実行委員長を務める里見喜生氏（古滝屋若だんな）は、「自分の住む町で宝物を見つけ誇りに思った人が何人生まれたか、そして、その宝を活かして磨き残していこうと感じた人が何人誕生したかこそが、本当に意味があり大事なことだ」と語り、オンパクの意義がプログラムへの参加人数や定員稼働率といった数値だけではないことを指摘。「その繰り返しを積み上げた結果、10年後、20年後に、自分の住む町に誇りを持って、自分の住む町で頑張っている人がどれだけいるかが本当の成果であり、その集積が地域力だと思う」と強調している。

また、今回の研修会では、今年4月をめどに「社団法人ジャパン・オンパク」を設立する計画も明らかにされており、来年度からは、この社団法人をベースにポータルサイトの運用や全国キャラバンの展開、各地のオンパク実施団体による地域ブロックごとの研修事業やコンサルティングなどを通じて、オンパクモデルの拡大と定着を図る方針という。

参考資料：パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」本田 節氏

生涯学習がまちをつくる  
一広がっていく「交流」と「生きがい」



熊本県人吉市  
郷土の家庭料理 ひまわり亭  
代表 本田 節

1

故郷 人吉ということろ

- 人吉市(ヒトヨシ)
- 人口 4万人弱
- 農林業、観光業 (人吉温泉)
- 熊本県の南西部に位置し、三大急流球磨川が流れる盆地



人吉球磨地域  
1市4町5村の県南10市町村

2

ふるさとと自慢 ー熊本県人吉市



【国宝青井阿蘇神社 鳥居と網橋】  
【人吉温泉 人吉城址一】  
【国宝 青井阿蘇神社 日本三大急流 球磨川下り】  
【人吉城址 角櫓と長塙】  
【JR肥後線 石のトンネル】  
【特産 球磨焼酎】  
日本の海100選 【瀬目の滝】  
ーラフティング

3

ふるさとの抱える食糧、農業、農村問題

- 高齢社会、少子化、過疎化
- 産業の低迷
- 地域産業の担い手不足
- “食”を取り巻く環境への危機感・不信感
- 日本の食料自給率 約40%、食糧高騰



4

グリーンツーリズムってなに？

- 緑豊かな農山漁村で、その自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動
- 例：農家民泊・農村民泊(商家、漁家、)、農家レストラン、体験(農林漁業体験など)
- 地域住民(農林漁村)・・・感動、喜び、生きがい、地域振興、副収入、地域資源の活用、など
- 都市住民・・・感動、喜び、心身の癒し、健康回復、体験学習、第二のふるさと、など

命を懸けて愛する感動の体験

5

ツーリズムビジネスのキーワード「食」業

- 「食」業・・・「食」に関わるあらゆるビジネス  
農林水産物の生産、農産加工、直売所、農家レストラン、農家民泊、ワーキングホリデー、など



農林水産物の多角化  
グリーン・ツーリズム  
地域振興策のつ  
取り戻し、新たな展開へ  
昔ながらの農林水産業  
「食」業  
近年活発な農村女性による職おこし(朝市、直売所、農産加工など)

6

### 農山漁村の女性達はもともと「食」業の達人だった！



祭事、冠婚葬祭は手もてなし作りの万十などでおもてなし

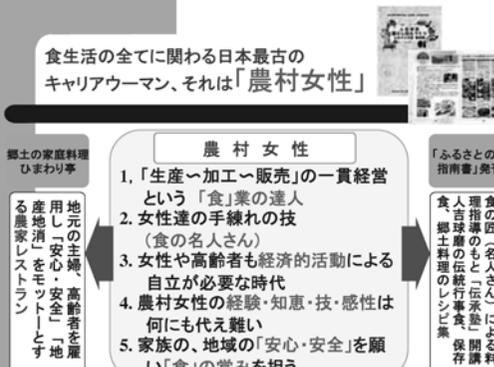
「行商や市での「接客」も一流なのです。」

味噌、漬け物づくりはお手のもの

食品加工は当たり前のことでした。

7

### 食生活の全てに関わる日本最古のキャリアウーマン、それは「農村女性」



郷土の家庭料理 ひまわり亭

「ふるさとの食指南書」発行

食の匠（名人さん）による料理指導のもと「伝承塾」開講  
食、郷土料理の伝統行事食、保存

農村女性

1. 「生産→加工→販売」の一貫経営という「食」業の達人
2. 女性達の手練れの技（食の名人さん）
3. 女性や高齢者も経済的活動による自立が必要な時代
4. 農村女性の経験・知恵・技・感性は何にも代え難い
5. 家族の、地域の「安心・安全」を願う「食」の営みを担う

地元の主婦、高齢者を雇い「安心・安全」を「産地消」をモットーとする農家レストラン

8

### 農家レストラン ひまわり亭 とは？

- ボランティアグループ「ひまわりグループ」  
…独居老人への宅配弁当、地域イベントへの参加など、地域の主婦による活動  
「もっと活動の場を広げたい！」
- 平成10年 有限会社 ひまわり亭 設立
- スタッフ：50～70歳代の主婦16名←「待ってました、定年60歳新入社員」「生涯現役」高齢者雇用型
- 現在、年間約5万人来客および研修

9

### キーワードは「もったいない！」

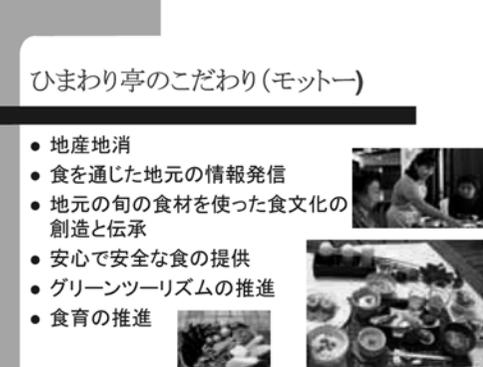
#### ひまわり亭のはじまり

- 地域の財産！「おばちゃん、おばあちゃんの知恵・経験・技・感性」がもったいない！
- 築120年の古民家、もったいない！
- 家に眠る食器、鍋、座布団、もったいない！
- 地域の素晴らしい食材、もったいない！

10

### ひまわり亭のこだわり（モットー）

- 地産地消
- 食を通じた地元の情報発信
- 地元の旬の食材を使った食文化の創造と伝承
- 安心して安全な食の提供
- グリーンツーリズムの推進
- 食育の推進



11



1月 新春寿御膳 3月 お雛御膳 4月 桜咲く花見御膳

ひまわり亭 月替わり御膳

地産地消 食と農の繋がりを体感

5月 端午御膳

12月 あさぎ御膳 10月 秋祭御膳 8月 ひまわり御膳

12

ひまわり亭を拠点に広がる食のネットワーク！



13

女性が主体のツーリズムビジネス

- 全国各地に「女性を主体」としたツーリズムビジネスが展開されている
- 活き活きと輝く女性たちとは？



事例紹介 →

14

いいお客さんばかり来てくれるからのしみなんですよー。普通の旅館では考えられませんよね。だからコレやめられんわあ。



大分県・宇佐市安心院町  
舟板むかしばなしの家  
中山文弘・ミヤ子

15



中山家のおもてなし



16

福岡県・福岡市南区  
農産直売所 ぶどう畑  
新開 玉子

この場所だからできる農業のスタイルがある。都市と農村を繋ぐ役割を果たしたい。



17

「モノを売るだけなら直売所なんてしません。農家の心を伝えたいんです。そのため施設としてここを作ったんです。」



18

参考資料：パネルディスカッション「地域力の創造に向けて」（本田 節氏）



19



20



21



22



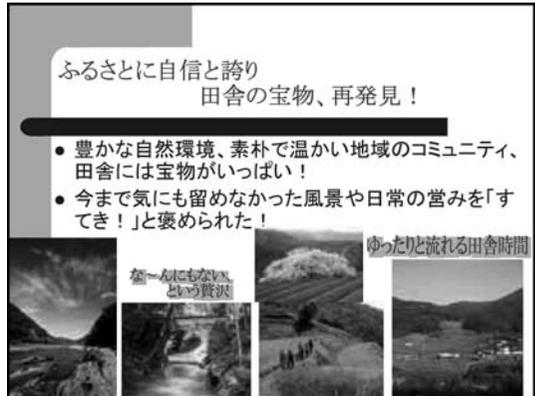
23



24



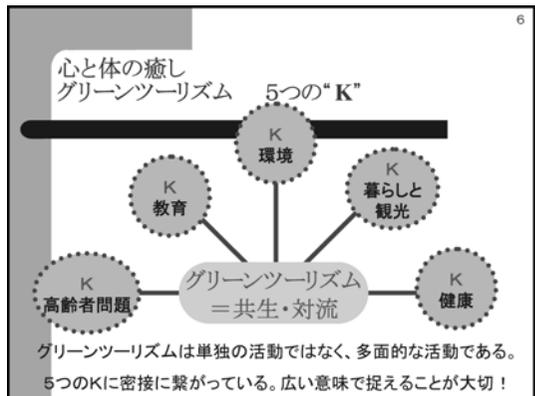
25



26



27



28



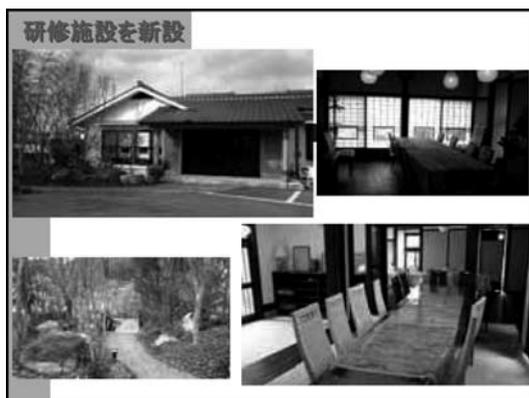
29



30



31



32



33



34



35



36

「生きる」ことの感謝と感動を共有  
～命のコンサート～

**農 食 命**



山北幸「手の記憶」出版  
昭和32年「市房漬」誕生以来  
50年に渡り知恵と情熱を駆使  
してコミュニティビジネスの  
先駆者として活動。  
まだ96歳の命を祝う。

秋の食をいただきます  
ひまわり亭の地産地消  
秋の食(命)を堪能。

ゲスト：一之瀬たけしさん  
18歳で心臓発作に倒れ奇蹟的に  
一命を取り止めたものの高次脳機能  
障害と診断される。彼の一歩の喜び  
である「歌う」ことが脳機能回復の  
きっかけとなった。

37

農家民宿レベルアップ研修(ひまわり亭)  
主催：熊本県ツーリズムコンソーシアム



講師：財団法人阿蘇地域振興デザインセンター  
事務局長 坂元 英俊  
NPO法人きり水郷村  
事務局長 小林 和彦

38

農家レストランレベルアップ研修(山都町にて)  
主催：熊本県ツーリズムコンソーシアム

丸山ハイランド



目的・・・  
県内各地でツーリズムに携わる様々な  
分野のレベルアップ事業を通して  
熊本県全体の「ツーリズムの質の向上」を  
目的としている。

39

九州グリーンツーリズムシンポジウム2009  
前夜祭  
過去最大の300人をおもてなし！

九州の実践者の皆さんが一堂に会する  
「九州グリーンツーリズムシンポジウム」



前夜祭「ムラの旨食大集合」  
食の達人でもある九州中のおばちゃんによる料理を堪能。

40

「地産地消アンテナショップ」開設  
食を通じた情報発信・交流を目指して



人吉球磨おすすめ特産品

41



山北幸(下村婦人会)  
本田節(ひまわり亭)  
師弟物語

第一弾 第二弾

42

「食による地域再生事業化」 3つの条件

1. 個人として納得のいく生き方の追求
2. 社会の抱えている矛盾の解消に立ち向かおうとする姿勢
3. 事業性と共益性のバランスをとりコミュニティビジネスを成立させる → 社会を変革するビジネス

43



44

---

全労済協会 統合5周年記念  
「希望のもてる社会づくり—いま、地域を考える」  
シンポジウム『地域と活性化』

2010年7月

発行 ■ 財団法人全国勤労者福祉・共済振興協会  
〒151-0053 東京都渋谷区代々木2-11-17  
ラウンドクロス新宿5階  
TEL：03 - 5333 - 5126  
FAX：03 - 5351 - 0421

<http://www.zenroaikyoukai.or.jp>

印刷 ■ 有限会社宮田印刷

---

## 「統合5周年記念事業」報告書のご案内

全労済協会では、統合5周年記念イベントとして、これまでの研究成果をもとに、「希望のもてる社会づくり—いま、地域を考える」をテーマに、地域防災や地域活性化、そして、地域コミュニティなどについての問題を取り上げ、記念講演会とシンポジウムを2010年5月と6月に、東京及び福岡の合計4会場で開催いたしました。

その開催結果をまとめ、本冊子「地域と活性化」と同様に、以下の2冊の報告書を発行しています。

### ◆記念講演会『地域と防災』

- 基調講演「大規模災害にどうやって備えるか～二度の地震の経験から～」  
新潟県 知事(中央防災会議 委員) 泉田 裕彦氏
- 鼎 談「どうすすめるか、これからの地域防災」  
内閣府防災担当大臣(国家公安委員長) 中井 治氏  
新潟県 知事(中央防災会議 委員) 泉田 裕彦氏  
連合(日本労働組合総連合会)会長 古賀 伸明氏  
〈司 会〉時事通信社 防災リスクマネジメントWEB編集長 中川 和之氏

○開催日時：東京会場 2010年5月15日(土)13時から16時

○会 場：「九段会館／ホール」 東京都千代田区九段南1-6-5

### ◆記念講演会『地域と協同』

- 基調講演「地域の自立と再生」  
慶應義塾大学 法学部 教授 片山 善博氏
- 鼎 談「どうつくるか、新しい地域コミュニティ」  
国土交通副大臣(\*2010年5月22日現在) 辻元 清美氏  
慶應義塾大学 法学部 教授 片山 善博氏  
労働者福祉中央協議会 会長 笹森 清氏  
〈司 会〉時事通信社 編集委員 升谷 昇氏

○開催日時：福岡会場 2010年5月22日(土)13時から17時

○会 場：「都久志会館／ホール」 福岡県福岡市中央区天神4-8-10